

輝け！イチ・ニ・サンシャイン!!

N応P

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市、駿河湾の潮の香りの風とともに数年ぶりに彼は現れた。戻ってそうそう幼なじみから頼まれ『廃校』決定を相談されることに。

そして今、彼と彼女たちは伝説をつくる？物語が今始まる。ときは騒ぎ。ときは楽しみ。もちろん歌い踊り、アイドルをする。

そして、彼女たちは気づくのであった。彼の秘密に、自分たちの心に――

また彼、彼女たちと小説に出てくる実際の沼津を巡って楽しみませんか？（第15話裏で詳しく紹介）

目次

第1話	輝きを探して	1
第2話	第一印象は自己紹介	4
第3話	朝は皆、仲良く登校	10
第4話	見ていてね	14
第5話	明日は青空	17
第6話	日曜日の午前	21
第7話	日曜日の午後	25
第8話	月曜日は憂鬱	29
第9話	愉快的な月曜日	34
BS	今日は何曜日	38
第10話	図書室での水曜日	45
第11話	火曜日の出会い	51
BS	小さな原っぱは大きかった	58
第12話	謎が謎の木曜日	68
第13話	解答する木曜日	73
BS	「良い」より「善い」人	78
第14話	金曜日の放課後	87
BS	奏でる桜色	95
BS	勇気ある小人	103
第15話	休息のはずな土曜日	112
第15話 (浦)	沼津の紹介	118
第16話	気になった彼女の正体は	123
第17話	暇な日こそ暇	131
第18話	春と夏の間で	139

BS	あなたの愛の約束	144
	1年間ありがとう(まだまだ続くよ)	152
BS	南からのそよ風	155
BS	今日っていう日にハナマルをください	162
第19話	雨が降るのは梅雨だからさ	167
第20話	あの日の花火を忘れない	171
第20話(浦)	沼津を紹介II	176
第21話	都会へGO!	180
BS	海は地平線まで続いている	185
第22話	都会の空	194
第23話	挫折と後悔、そしてもう一度	200
第24話	ここで待っている	204
第25話	離れて近づいて	214
第26話	妹です	225
第27話	姉です、妹です	233
28話	姉です、妹です(鹿角姉妹)	238
第29話	思いは風に舞う羽根のように	242
第30話	輝け!	249

第1話 輝きを探して

静岡県沼津市にある私立浦の星女学院。そこは急な坂の上であり、駿河湾と町が一望できる高校。

そして、その坂の下で自転車を持って立ちすくんでる人が一人。

「えー、これを登るの?」

今すぐ帰りたいかった。

学校の授業中に携帯に連絡がきた。

内容は『助けて!』その一言だけだった。

それでも、学校を早退して自転車をこいでここまで来たのはいいが、よく考えたら……

「今から行くの、女子高だった!」

そう。連絡をよこした相手が通う女子高。

キーコーンカーコーン

やべ、授業が終わった!どうしよう!これは行かないといけない雰囲気!

「えーい!何に悩んでいる!」

自転車のペダルに足をかける。

「アイツが!」

足に力を入れる。

「俺に!」

一歩を進める。

「助けてって言ったんだー!」

坂を登る。

……数分後……

「はあはあ、うーはあー」

坂の中間で自転車を押して登っていた。

しかたないだろ!この坂登るにつれ急になるんだもん!あんなこと言っただけでもう疲れたよ。

けど、顔を上げれば学校が見える。なんでだろうね。さつきから歩いているのに近づく気配がしない。

まあ、それは気のせいで肩で息をきって登りきった。
それで、俺はどうすれば？

腕を組考えていると回りから視線を感じる。

あー、これはあれだ。

「そのの、君」

ほーろ、来た。

俺は両手を素直に上げ、振り向く。

そして、俺は膝をついた。

「神は俺を見捨てなかつた！」

神はいないと思つたが、ごめんなさい。神はいたよ。なぜなら目の前に黒髪美少女がいたのだから。

「な、なんなの。貴方は！」

おっとこれは彼女が俺の言動にさらに怪しい視線を。

「これは失礼」

立ちあがり自己紹介をする。

「俺は沢田さわだ誠まこと。この学校に通つてる知り合いに呼ばれて来た」
頭を下げる。

それは綺麗に90度。

「そ、そう。私は黒澤くろさわダイヤだいやよろしく」

「え、ダイヤ？」

「なにかしら？なにかおかしいかしら？」

ため息をつく彼女をみて何故か自然と言葉が出た。

「なんか運命を感じるな」

「な、なによいきなり！」

「いや、俺の誕生日石と一緒にだから」

「な、なな、なんなのよ！本当に！」

あれーなんか顔を赤くして怒ってる。

「それより、用があつて来たのでしょ！」

「そうだった！」

これでは俺は骨折り損のくたびれ儲けではないか！いや、儲けはあつた。黒澤ダイヤという美少女に会えたことだ。

「えーと、呼んでほしい奴がいるんだけど」

「一体誰かしら」

「いつも元気な奴で、名前はた——」

「まー君！」

懐かしい俺の名前を呼ぶ声。

「大変なの！学校が無くなっちゃうのー！」

俺の幼なじみは目の前まできてそう言った。

第2話 第一印象は自己紹介

目の前にやってきた幼なじみはあーだ、こーだと言っては俺の体を揺らす。

「落ち着きなさい、高海さん」

ダイヤさんがこのバカの制止をする。

「やるなら、この坂を転がしなさい」

そうそう。坂に転がす。

「つて、なんでだよー！」

手を振りほどき解放される。

「なんで、坂を転がされなければならぬんだ！」

「あなたみたいな野蛮な人を女子高に近づけるわけにはいかないでしょう」

野蛮な人つて。俺なんかしましたけつて？

「なんか、仲良しだね。まー君とダイヤさん」

「そうか？」「そうかしら？」

二人ともこの幼なじみが言ってることに首をかしげる。

「うん！だってあの人を寄せ付けないダイヤさんが初対面のまー君とこんなに話してるもん！」

「高海さんそれはどういいうことかしら？」

「え、それはー」

目を泳がすバカチカこと、高海^{たかみ} 千歌^{ちか}。

小さい頃からの仲がいい幼なじみの一人。いつも元気よくこちらも元気にしてくれるところはいつも感心する。

けれど、相変わらずバカで元気だな。よかった。

「おーい、千歌」「勝手に行くな」

後ろのほうから声とともにやってくる。

「おーい、2人とも。早くはやく」

千歌の隣に来た、2人は俺の顔を見て、

「え、誠！」「だれ？」

驚いた顔をみせる。

「あ、久しぶり。果南姉」

まつうら かなん
松浦 果南。

久しぶりの再会だ。

果南姉こと松浦果南は千歌より一つ歳が上のため俺は親しみを込め果南姉と呼ぶ。もう1人の幼なじみのしかり者のため姉と言っても違和感がない。

「どうして誠がここにいるの？」

果南姉は顔を近づけ圧迫される。

「あ、あれー、しなかったっけ？」

「してない！」

とぼけても無駄だった。

「千歌に呼ばれて、来たんだよ。それで要件はなんだよ」

「あ、そうそう。とにかく紹介したい人たちがいるんだ！」

千歌に手を引かれ校内に足を踏み入る。

「そういうことならー」「面白そう！」

果南姉ともう一人の子も背中を押す。

「ちよ、おいー！ー！」

俺の抵抗はむなしく空に響くだけだった。

腕を引つ張られ、背中を押されて空き教室に連行された。

そこには、5人の女の子たちがいた。

「紹介するねー！スクールアイドルAqoursだよ！」

千歌の紹介に困惑する俺と彼女たち。

「もう少し詳しく説明をしてくれないか」

「あ、そうだね。話しが長くなるけど——」

本当に長かったため、いやどうでもいい話しが多かったため割愛。

要約すると、浦の星女学院は廃校が確実に確定したようだ。それを阻止するため千歌は今話題のスクールアイドルを立ち上げた。まあ、千歌のμsが廃校を実際に阻止したから、「高坂さんができたなら私たちにもできる！」とμsの話が多く、そして何とかできたスクールアイドルがAqoursだそうだ。

メンバーは、千歌と果南姉とさつき会った、

「紹介が遅れたね。渡辺わたなべ 曜よう。特技は高跳びと天気予報！特技は前
逆宙返り3回半抱え型！よーそろー！」

最後に敬礼を決める。千歌に近い雰囲気をかもしだしている。けど、千歌とはちがいがい賢さもある。

「ぜ、ぜん何とかはわからないけど、よろしく」

次は、まさかの外人さんなのか金髪の、

「あ、私は小原おはら 鞠莉まり。気兼ねなくマリーって呼んでね。あなたに魔法をかけてあげるわ」

河南姉と同じ三年のようだ、少し間抜けさをかもしだしている。

「あ、日本語OKなんだ」

次は、背が低い二人組。

「オラ……、マルは国木田くにきだ 花丸はなまる。一年ずら」

茶色の髪の毛で小さく震える彼女と、

「わ、私……く、黒沢ルビィ……よろしく、お、お願いします」

小動物のように目をうるうるさせる少女。

「おびえないで、悪いようにしないから」

この言い方は危ないな。次に行こう。

「そして、このヨハネこと津島つしま ヨハネよ。あなたをリトルデーモンにさせてあげる♪」

なんていいいますか、キャラが強い子であります。

「あれ、ヨハネ？聞いたことあるぞ……」

それも、かなり昔に。頭を回転させながら、次に。

「桜内さくらうち 梨子りこ。東京から転校してきました。よろしくお願いします」

大人びた少女は、千歌と渡辺さんと同じ二年せだと感じさせない。

「そうなんだ、俺と一緒にだな、転校生」

「そして、あと一人——あれ？」

千歌があたりをききよろきよろと頭を振る。

「ダイヤさんは、どこ？」

「これは、あれだ」

「置いてきちやったね」

果南姉と渡辺さんがため息をつく。

そして、数分後……

遅れてやってきたダイヤさん。

「どうやら、ダイヤさんもA p o u r sのメンバーの一人であったよ
うだ。」

それから、俺も挨拶をすませた。

「総勢9人のスクールアイドル。どう、すごくない！」

きらきらの瞳の千歌は犬に見え、頭をなでる。

「すごいすごい、それで俺を呼んだ理由を聞こうか」

「あ、忘れていた。ごめんごめん」

俺、お前のために学校休んで来たんだぞ！

「まー君には、このA p o u r sのプロデューサーになってもらおう
と思つて」

「「「「「はぁー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」」」」

教室に千歌を除いた9人の声が響く。

「お前、またなんで勝手に」

「そうだ、なんで勝手に」

「千歌らしいと言えば千歌らしいけど」

「千歌ちゃんには時々あるからね」

「それでも今回はいくらなんでも急ね」

「そうよ、ヨハネは聞いてないわよ」

「お、男の人が——」

「ルビィちゃん。しっかりして」

「高海さん、認められないわ」

俺、果南姉、渡辺さん、桜内さん、小原さん、津島さん、ルビィさ
ん、国木田さん、ダイヤさんが口々に言う。

「いい考えだと思うのに。まー君のなにか問題なの？」

「彼に問題は……いくつかあるけれど」

え、あるの問題！

「男子が女子高にいるのが問題なの」

「大丈夫、まー君はそんなそこの男子と一緒にじゃないから」

「そういう問題では——」

「なんなら、一か月、まー君を試したらどうかな？」

「試す？彼を」

「そう。一か月まー君をこの学校に来てもらって、A p o u r sのサポートしてもらおうの」

「サポートって、例えば？」

「えーと、水分準備とか」

「御菓子を準備してもらおう」

「お、いいね。なら、私はみかんがいいな」

おい！それただのパシリだろ！小原さんも混ざらない！

「それに、生徒会の手伝いする条件で」

「なるほど……、女子高のこの学校に男性の力仕事も必要ね」

いや、ダイヤさん。それって俺だけが疲れますよね？俺だけがあの坂を上るのでしょ？

「とりあえず、一か月は……様子見ね」

「やった！」

喜ぶ千歌と何故か頬笑むダイヤさん。

俺はその場で力なく座り込む。

「大丈夫ですか？」

「うん……ありがとう」

桜内さんに助けてもらった。

「……やっぱり」

「え、なんか言った」

「あ、いえ。なんか大変になりましたね」

「まあ、千歌の強引さは慣れたから」

いやな慣れを覚えてしまった。

「私と一緒にすね」

笑う桜内さん。

「私も千歌ちゃんの強引さでスクールアイドルを始めたから」

「そうなんだ。後悔してる？」

「いえ、後悔なんて。逆に感謝です」

桜内さんの目は笑う千歌を見る。

「それは、わかるよ」

立ち上り俺も、千歌を見る。

「千歌と関わって後悔したことはない」

「はい」

二人に映るのは俺たちをいつも引つ張ってくれる、存在。

「とりあえず、こちらから一か月よろしくね」

「こちらこそ、一か月よろしくお願いいたします」

第3話 朝は皆、仲良く登校

あれから時間が過ぎてお日さまぽかぽかな土曜日。

10:25、本当なら家でゴロゴロしてる時間なのに。

けれど、お呼ばれをもらったので潮の匂いとカモメの声を堪能しながら自転車をこいでいた。家は沼津市街にあるため目的地、浦の星女学院までは遠い。

え、バスを使えばいいって？

学生がバスを使うのは少しお金がかかる。それに、沼津は田舎と言っても過言ではないほどの田舎だ。田舎者はお金を使わない。移動できる範囲は自転車を使う。

沼津で自慢できるものは、干物とお茶、みかんくらいの物だ。

食べ物以外で言うなら、富士山が見えて、海があり、日本で深海に近いと有名。千本浜も有名な場所だ。

なんか、自分で言っていて悲しくなってきた。

このトンネルを抜けて少し先が、目的地。

「ご、ごめんなさーい！」

悲鳴に似た、謝り声が聞こえた。

それにこの聞き覚えがある声は。

「やっぱり、ルビイさん？」

声が出た方向に行くと犬に怯える少女、ルビイさんが。

「あ、えーと……」

犬と俺を交互にみて、

「ご、ごめんなさーい！」

また、謝った。

「えーと、これは……」

推理してみよう。

目の前に、おびえる少女と小型犬・チワワ、そして俺。

あれ、なんで俺も怖がられるんだ。犬はわかるとして、俺は人間。

「うーん、まあとにかく。お手」

俺は右手を差し出す。

「え、えー！お、おお手！」

ルビイさんが恐る恐る、右手を差し出す。

「わんっ！」

手をのせるチワワ。

「おー、えらいえらい」

わしわしすると、気持ちよさそうにするな。

「え、ええ、どうまつてるの？」

またオロオロするルビイさん。

「犬、苦手なでしょルビイさん」

「う、うん……」

「なら、犬の相手は俺がしているから、今のうちに」

「あ、ありがとうございます！」

ゆっくり離れてある程度距離をとると、走って行ってしまった。

「はは、よっぽど怖かったんだな。お前も大変だな」

「わんっ！」

チワワと少し遊んで、我に返ると10分も遊んでいた。

自転車にまたがり急いでいると前方に、

「ルビイさんと国木田さん！おーい！」

「あ、先ほどはありがとうございます！」

「あ、おはようずら」

頭を下げるルビイさんと不思議そうに見てくる国木田さん。

「頭を上げてよ。それより二人とも歩かない？」

時間もないし、歩こう。

歩きながら、先ほどのことを説明する。

「なるほど、だから遅かったの。ルビイちゃんは本当にあの犬によく

吠えられるずら」

「うー、なんでいつもルビイに吠えるのかな」

涙目のルビイさんを慰める国木田さん。

「たぶんあのチワワはルビイさんと遊びたかったんだよ」

「あ、そうかな……へええ」

涙目をこすり、微笑む。

「むー、なんか二人とも仲が良いぞら」

「え、そんな……ことはないよ」

頬を膨らませる国木田さんにおろおろするルビイさん。

「オラもその中に入れるぞら！オラの名前も下で呼ぶぞら！」

「……マルちゃん」

今度は勢いに負けておろおろするルビイさん。

「わ、わかったよ。だから落ち着いてマルさん」

「わ、わわ、なんかすごいぞら」

顔を赤くするマルさん。

「なんで、ルビイさんも顔を赤くしているの」

「え、えーと……」

なんだろうこの気まずい雰囲気だ。

「なにしているのかしら、そのリトルデーモンたちは」

この声は、まさか！

見ると、少し先に黒い日傘をしている人影が。

「あ、良子ちゃんぞら」

「良子っていうな！」

「おお、あの距離をすぐに縮めるとは。」

「うん？良子……」

「うん、津島つしま善子ちゃんだよ」

「良子っていうな！ヨハネよ、ヨハネ！」

暴れまわるヨハネこと、月島善子。

「やっぱりそうだ。聞いたことあると思ったら。懐かしな。」

「久しぶり、よしよし善子！」

「くっ、やっぱり。覚えていたか」

「よしよし善子？なにぞら」

「ああ、善子とは小学校が一緒だったんだよ」

「へー、そうなんだ。驚きだね」

「本当だよ、懐かしいな善子」

「もう、ヨハネ！急がないと遅れるわよ！」

振り向き側に少し笑った顔を見逃さなかった。

学校に着いた。12:10。
結局、遅れたためダイヤさんに四人仲良く怒られました。

第4話 見ていてね

土曜の練習は遅い始まりになった。

練習は準備体操から始まり、運動場でランニングをして体を温める。その後ダンスの練習をして、少し休憩。

いや、悪いのは俺だよ。一年生たちは悪くない。少々俺がふざけ過ぎた。

久々に会った善子のことをルビイさんと花丸さんに思い出話をしていたから遅れてしまった。それでも楽しい時間だった。

「それで……」

「それで、とは」

「なんか一年生たちと仲が良いというのか……」

なんで千歌さん、怖い顔をしているのですか？

「ムスー」

頬を膨らませている姿がまた可愛い。

俺が千歌と顔を近づけていると、背後に人の気配を感じ振り向くと、

「もー、まだ怒っているの？」

「怒ってないよ、曜ちゃん！」

渡辺さんが立っていた。

「いやいや、その顔は怒っているから」

「怒ってないもん！」

さらに、怒りだす千歌。

俺は渡辺さんに腕を引かれ千歌から離れる。

「ハアー、何したの誠君」

「えー、俺のせいなの」

俺だって千歌が怒っている理由がわからない。

ハアー、どうするか。

てか、なんでこんなにアイツのことで頭を悩ませる。うん？

「あれ、渡辺さん俺のこと」

「うん、誠君でしょ。沢田誠君」

「そうだけど、名前でよんでもらえるとは……」

「誠君って意外にシャイだよね」

「うえええ！」

「顔赤いよ、誠君」

「渡辺さんは意地悪だ」

「曜」

「え、なんだって」

「曜。私の名前は渡辺曜。だから曜って呼んでほしいな『さん』無しで」

「君は意外に積極的だね。曜」

「ふふっ」

「ははっ」

二人で笑いあった。

「なんだか、二人とも仲良くなったみたいだね」

「あ、梨子ちゃん」「桜内さん」

「私のことも名前で呼んでほしいな」

「えーと、梨子」

「うん。よろしくね誠君」

「もーう！なんで三人とも楽しそうなの！」

千歌がまた怒ってやって来た。

だからって俺にのりかかるなよ。

「ほら、今日はPV撮影もあるんだから！」

そうだった。今日はAoursのPV撮影のために俺は呼ばれ

たんだ。

「そうだな。なら早く撮るぞ、日がくれる前に」

早くやろう。向こうからダイヤさんがすごい視線を向けてきてる

から。あの目からレーザーでそんな勢いだぞ。

「どう？いい画、撮れた？」

俺が撮ったビデオカメラを確認して見ていると、顔を隣につけてくる千歌。

「どうやら、機嫌は直ったのか少しいい顔をしていた。」

「ああ、よく撮れている……」

本当だ。よく撮れてる。よく。
しかし、それだけだ。

「今日はここまでだね。かえ——」

「もう一度だ」

「ろう。え？」

「もう一度撮るぞ」

「え、だって撮れてるって」

「撮れてる。けど、これはそれだけだ」

「どういうこと……」

「お前は誰にこの歌と踊りを見せたいんだ」

「え……」

「本当にお前はこれで満足なのか？」

「……」

「千歌。お前はアイドルだろ」

黙って俺の話しを聞く千歌。

「俺はお前たちのファン第1号だぞ？」

「……第1号？」

「第1号の俺を満足させるPVを見せてくれよ」

千歌は顔を伏せる。

少し言い過ぎたか、と思つてるとすぐに顔を上げ、走り出す。

「ファン第1号のまー君を満足させる物を見せてあげる！だから

……」

遠くで叫ぶ。

「よーく、見ていてねー！」

遠くでもわかる。

「おうー任せておけー！」

アイツは、千歌は笑ってる。

第5話 明日は青空

日が傾き、空がオレンジ色に染められていく。

PV撮影は無事終わり、皆帰りの支度をしていた。

「そうだ、明日ってどうなるんだ？」

明日は日曜日。今日みたいに練習するなら遅刻しないようにしなければ。

「たぶんないと思うよ。明日は家の手伝いをしないといけないから」

そっか、果南姉は家の手伝いがあるのか。そうすると千歌も家の手伝いがあるな。

「このグループの皆って家族がなんらかの仕事をしているよね」

「そうだね。千歌は宿の経営、果南姉はダイビングショップ、それで曜がフェリーの船長で、花丸さんはお寺だっけ？」

「そうそう。それより、もう他の皆のことを名前で呼んでいるんだね」

「なんかわからないけど、名前で呼んでくれて言うから」

「それで、私だけは『果南姉』のままなんだ」

「え、ダメだった。果南姉」

「いやーほら、小さい頃はいいけど……今は」

「えー、俺にとっては果南姉は果南姉なんだけど」

「うっ……それを言われると」

困った顔をする。

そんなに困っていたとは思わなかった。

「わかったよ、果南」

「え……」

「え、なにその驚きの顔は?！」

そう驚かれるとこちらも驚いて反応に困るのだが。さすがに呼び捨てがダメだったか。そうだよな、年上だからさん付けで呼ばなければな。うん。

「果南さん。大丈夫ですか？」

「……………」

「果南さん？聞こえますか？果南さん？」

「……………」

ダメだ。うつむいて、返事がない。

果南さんは返事がない。どうやら屍のようだ。

って、テロップが出てきそうだぞ。

でも、本当に大丈夫か？なんか、顔赤いぞ？もしかして練習のやりすぎで熱でもだしたか？

「少し失礼しますよ」

果南さんの前髪を上げ、自分の顔を近づける。

「……………っ！」

おでこに触れる。

「なな、なにしてるのー!?!」

慌てて突き飛ばされた。

「なにつて、顔が赤いから熱があるのかと思って」

「へ、そそっか……。ありがとう」

「どういたしましたして。そのようすだと大丈夫そうだな。そんなに元気があれば」

「うん。熱はないから心配してくれてありがとう」

「いいよ、果南さん」

「それで、さ。やっぱり……」

「やっぱり?」

「名前、果南姉でいいや」

「けっきよく、そうなるのか」

まあ、そっちのほうが俺としては気が休まると言うのか安心するか
ら、正直にうれしい。

「なーに、二人で楽しそうにしてるの?」

「あ、小原さん。お疲れ様」

「ノーノー、マリーね、マリー」

「マリーさん……」

「ついでに、皆みたいに『さん』付けなしで」

「え、ま、マリー」

「うん。グッドできるじゃない」

「……遊んでるなマリーは、ってなんで誠顔が赤いわけ！」

「いや、だって……」

「フフツ、照れてる姿も可愛い！」

「だから！そうやってからかうから嫌なんだよ！」

「へー、そうなんだ」

なんだろう、マリーの目が新しいオモチャを見つけた子供ハンターの目だぞ。

「……あーあ、あれは楽しむ目だ」

なんだろう、後ろから果南姉の恐ろしい一言が聞こえた。

「なにしてるのかしら、あなたたち」

また、声が。

「ダイヤさん……助けて……」

「な、なにをしたのあなたたち」

怖い、この人怖いよ。金髪ハーフ怖いよ。

「また、二人は変なことを」

「やだなー、マリーは可愛い子を愛でただけだよ」

「マリーは一緒にしないで今は私は——」

なぜか説明で途中でまた顔を赤くする。

「ごめんなさい。小原さんは別として、今回はあなたが悪いみたいね」

ダイヤさんは俺を睨む。

「えー、俺が悪いの！」

「全くあなたが来てから……」

「そ、そうですね。男の俺が女子高にいるのが間違ってますよね……」

ははっ、そうだよな。前々から思っていたさ。男が女子高に出入りしてるなんて。回りからも怪しい目を向けられているのを知っていたさ。ああ、いくら千歌に頼まれたからって、考えなしに行動したな。たった数日だけだったけどいろいろと楽しかった。こんな運命は数年前は考えてなかったな。

「すみませんでした。数日でしたが楽しかったです……」

「え、ちよ……」

「果南姉、久々に会えて嬉しかったよ……」

「誠……」

「マリーもその笑顔を皆に届けて……」

「うん……」

「皆さんがナンバーワンアイドルになるのを願ってます」

頭をさげ、その場から去ろう。

今日は家に帰って早く寝よう。

明日は家から出ない。引きこもる。

「待ちなさい」

腕を捕まれる。

「なんですか……」

「あなたは、狂わせるのよ」

まっすぐ目を見て。

「私を皆に溶け込ませるのよ……」

握る手が強くなる。

「それにまだ、手伝ってもらってないわよ。生徒会」

「はい……!」

第6話 日曜日の午前

日曜日。それは唯一、俺の祝日。

日曜日。朝からスーパーヒーロータイムを観る。

日曜日。二度寝。

日曜日。お昼に起きる。

日曜日。適当にお昼を食べる。

日曜日。ゴロゴロ過ごす。

日曜日。いつの間にかの夜。

これが、これまでの日曜日。

だがしかし！今日は違う！9時には外に出る。（スーパーヒーロータイムは見逃せない）こっちに来たんだ。やることは1つ！

「本屋とアニメショップをあさることだ！」

もはや相棒と呼んでもおかしくない自転車で片道15分かけ駅に向かう。

「おおお！いつの間にかアニメイ○ではなく、ゲー○ーズまできたんだ！」

すごい！田舎町沼津が都会のように変貌してく！そのうち数字が印象のビルとか、なんとかの穴までできるじゃないか!!

まあ、夢のまた夢だけど。

とにかく、入りましょうか。

「あれ？誠さん？」

「はい……？」

店の扉をくぐる前に声をかけられた。

「やっぱり、誠さんずら」

「こ、こんにちは……」

「ああ、マルさんにルビイさん」

「なにしているずら？」

「えっ……」

今俺はオタクの世界。オタワールドに入ろうとしてたんだ。この

二人にオタクだと思われたくない。それよりチームにバレたくない。

「久しぶり来たから少し町を巡ろうと思って」

「そうなんですか……」

ヤバイ！ルビイさんの目線がオタワールドに！ダメだ。この人何色でも染められそうな人だから。

ルビイさんの目線を遮るように体を入れる。

「こ、これから本屋に行こうとしてたんだ」

「それなら一緒に行きませんか？本当は喜子ちゃんも呼んだけど、バスが遅刻してるみたいで」

あー、それで二人なんだ。

本当に運がないな。アイツ。

「それじゃ一緒にいいかな？」

二人とも頷いてくれた。

今気がついたがこれは……両手に花。

やばい、なに今日はこれまでの苦労が報われる日か！

内心ウキウキ気分だぜ！ヤッホー！

三人で商店街の本屋にやってきた。

本屋とは自分の本心が解き放たれる場所である。

「あ、新作が出たぞら」

マルさんは一目散に小説コーナーへ。

「このアイドル可愛い」

ルビイさんは一目散に雑誌コーナーへ。

「へー、今はこんなしかけ絵本があるだ」

喜子が絵本コーナーで楽しんでた。

「つて喜子ー！いつのまにー！」

「あら、ヨハネは最初からいたわよ……、三人仲良く本屋に入って行くところから」

「ごめんな、なんかわからないけどごめんな。」

「けどこの本屋さんは相変わらず、種類が多いのね」

「そうだな。よくここに通ったもんだ」

この本屋は新作、今話題の物から海外の物マニアックな物、店員オススメの本などそろってる。

それに、ここは三階まであり一階は小説雑誌など、二階には資格、学問などの本、三階は漫画、ライトノベルなどが揃ってる。ここに来たら欲しい本は見つかると思うほどの本の数。

「そう言えば、先ほど珍しい組み合わせの二人を見たわね」

「へー、どこで？」

「この本屋さん。エスカレーターを上っていったわ」

上か二階はあまり立ち寄らずに三階に行くからな。二階に行く人だと勉強好きのような人だろうな。

「少し探してみるか」

「あなたならそう言うと思ったわ」

二人して悪い笑みを見せる。

こうして喜子と一緒に珍しい組み合わせの二人を探すことにした。

まず最初は二階から。

「うっ、ここに来るだけで頭が……」

「ふっ、だらしないわね。ヨハネのような堕天使になると……」

おい、お前も目回しかけてるぞ！しっかりしろ！

「俺はここにいないと思う、いやいなくてくれ……」

「ええ、そうね……」

二人して顔色を悪くして三階へ。

探していた相手はすぐに見つかった。

「あれ？曜と梨子」

そこには鉛筆をたくさん手に持つ梨子と漫画を手に持つ曜がいた。

「二人ともなにしているの？」

「いやそれはこっちの話しだつて」

曜が不思議そうに首をかしげる。

「今度なにを描くつもり」

「えーと、今度は動物を描こうと思って」

喜子と梨子は絵の話しをしていた。

話しを戻す。

「俺は一人でぶらぶらしていたら、一年生組と遭遇して」

「それで、可哀想だから一緒に行動しているのよ」

胸を張る喜子。なぜ胸を張る。そんなに俺が惨めに見えたのか。

「それじゃ私たちも合流させてもらってもいいかな、喜子ちゃん」

「ヨハネよ。でも、どうしても言うならいいわよ」

「それじゃこれ買ってくるね」

二人はレジで会計を済ませ、一階にいるマルさんとルビイさんと合流した。

「そう言えば、ルビイさんとダイヤさんって姉妹なんだよね？」

「はい、お姉ちゃんはいつもルビイにい厳しくって……」

「それはルビイさんのことを大切にしているからだと思うよ」

「そ、そうだといいな……、えへへ」

「本当にそうだといいわね、ルビイ」

「お、お姉ちゃん」

第7話 日曜日の午後

お昼の時間になり皆で近くのレストランに入ることになった。

俺が奥の席に座り隣に喜子とルビイさん、マルさん。向かいに曜と梨子。ダイヤさんと鞠莉、果南姉。

「それで、なに食べます?」

俺は皆にメニューを渡す。

「とにかく何か頼みません」

ここに来てもう数分はたってる。

何も頼まず水だけ飲んで場所を占拠してるため店員にすごい睨まれているですよ。

「とりあえず、皆ようにピザを頼んで他に何にします?」

「ドリンクバー付きでアイスのせホットケーキ」っと善子。

「ポテトフライとドリンクバー」っとルビイさん。

「季節のケーキとドリンクバーすら」っとマルさん。

「ハンバーグ!とドリンクバー」っと曜。

「スパゲッティとドリンクバー」っと梨子。

「アラビアータとドリンクバー」っとダイヤさん。

「ハヤシライスとドリンクバー」っと鞠莉。

「ミックスグリンとドリンクバー」っと果南姉。

店員を呼び注文した。

注文が来るまでの間少し質問してみた。

「何かある、好きな食べ物?」

「チョコレートと苺」っと善子。

「ポテトフライとスイートポテトです」っとルビイさん。

「みかんとあんこずら」っとマルさん。

「みかんとハンバーグ!」っと曜。

「ゆで卵とサンドイッチ」っと梨子。

「抹茶の和菓子とプリンですわ」ってダイヤさん。

「コーヒーとシナモン」っと鞠莉。

「わかめとさざえ」っと果南姉。

皆バラバラの答え。

「えーと、嫌いなものは？」

「みかん」っと善子。

「わさびです」っとルビイさん。

「牛乳と麺類すら」っとマルさん。

「刺身とパサパサした食べ物」っと曜。

「ピーマン」っと梨子。

「ハンバーグとグラタン」っとダイヤさん。

「納豆とキムチ」っと鞠莉。

「梅干し」っと果南姉。

本当にバラバラだ。

えーと、マルさんと曜がみかんが好きだが、善子が嫌い。

そして、曜はハンバーグが好きだが、ダイヤさんが嫌い。

なに、このチーム。すごく片寄ってる。

皆ドリンクバーで各々ジュースを飲んでると注文が揃った。

俺はドリアを頼んだかできたてで熱い。

「あなたはどうなの、好きなもの？」

ダイヤさんから突然言われて考える。

俺の好きなもの……。

「オムライスとラーメンかな」

「嫌いなものは」

俺の嫌いなもの……。

「チョコレートかな」

俺の一言は波乱を呼んだ。

「「「「「え……」「「「「「」」」」」」」

なんだ、今の皆の反応。

「チョコレート嫌いなんだ」

なんで疑いの目を向けるのでしょうか鞠莉さん。

「可哀想な人なのね」

なあ、俺可哀想な人なんですかダイヤさん。

「初めて知ったなそんなこと」

「そうだっけ？話していなかつたっけ果南姉。」

「チョコレートってあんこみたいずらね」

「あんこと一緒なのかなマルさん。」

「チョコレート苦いもんね」

「わかってくれるのはルビイさんだけだよ。」

「なんで、チョコレートはリトルデーモンの好物よ」

「おい、待てよ。俺リトルデーモンにいつなった。」

「たしかに美味しいのにもつたいない」

「やっぱりもつたいないんだ曜さん。」

「チョコレートが嫌いな理由ってもしかして、チョコレート貰えないから？」

「笑いながら言いますね梨子さん。」

「そ、そんなこと、ないやん」

「もしかして……当たっていた」

「つい動揺で似非関西弁がでてしまった。」

「ごめんなさい」

「謝らないで！さらに虚しくなってくるから！」

「やばい、涙が出てきた。」

「本当に可哀想な人なのね」

「ダイヤさん。その一言はさつきより重い一撃だよ。」

「俺だつて貰えたら欲しかったよ」

「貰えなかつたんだね」

「違うよ！やめてそんな目で見ないで果南姉！」

「え、だつて……」

「違うよ！違うないけど！とにかく違う！」

「今何言つても可哀想で終わりそうね」

「おい、善子！いいから話しを聞けよ！」

「俺の過去を話した。」

「親は仕事が忙しく小さい頃から日本のあっちこっちへ転校を繰り返していた。」

そのこともあり、特に親しい友人もできずにいたためあの憎たらしい3月のイベントは貰ったことがない。

もともと生まれは沼津であり、千歌たちと会ったのは幼稚園の頃であり、それから数年間会わなかった。数日前に戻ってきて、今は一人で生活をしてる。

これが俺、17年の人生。

「もしかして、東京にもいた？」

「うん。少しだけだね。それが梨子？」

「そして、UTXに通ってた？」

「UTX……ああ、3ヶ月だけいたよ」

「やっぱり！特別入学で入って数カ月で消えた人って誠さんだったの！」

驚く梨子。悪いが俺も驚きだ。

なに、そんなに有名になってるの。確かに3ヶ月という短い期間で、特別入学なんかしてたけど！悪いことはしてないから！なのにそんなに広まってるの！

その後俺の事をいろいろ聞かれ解散になった。

第8話 月曜日は憂鬱

「はあー、なんで……」

俺はタメ息をはいた。いや、聞こえるようにした。

「今宵は満月の日」

「え、そうなの？」

「なんでこつちを向くのかな千歌ちゃん」

「善子ちゃんのことだから真に受けない方がいいよ」

「でもたしか今朝のニュースで満月だって言っていましたよ」

「あら、ルビイでもニュースを見るのね、関心だわ」

「満月の海は綺麗なんだよね」

「あら、マリイも見てみたいわね」

「今日は月の本でも読むぞら」

善子、千歌、梨子、曜、ルビイさん、ダイヤさん、果南姉、鞠莉さん、マルさん。

誰も俺に気がつかない。別に泣かないもん。少し見にくいのは目が潤っている証拠だもん。

「あーの、皆さん。俺のこと忘れてませんか？」

「ああー、いたの？」

ひどくないですか、千歌さん。

朝から機嫌が悪い千歌は俺にさつきから冷たい態度をとる。なにかしたつけ？ 思い当たる節が見当たらない。

「それでなんか用だった」

「なんか怒ってる？」

「べつにー、怒ってないもん」

「うーん、まあいいや」

話しを戻そう。ここで時間を潰す訳にもいかないし。

「ハアア」

溜息が聞こえたがたぶん俺には関係ないだろう。曜も果南姉も何かしらの疲れがあるのだろう。

「話しは昨日の事なんですが」

9人とも反応を見せた。それぞれ思っていることは違うだろうが。それでも今から話すことは9人に関係あることだから。

「唐突だが、A q o u r sは知名度あるのか？」

「「「「「「「「「「
「「「「「「「「「「
??????????

皆頭を傾げて頭の上に？が浮いているのだろう。

そしてその中には「なにをいっているんだこのバカ？」っと思う者もいるだろう。

いや、本当はいて欲しくない。そんな悲しいことを思う人いないと

「なに言ってるの、バカなの？」

いたね。凄いグツサリとバツサリと最後はドーンと爆発をつけてもいい。それほどまでに俺のメンタルは打ち砕かれた。

だってまさか言うとは思ってなかったから。けど、

「千歌。やっぱり怒ってる」

「しつこいよ。バカこと君」

「なんだよそれ！」

「沢田 バカこと君」

「フルネームで呼ぶな！」

「フルネームじゃあないでしょ」

果南姉のツツコミが聞こえたがどうだっという。

「なんだよ！バカはお前だろ！」

「なっ、千歌はバカじゃあないもん！」

「そうか？冷凍みかんを初めて見たときはまるごと食べようとしてた
だろ！」

「いつのことよ！それならまー君だって、高いところ苦手なのにジャン
グルジムの天辺まで登って降りれなかったよね！」

「おまつ！それなら千歌だって果南姉の家まで一人で行って迷子に

なつて大変になつただらう！」

「あー！覚えていたの！まー君だつて迷子になつたよね！」

「そんなことがあつたの？（：曜）」

「うん。二人とも迷子になつて大人たち総勢で探し回つたよ（：東南）」

「あー、覚えてるすら。確か放送が流れまで（：花丸）」

「そうなんだ。二人とも方向音痴？（：梨子）」

「たぶん、マリーが思うに蝶を追いかけて迷子になるとかだと思つな

（：鞠莉）」

「まるでルビィね……可哀想に（：ダイヤ）」

「お姉ちゃん！それつてルビィも可哀相なの！（：ルビィ）」

「そんなことより早くあの二人をどうにかしない（：善子）」

「もー！なんでまー君は意地悪なのー！」

「俺か！俺がなにかしたか！」

「もう、まー君と口きかない！」

「ああ、俺もそうしてやる！」

「あーあ、なんでこうなるのかな」

「そう思うなら果南どうにかしなさいよ」

「えー、鞠莉が思う以上にこうなると二人とも面倒なんだよ」

「とにかく今はあの二人を一旦放さない？」

「曜さんが言う通り。一旦あの二人を放すとしましょう」

「それじゃダイヤは誠を、私が千歌を相手するよ」

「そうするとマリーはダイヤと一緒に誠を」

「くれぐれもさらにややこしくしないでくださるかしら」

「それで、だいたいの話しはわかりました。それで……これはなに」

俺はダイヤさんと鞠莉さん、梨子さんと喜子に連れられて海に来た。いや、連行された。

「この縄はなんですか？」

手首を縄で繋がられ、まるで犯罪者だ。

縄の先を持つ鞠莉さんに聞く。

「逃げないようにするためだよ」

逃げないようにって、楽しんでますよね？

「ごめんね。痛くない？」

梨子さんが泥沼に咲く一輪の花に見える。

「全くなんでヨハネがこんなことに付き合わされるなんて」

「おいおい、ため息つきたいのはお前ではなく俺だぞ。」

「さて、あなたは言いましたわよね」

「は、はい？」

「Aqoursは知名度があるのか……つと」

あー、確かに言った。その後千歌と言い合いになって忘れていた。

今思い出してイライラしてきた。なんで俺が怒られるんだよ。俺がなにした。確かに言い過ぎたと思うところはあるかもしれないけど、けれどあそこまで言われるのは頭にくる。

「なんであなたはそんなことを」

「いやー、昨日皆で出掛けたところをクラスメイトに見られて」

「それは、不運ね」

「そうですね」

「私たちが、よ」

「そつち!?なんですか！俺という場面を人に見られたくないと！」

「それで、クラスメイトになにか言われたのかしら」

「ああ、もう次にいくのですね。それでクラスメイトに皆はスクールアイドルをやってるって言ったのですが……」

「知らないよ、言われたんだ」

続きを梨子がいい、頷いて答える。

「それで、俺イラついて……」

「全く、あなたは」

「そんな事で」

「そんな事って！」

ダイヤさんも鞠莉さんも何にも思わないのか。

「優しいんだね」

「あの時から変わらない」

梨子と善子が優しい言葉をかけてくれる。

「今からでも遅くないですわ」

「そうね。皆に笑顔を」

「こんな私でもなれたんだもん」

「堕天使の力を受けてみなさい」

四人とも自信の笑みを向けてくる。

「そうですよね」

「そうだ。今からでも遅くない。」

「アイツもそうだった。いつだって完敗からスタート。」

「それじゃ、プロデューサーのこの町一番を見せてくれるかな？」

「え、プロデューサー……俺!？」

「そう。私たちスクールアイドルAqoursのプロデューサー」

梨子が手首の縄をほどいてくれた。

「これから私たちを導いてくださるのでしょ」

「この堕天使があなたの後についていくわ」

「ダイヤさん、善子」

「泣いてないで、連れて行ってね」

「泣いてない。目が潤ってるだけだ」

空を向いて目が渴くのを待った。

第9話 愉快な月曜日

ダイヤたちが誠を連れ出して数分後。

「相変わらず変わらない風景だね」

こつちに気がついて振り向いた。

屋上に来て頭を冷やすためか、千歌は町並みを見下ろしていた。

「千歌なんで、喧嘩したの？」

「だって……」

唇を尖らせて、そっぽを向く。

「皆が私抜きで楽しそうに遊んでいたから」

あー、なるほど。それで、ずっと機嫌が悪かったのね。

相変わらず世話が焼ける千歌。妹がいたらこういうものなんだろう。ダイヤをのこることを思う。

「千歌覚えてる？」

「なにが……」

「千歌が私の家に来ようとして迷子になった時の事」

「うん……覚えてる」

小さく頷いて答える。

「その時、いち早く千歌を見つけたの誰か覚えてる？」

「いち早く……見つけたのは」

「忘れたの？」

「忘れてないよ！まー君だよ！」

少し意地悪しすぎたかな。

大きな声を出してくる。

「まー君はいち早く来てくれたよ。誰よりも早く、来てくれた」

その時を思い出しているのか、微笑む千歌。

あの時は誰よりも不安なのは千歌だったのは間違いない。それでもあの時の事を恐怖やトラウマではなく一つの

思い出として残っている。

「あの時の果南ちゃんの家に向かおうとしたらいつの間にか知らない場所に迷っていてなだよね、ははは。後で知ったけど果南ちゃんの家

と真逆に向かっていたんだよね」

真逆に向かっていたのですか。初めて知った事実だよ。

全くいつも心配かけるけど、その笑顔を見るだけで私は安心するだよ。

だから……

「だから……」

「果南ちゃん……?」

「だから、仲直りしよ」

「でも、千歌、酷いことをまー君に
しよんぼりとする。」

全く、いつものような元気はどこに行ったのか。

「はあー」

「え、ため息……」

なんで気づかないかな。

「誠も同じことを思ってるよ」

私も思っている。

「なんで、わかるの?」

なんでって、それは。

「私は二人の、世話が焼ける弟妹のお姉ちゃんだから」

「果南ちゃん……」

「だから、行こう!」

「うん!」

「千歌ちゃん!!」

「ルビィちゃん、マルちゃん!」

「大変だったね」

「曜ちゃん。けど、これで」

「さすが、お姉ちゃん」

「え、ちよつと、曜!」

「フッフッ」

もう一人、妹がいた。

「果南ちゃん、曜ちゃん!行くよ!」

「まったく、待ってよ千歌」

千歌も思っているんでしょ。同じことを。

「元氣だね、二人とも……」

なぜか、一人残った屋上から眩きが聞こえた。

「どうやら、来たみたいね。果南」

「お待たせ、ダイヤ」

「全く遅いわ」

「ご、ごめんね」

「う、そんなに待ってないわ」

「優しいすら、喜子ちゃん」

「お疲れさま曜ちゃん」

「うん、そんなにだよ梨子ちゃん。それに頑張ったのは果南ちゃんだから」

「へー、そうなんだ」

「や、やめてよ。ほら千歌」

私は千歌の背中を押す。

「う、うん……」

千歌の目の前には誠の後ろ姿。

後ろを向いているためか、こっちは気が付いていない。

「……まー君」

「あ、千歌……」

千歌に気がつき振り向く。

「ごめん」ね」

頭を下げる二人。

全く同じこと言う。

この二人は本当に似たもの同士なんだから。

パンパン

手を叩いて、この空気を変える。

「これで仲直りしたね」

「果南姉」「果南ちゃん」

「さあ、今日は満月みたいだよ」

私は二人の手を繋ぐ。

「皆の所に行こう」

三人で鞠莉、ダイヤ、梨子ちゃん、ルビィちゃん、マルちゃん、喜子ちゃんが待つてる赤く染まる海辺へ。

「あ、やっと来た。結構時間かかったね」

「バツとして、今日は夜の海を皆で見ましょう」

「一緒に満月見えるね」

「そうずらね」

「さあ、今宵はリトルデーモンたちで楽しみましょう」

「よつちゃん、私リトルデーモンなの？」

「なに言っても無理だとおもうよ」

「それじゃ、お菓子とか必要だね」

「千歌は仕方ないね。私を買ってくるよ」

「果南姉」

「あれ、誠？」

「一人で行くのはずるいよ」

「ずるい？」

「ありがとう」

「なにいきなり」

「だってこんなこと今じゃなきや言えないから……」

「フフフツ、こっちこそありがとう」

その言葉は二人の間に流れる夜の風のように流れて消えた。

それでも、今日のこのことは消えない思い出になった。

BS 今日は何曜日

4月17日

彼と会ったのは友達の話だった。

そんな言葉が合うのだろうか。確かに初めて会ったのは友達の話だった。けど、たぶん……。

好きになったのは初めて会ったときから。

それが、世に言う恋と言うやつで、人生で初めてで最後の恋だった。彼の後ろ姿を見てそう思った。確信に変わった。

「やっぱり水族館っていいよな」

水槽の中を泳ぐ魚を見て心を癒されていた。

今年ぶりかの水族館にやってきた。

沼津には二つの水族館がある。一つは深海水族館。

そして今もう一つの水族館、三津シーパラダイスに来ていた。

「まさかまたここに来るとはね」

隣のいる彼女は水槽の中を泳ぐ魚たちを見てつぶやく。

今日彼女の服装は白い服に青いスカート、紺色の帽子と言った服装をしていた。特に帽子にYが目立つ。

魚は水槽の中を優雅に踊るように泳ぐ姿は綺麗だった。

「そっか、ここに来たのは今回で二回目か!!」

忘れていた。今日の事しか考えてなかった。

今日という楽しみにしすぎて毎日カレンダーの日付を消す動作をしていたよ。毎日が日めぐりカレンダーのように過ぎて行って、とうとう今日になったのだ。

歩きながら話し、くらげの水槽にたどり着く。

「でも、ここに来たのは二年前なんだよな」

二年前。彼女が一番輝いてた、誰よりも。

ここにいるイルミネーションのくらげたちよりも。

「まさか皆と来たのが、もう二年前なんだよね……」
悲しくつぶやく。

「あの時は楽しかったね」
無理に笑っているのがわかる。

「そして、あの時はごめんね」

そう言っただけでまた笑う。

「そうだ。今から、イルカのショーがあるみたいだよ」
彼女に手を捕まれる。

「さあ、イルカショーに全速前進！」

これはもしかして、

「走るのは、勘弁してくれー！」

俺の声が水族館に木霊した。

まさか、自分があそこまで早く走る事ができるとは思わなかった。
初めてではないだろうか。自分に秘められし力があると実感したのは。
いや、中学二年にそんなことを書いたノートという今では思い出し

たくない思い出があるではないか。

「はい、飲み物」

「あ、ありがとう」

彼女から紙コップを受け取る。

「いやー、まさか少し走っただけなのにそんなに疲れるとは」

少し飲みながら言う。

「今のを少しと言うのか？」

君のスピードについて行くのは少しの距離かもしれないが、平凡な自分にとってはかなりの距離になってしまうのですが。まあ、そんなことより、

「まさか、イルカのショーが観たいなんてね」

「なに、その顔は」

「いや、可愛い部もあるんだなって」

「なに、いきなり！」

「なにつて、いつも言っている事なんでけど」

「そうやって、詐欺のようなことを」

「詐欺つて。俺は素直な事を言っているだけなんだが」

「いつも、そうやっているんな女に言っているでしょ」

「そんなわけないよ」

「どうだか、この前も言っていると報告があったよ」

「なにその怖い情報法網」

「女はすごいんだよ」

「それは……知っている」

そのことはこの人生で存分に教えてもらいました。

「仲いいなお二人さん」

突如知らない、見た目からして柄が悪い二人組みの男たち。

この場にはなんとも合わない二人組みだ。

「ちようど、俺たち二人で暇していたんだ」

「彼女、ちよつと俺たちと付き合つてよ」

わー、いるんだ。本当にこんなことを言う人。漫画とか、フィク

ションの世界だと思っていたよ。

それで、彼女の答えは。

「え、やだ」

一言。お断り。やだ、だった。

はつきり言うから男二人組みは驚いているよ。本当なら嫌がるところを無理やりでも連れて行くところなんだろうな。

それなのに、俺の連れは。

「いや、そこは他に言う言葉があるだろう」

とうとう一人の男が補足する。

「えーと、今からイルカショーを観るから無理です」

わおー、どんだけイルカを観たいんだ。
そんなこんなでイルカショーが始まる。

「マジかよ。もういいから俺たちと来い」

彼女の腕を掴み、引っ張る。

「あっ」

「「えっ」」

すると、彼女の手から紙コップが落ちる。

ふたが外れ中身がこぼれる。

オレンジ色の液体。

終わったな。

「手、離して……」

彼女は低い声で言う。

「俺は悪くない。お前が俺の言うこと聞かないからだ」

男が何か言うが今の彼女には関係ない。

「私の……」

手を振り解き、

「私の一！」

右拳をつくる。

「オレンジジュース！」

男めがけ振り下ろす。

鈍い音がなった。

「え」

驚く声が聞こえる。

「お前がこいつらを殴るな」

俺は左頬を押さえて、彼女の右手を握る。

「お前の手はこんな奴を殴るためにあるわけないだろ」

俺は振り向き、右拳を振り下し、殴る。

男たちはイルカショーの水槽にぶつかる。

「俺の彼女に手をだすな!!」

俺は叫ぶ。

イルカショーの目玉の水掛を頭からかけられ、呆然とする二人。

イルカショーどころではなかった。

あの後周りから拍手が包んだ。

「うー、恥ずかしい」

顔を隠して俯く彼女。

「俺も恥ずかしいよ」

まさか、あの場のノリっていうのか雰囲気と言うのかわからないが、とにかく恥ずかしい。

俺たちはイルカショーの終わりと同時に水族館を出た。恥ずかしいが二人は人波に紛れて。

俺たちは水族館の後、海辺を歩いていた。

波の微かな音。

カモメの鳴き声。

遠くの船の汽笛。

なにもかもが新鮮で楽しい。

彼女といるだけで楽しい。

「あー、もうー」

彼女は走り出し。

「この瞬間がずっと続くといいのにね」

彼女は靴を脱ぎだし裸足になった。

「まだ、海は冷たいか」

海に入って遊びだした。

「風邪ひくよ」

「大丈夫大丈夫！ほらっ」

水をかけてきた。あぶな！

ギリギリでよける。

「いや、濡れるから！」

「もうだらしないな！」

笑いながらも水をかけてくる。だから危ないの！
そんなやり取りをしているとだんだん、日が傾く。

彼女の動きは止まり、夕日を見る。

「ねえ、なんで私なの？」

「どういうこと？」

こつちを向かず答える。

「他にも、幼なじみの千歌ちゃんとか果南さんとか、善子ちゃんとかいたのに」

「アイツらはただの幼なじみだ」

「それじゃダイヤさんや鞠莉さん、梨子ちゃんにルビィちゃん、マルちゃんはどう？」

「先輩後輩と同学年？かな」

「それで、私は……なんなの」

「初めて好きになった人」

「……………」

すぐに出てきた言葉に、彼女からの返事はなかった。

これが俺の思い。

やつと言えた答え。

あれから何日この空を見たのだろうか。

あれからどれだけ時間が過ぎたのだろうか。

あれからこんなにも心が苦しく、暖まったことか。

俺は言う。

「初めて会ったとき好きになった」

何回も言う。

「出会いは知り合いの紹介だったけど」

この気持ちと言う。

「今一緒にいられて楽しい」

前からの思いを言う。

「これが好きだって気持ちなんだと」

そして、最後の言葉を言う。

「こんな俺だけど付き合って欲しい。曜」

届くかわからない。

それでも、届けたい。

叶えたい、思い。

「まったく……」

彼女は振り向き。

「言うのが遅いよ。先に言いそうになったよ」

夕日と同じように紅くなった顔でいった。

第10話 図書室での水曜日

水曜日。5日間の内の中間の日。

そんな日はお家に帰ってゆつくりしたいもんだ。

「なにしてるの。次はこれよ」

言われるままに物を運ぶ。

もう一度言おう。

水曜日はゆつくりしたいもんです。

なぜこんなことになっているのかと聞かれたら数時間前に遡る。

〃〃数時間前〃〃

「え、この後ですか？」

電話の向こうで『ええ、いいかしら』と戻ってくる。

今日は水曜日。学校終わって予約した本を取りに行く予定なのが。

『お礼として食事をご馳走させてもらいますわ』

「今、ご馳走と言いましたか！」

『え、ええ言いましたけど』

「わかりました。今から学校に向かいます」

『ありがとう。校門で待ってるわ』

電話切れ、急いで帰り支度を始める。

「そんなに、急いでどうしたの」

「うん、いや今から行かなきゃならない所があつてさ」

「ああ、本を取りに行くなら一緒に」

「ごめん。違う」

「え……あの誠がそれ以外の理由でこんなワクワクしてるなんて」

「俺はいつもどんな人生を送ってるだよ！」

「毎日がオタク人生」

「弁解ができない！クソッ！とにかく俺は急いでるから悪い」

そう言い俺は教室を後にした。

自転車を漕いで急いで電話主がいる学校へ。

「あら、意外に早いですわね」

「そ、そう、ですか……ハアハア」

「そんなに急いで来られなくても」

「ダイヤさんが俺を必要としてくれたから」

「……全くあなたって人は」

「それでは、早速何をやればいいのですか？」

「そうでしたわ。こっちらへ」

そう言われ、ダイヤさんに案内されたのは学校の図書室だった。

「今日来てもらったのはこの図書室の本を整理してもらうためですわ」

「な、なるほど」

そうするとこれから俺がやる仕事は……。

「この本を運んでもらえるかしら」

「ですよー」。

俺に力仕事は無理なんですけど。

「お礼はちゃんとしていますから」

「わかりました！頑張りますー！」

「ええ、その調子でお願いしますわ」

ダイヤさんからのお礼。何か少し気になるがダイヤさんが俺を頼りに呼んでくれたことが嬉しい。

それだけで頑張れる。

……時間は戻る……

「なにをしているの、次はこれよ」

ははは、やばい。

これは、やばい。

今日は水曜日。あと二日学校に行かないといけない。だがこれは筋肉痛間違いない。

ダイヤさんに頼まれた本を指定された場所に置いて、図書室に戻る。

「あの、今日はダイヤさんだけなんですか？」

「ええ、今日は図書委員の方々に頼むのを忘れてしまいましたの」

ああ、それで俺に電話が来たんだ。

「あれ、俺の電話番号おしえましたっけ？」

なにか寒気を感じるものになってきたぞ。今一人きり。

怖!!

「教えてもらいました、高海さんに」

「ああ、なるほど。よかった」

「なにがよかったのですか」

「いえ、こつちらの話しです」

言い逃れ話しを変える。

「そう言えば、ルビイさんってダイヤさんの妹なんですよね？」

「ええ、そうですね。全く不肖の妹で仕方ないですわ、はああ」

「そう言っつて、心配はするのですね」

「そんなことはないですわ」

「ふっ、素直じゃないんだから」

「なにか言いましたか？」

「い、いいえ」

目が怖い。

「おや、国木田さん？」

「あ、本当だ」

図書室に入るとマルさんが本を読んでいた。

「本に集中していてこちらに気づいていませんね」

「どうしましょ。これから本の移動を行うに」

「ここは、マルさんにも手伝ってもらいましょう」

「ええ！」

「ここに誰よりもマルさん方が図書室を知っているはずですよ」

「そう言われると、そうですわね」

二人頷き、マルさんに交渉を。

「え、構わないですら」

そう言い、マルさんの指示の元図書室の本の整理が始まった。

「あ、ずっと気になっていたんだけどマルさん」

「はい」

「マルさんがいつも語尾に『すら』って言うけど、あれってもう言わないよね」

「え……」

「あ……」

何だろこの空気。

「沢田さんこちらへ」

「え、ちよつと、待って」

ダイヤさんに腕を引つ張られ、すみっここに連れてかれる。

「あなた、言っではいけないことをおっしゃたわね」

「え、なに」

ダイヤさんからすごい剣幕で言われる。

「国木田さんはすごくそのことを気にしているのよ」

そうだったのか。

なのに俺は無神経に……。

「すいませんでした」

「その言葉は言う相手が違うわ」

「そうですね」

俺は謝らなければ国木田さんに。

「マルさん。すみません、俺無神経で」

「いいづらよ。オラはもう気にしてないづらから」

「そんな、俺が悪いのに」

「こんな古い言い方をするなんてアイドル失格すら」

「そんなことはない!!」

「もういいすら」

「よくない! マルさんのキャラはアイドルになくってはならない個性だから!」

「そうですね。そうするとわたくしも個性があると言えるわ」

「そうですね、ダイヤさんもいい個性ですね。だからマルさんもその個性をもういいとか言わないで」

「誠さん……」

「その個性はアイドルとしては大切なものだから。それに、マルさんに大切なものだから」

「そんなほめすぎすら」

「なんか、お母さんみたいだから俺は好きだよ」

「もうこんな時間ね」

外の景色は夕焼けになっていた。

「それじゃマルは帰る」

「それじゃ途中まで送って行くよ」

「待ちなさい、二人とも」

「はい??」

「これから少し時間ありますか」

「どういう、ああ」

「え、ええ」

「これから手伝ってもらったお礼として」

「晩御飯ですね!」

「ええ」

「なに食べに行く?」

「悩むぞらね」

二人で笑いながら夕焼けの坂で何を食べるか盛り上がった。

第11話 火曜日の出会い

月曜日、まー君と喧嘩してしまい、酷いことを言ってしまった。
果南ちゃんに仲をもってもらい仲直りをした。
そこで考えた。さらに、まー君が喜ぶ物を渡そうと。

そして、千歌は悩んだ悩んだ結果が！

「これなのね」

果南ちゃんと曜ちゃん、梨子ちゃんたちとバスに乗って買い物。

「いやー、一人で考えたけどわからなかった」

「けど今日練習なくて良かったね」

「皆それぞれ用事があるみたいだから」

梨子ちゃんと曜ちゃんが言う。

「ありがとうね。買い物に付き合ってくれて」

「いいよ。どうせ暇だったから」

「うん。私も、それにみんなとお出かけしたかったから」

「ありがとう、曜ちゃん梨子ちゃん」

「それに千歌一人にさせるのは心配だったから」

「酷いよ果南ちゃんは！」

皆で笑いながら沼津の町へ。

「そうだ。千歌ちゃんと果南ちゃんは誠君とはどういう関係なの？」

「唐突な質問だな曜は」

「なんと、千歌と果南ちゃんとまー君は幼なじみなのだ！」

「うん。知っている」

「三人の態度でみんなわかっていると思うよ」

「なんだって！」

そんな、皆にばれていたなんて。

これまで内緒にしてきたつもりなのに。

少し寂しいからまー君と話すときは笑顔になったけど。

その他のときは自然に接してきたつもりなのに。

「そんなに驚くことか?」

「果南ちゃんは千歌の態度に気づいていたの!」

「態度? なんのこと?」

「なんでもないよ」

果南ちゃんは気づいていなかったみたい。

なのに皆は気づいていたの?

果南ちゃんは気づいていないのに皆は気づいていた。

果南ちゃんに嘘は通用しないのになんで?

「そう言えば、梨子ちゃんも誠君のこと知っていたよね」

「え、どういふこと曜ちゃん?」

「この前の日曜日、千歌ちゃんがいなかったときに少し話しが出てきてね」

「どんなどんな!」

「なんでつけ? 東京のウルトラ高校なんかに3カ月間だけいたとかなんとか」

「ウルトラ? 高校?」

東京にはそんなおかしな高校があるんだ。さすが東京。

「違うよ、UTX高校だよ」

「UTX!」

UTXってあのスクールアイドルで伝説の三人がいる高校だよ!

まさかあのまー君がそんなすごいところに通っていたなんて。

「私が通っていた高校のまわりの高校で話題になったの、UTX高校に特別入学したすごい人がいるって」

「そんなに凄いな」

「すごいよ! なにがすごいって、とにかくすつつつごおおいしいの!」

「千歌顔が近い」

「そんなすごい高校だから話題になったの？」
「うん。それがね曜ちゃん。なんか困っている女子を助けたとか、迷子になった猫を一日で見つけたとかそんなことばっかなんだよ」
「ははは、誠なら全部やっていそうだけどね」
「どういこと果南ちゃん」
「いや、誠って困っている人をほっとけないのかすぐに助けに行くんだよ。曜もそんなことなかった？」
「ああ、そういえば水筒がなくなったらすかさず自分の水筒を渡してくれたっけ」

「「え」」

「え、なにその反応」

「え、だって曜ちゃん。まー君から水筒」

「うん。もらった」

「それって、さすがに」

「ダメだった梨子ちゃん」

「ダメってか女子として」

「まさか果南ちゃんから女子についてダメだしをくらうとは！」

「どういことかな……、曜」

「冗談だよ。だから怒らないで、ね」

「お仕置きは後として、さすがにそれはダメだよ」

「え、なんで？」

「なんでって、ね梨子」

「ええ、私！さすがに私の口からは、千歌ちゃんにパス！」

「間接キスだよ曜ちゃん。それは！」

「間接キス？」

言われて笑い出す曜ちゃん。

なんで笑うの！

「いや、ごめん。新しいペットボトルだから」

「「ペットボトル??？」」

なつとく。新しいものなら開けてないから口もつけてないから大丈夫か。

「なーんだ。よっかた」

安心と心の片隅でチツクって痛みがした。

バスを降りて沼津の駅北にやってきた。

「それで、何を買っていくの?」

「まったく考えていなかった」

「千歌らしい行動だな」

「うーん。どうしよう」

なんにも考えずやってきてしまった。

まー君の好きな物ってなんだろう?

食べ物?

置物?

服?

アクセサリー?

悩む。うーん。

「そう言えば、誠さんの高校ってこの辺だよな?」

「梨子ちゃんよく知っているね」

「うん。この前聞いたんだ」

「早いね。行動するのが」

「そんなことないよ、やめてよ曜ちゃん」

「そうだよ梨子ちゃん!」

「千歌ちゃんも!」

「まー君の学校に行けばいいんだよ!」

なんで気づかなかったんだろう。

わからないなら、直接行けばいいんだよ。

「それじゃ案内よろしく梨子ちゃん」

「ええ、私が……」

「ここがまー君の学校」

「共学なんだ」

「男子がたくさん」

「女子も多いね」

千歌たちはまー君が通う高校をみて驚いていた。すると、声をかけられた。

「あれ、まー君？」

「なにがまー君だよ。なにしているんだよ」

「少しね。この後付き合ってくれる？」

「別にかまわないけど」

「そんなことより、なんかさつきからこっちを見られてるね」

「ああ、果南姉たちが来たからでしょ」

「それより、隣の人は誠さん？」

「ああ、こいつは——」

「どうもー、あたしはかなおか金岡 めぐみ恵。梨子ちゃん。久しぶりだね」

「本当だね恵ちゃん」

「なに、二人とも知り合いなの？」

「うん。曜ちゃんたちと知り合う前、星の浦に来る前の高校音の木坂のクラスメイトなんだ」

「また梨子ちゃんに合えるなんてうれしい。それ！」

「え、ちよつと抱きつかないでよ」

「梨子ちゃんがいなくなった後すぐにこっちに引越しが決まってね」

「そうなんだ。これからもよろしくね」

「うん。よろしくね！」

「仲がいいんだね、二人とも」

「まるで千歌と果南ちゃんみたいだね」

「私も入れてよ！」

「そうだね。千歌と曜、私みたいだね」

「へへへ」

「おい。俺のこと忘れないでー」

「」「あっ」「」

「あつ、じゃない！ほら、さつさと用件を言え」
「そうだった。ごめんねこの前酷いことを言つて」
「まだ、気にしていたのか。もう気にするな」
「うん、それじゃ千歌の気持ちが治まらないの！」
「そういわれてもな、あ」
「なに、なにすれば言いの！」
「これから、ケーキを買いに行こう」
「ケーキ？それでいいの」
「ああ、今日は男女ペアでケーキが割引されるんだ」
「それじゃ、一緒に買えばいいの？」
「そう言うことだ。皆も買うだろ？」
「ケーキ！」
「女子としては誘惑の食べ物」
「それも割引」
「さつそく行こう！」
「二〇おおー！！二〇」
「はは、三人とも元気よすぎだよ」
「楽しそうだね、梨子ちゃん」
「うん。ここに引越して来てから楽しいよ」
「あたしもそうなるかな」
「なるよ！」
「え」
「だって、千歌ちゃんの友達の誠さんがいるから」
「そうかな？まあ楽しいけどね」
「……うらやましいよ、いつも一緒にいられるのは」
「あれ、なにその眩きは」
「なんでもないよ！」
「へへへ、これからは楽しくなりそう」
「うん、なるよ」
「おーい梨子ちゃん！はやく！」
「今行くー！行こう、恵ちゃん」

「え、いいの」

「おーい、早く来いよ恵」

「ほら、誠さんも言ってるから」

「そうだね」

それから、六人で楽しくケーキ屋さんに向かいながらたわいもない話をしたよ。

この時間は昨日のことがないと出会わなかったことだと思う。

ほんとうに、まー君といると飽きない時間になると思うよ。

「あれ、これって俺って五又しているように見られてる」

B S 小さな原っぱは大きかった

6 / 13

彼はいつも私の話しを最後まで聞いてくれた。

彼は他の誰とは違う、不思議なオーラがあった。

彼に会うたびに胸が苦しくなって、彼を見かけるたびに胸が弾む。

この気持ちを言葉であらわすなら、最初はLから始まり最後はEで終わる言葉。

皆がうらやむ彼の隣。

「うーん！」

腕を高く伸ばす。

「海の匂い！」

深く深呼吸をすれば、海の塩の香りと暖かな太陽の温かみ。

なんと来ても変わらない唯一の場所。

「わかったから、荷物を持つのを手伝ってくれ」

俺は気持ち良さそうにしてる彼女に言うが、

「もー、すっかりしてね。darling」

フラリとかわされた。

今二人は海に来ていた。

沼津で出掛けるかと話しがでたら海か山、ちよつと町に行くかの三択だ。

うん？それは言い過ぎかも？

そんなことはない。

沼津で遊ぶなんてさっきの三択しかないんだ。

他は隣の市に遊びに行くかだな。

それ以前に！子供が外で今頃遊ぶか？ゲームだろ！テレビゲームか携帯ゲーム！

俺の時代はカードゲームだったな。よく決闘者と書いてデュエリストとよんでいたな。

まあ、夏になれば蝉やらカブトムシやらを捕まえに山には行つたが。

とにかく！今二人は海に来ているのである。

それは、昨日に戻る。

「明日つて暇？」

「別にたいした用事はないな」

「なら、海行きましょう！」

「海？」

「そう、海！sea！」

「なんで、いきなり」

「魚釣りをしたい」

「あー、なるほど」

「それで明日釣りはどうかな？」

「いいぞ。釣り」

「やったー！英語でHAPPY！」

「わざわざ英語で言う必要はないだろう」

「あるよ！これは気持ちの問題よ」

「さようですか。それより声大きい」

「はーい、そこうるさい！」

「ほら、怒られた」

「もー、二人楽しく話していたのに」

「いやいや。一年の授業に出てるあなたが問題なんだよ」

「えー、なんで？」

くそつー、これが頭がいい奴が言う言葉か。

俺は無事に大学生になることができた。

それは彼女のおかげでもある。

彼女と高校になり付き合い始めてまだ、一年。

この一年でいろいろ合ったけど……。

なんだかんだで楽しい生活を二人で送っている。

これまで彼女ができたことなかった人生だったけど、彼女と会えてこれまでとは違う人生を送ることができた。

楽しく、飽きない一日。

一日が24時間と忘れる日々を送っていた。

俺が同じ大学に行くに行ったら喜んで受験勉強を手伝ってくれた。

確かにこれまでのことを振り返るとよく面倒を見てもらったと思う。しかし、

「はやく、戻ろうよ」

「だってマリー講義ないんだもん」

「だからって、一年の授業に出るか、ふつう？」

「えー、でもこれでいつも一緒だよ」

そう言っって頭を肩に乗せた。

「なっ、なに言っってんだよ！」

「顔が赤いよー」

「うっ。わかった、静かにしていてくれ」

先生がすごい顔でチョークを投げる準備してるから。

それに周りの男子もコンパスを人に向けるな！

「OK！誠が言うならそうする」

そう言っって俺の隣を楽しそうに座っって授業が終わるのを待っっていた。

「今日の講義はここまで」

「うーんー。終わっった！」

講義が終わっり次はお昼。

その前にやけに静かな隣の人を見ると、

「クウー、クウー」

「寝てるのかよー！」

どおりで静かなわけだ。

どうするか、凄く気持ち良さそうに寝てるよ。

これで起こすのもなんか悪いな。

それに、もう少し見ていたい。

まったくなっんでそんないい顔で寝てるんだよ。

「隣の彼女さんを起こさなくたっていいの？」

突然声をかけられた。

首を後ろに向けるとそこには、ニコニコと笑う女性が。

「えーと？どなたで？」

「やだなー、同じ学科だよ。それに同じ講義を何個か受けてるよ」

「え、あ、ごめん」

「ハハハツ、謝らないですよ」

そう言っつて女性は隣に来て椅子に座った。

「どうするの？」

「え、なにが」

「お昼」

「ああー」

そっか。今お昼か。

隣でのんきに寝てる誰かさんを見ていて忘れていたよ。

けどお昼っつて思い出すとお腹が空いてきた。

今日はお弁当を作ってくるのを忘れた。

そのため購買に行き、お昼を買ってこないといけない。

しかし隣の彼女は俺の肩に頭を乗せている。

これでは動くことができない。

だからっつて起こすこともできない。

これはヤバイ。

あああ！いろいろ考えて頭がこんがらがってきた！

グウっー

「あっ」

「ぶっ」

お腹が鳴った。

「フフフッ！お腹減ってるのね！」

「うっ、はい」

恥ずかしい。顔が熱い。

まさかこんなに笑われるなんて、思いもしなかった。

さっさとどうする。

「はい。あーん」

「え？」

突然言われ向くとフォークにから揚げが刺さっていた。

「おなか空いているでしょ？」

「うん」

「動けないから食べさせてあげるよ」

「え、悪いよ。それに……」

「彼女さんに悪い？」

「いや、そうではなく。その……」

「恥ずかしい？」

「う、うん」

「顔が赤いよ」

そんなこと言われるとさらに赤くなるよ！

こんなこと彼女ともやったことないのに。今知った女性にやってもらうなんて（女性のほうは前から知っているようだけど）。

「ほら、腕が疲れてきたから」

そう言って、から揚げを近づけてくる。

から揚げのいい匂いが空腹のお腹をさらに空腹にする。

空のものをさらに空にするなんてすごいな俺のお腹。

「それじゃ……」

アムツ

「うー！」

「どう？」

「うん！すごくおいしいー！」

肉は柔らかく、衣も程よい揚げ加減。

こんなにおいしいから揚げは食べたことがない。

「それじゃもうひとつ。はい」

「うんっ。おいしい」

「よかった。これ手作りなんだ」

「え、から揚げ手作りなの？」

「うん。お弁当は全部手作り」

「すごいね。全部手作りなんて」

俺の弁当は全部レトルト品を自然解凍した詰め合わせだよ。

「今度なにか作ってこようか?」

「え、いいの?」

「うん。趣味が料理とお菓子作りしかできないから」

なんて女子力の塊なんだろう。

こんな人が彼女なら幸せなんだろうな。

「なに、楽しそうにしているの?」

「あ、起きたか。これ美味しいから食べさせてもらったら?」

「はい、どうぞ」

「う、うん!おいしい」

「だろう!料理がだきるなんてすごいな」

「そんなことないよ」

「そんなことあるよ。料理ができる女性って素敵だな」

「もー、誉めてもなにもでないよ」

「それは、残念」

「ごめん。マリーちよつと用事思い出した」

「そっか。また」

そう言つて素早く出ていった。

それほど大事な用事なら俺の隣で寝てるなよ。

「……あちゃー、これはやり過ぎたかな」

「うん?どうしたの?」

「ううん。私も用事を思い出したから」

「そっか。弁当ありがとう」

「いいよ。それより彼女のこと大切にね」

「え、う、うん?」

謎の笑みで出ていってしまった。さて、一人になった。

お腹は満腹。

次の授業まであと一時間はある。

どこかで昼寝でもしようかな。

「いや、明日の天気とか必要なもの調べておこう」

さっそく、現代文明の小型パソコン。スマホを使いネットを開き調べものを始めた。

そして、今。

朝早くから待ち合わせした俺が運転する車で海に向かった。

「いやー、今日は晴れて良かったな」

「そうね。これこそシャイニー！」

「久々に聞くなそれ」

アイドル時代には耳にタコができるほど聞かされた言葉。

今ではあまり聞かなくなってしまった。

「それにしても釣りの一式、本当に用意しなくて良かったのか？」

「oh yes! 釣り道具はパパが持っているのを貸してもらったから」

「よくお父さん許してくれたな」

社長の娘さんを朝早くから連れ出して俺大丈夫だよな？ 後ろの黒い車はボディガードとかではないよね？

「それよりどこで釣りをするの？」

「ああ、それなら少し行ったところにある釣りの名所があるから」

目的地につくまでの車の中は楽しい話で盛り上がった。

車を止め、荷物を下ろす。

「ここが目的地？」

「そう。釣り人の中では穴場らしい」

木負堤防。陸から海へと伸びた道に赤い灯台が目立つ隠れた釣りスポット。

「さーて、釣りを始めますか！」

「うん。レッツenjoy！」

うきうきと糸を海に垂らした。

〳〳数分後〳〳

「釣れないな」

「釣れないね」

全く魚が釣れない。

あれから話しをしながら待っていたら、人が次から次えへとやって

来た。

隣で魚を釣り上げる人を見ては負けてられないとやってみたが。

「時間だけが過ぎていく」

波の音と鳥の声。

そして、

「スウー スウー」

寝息が聞こえる。

隣をみると、頭がコクツコクツと動いていた。

朝早いかから来ていたから眠いんだろうな。

隣で寝る彼女の横顔はいつ見ても飽きない顔だ。

俺は静かに糸を海に垂らして魚がかかるのを待った。

「う、うーん！」

腕を伸ばしながら起き上がる。

「良く寝ていたな」

「うん。 good morning！」

「なにが good morningだ。 もうお昼過ぎだ」

「え、お昼？」

彼女は首を傾げ太陽を見て顔を戻した。

「お昼！」

大声をだして周りの人たちが振り向く。

「それなら……」

彼女は自分が持ってきた大きなかばんを漁った。

「はい、お弁当」

「え、弁当？」

「そう。お弁当」

風呂敷を解いてふたを開ける。

「おお、弁当だ」

一段目にはおにぎり。

二段目には卵焼きにウインナー、トマトにブロッコリー。そして、から揚げ。

「これ、全部手作り？」

「うん！」

「それじゃ、一口いただきます」
から揚げを一口、いただく。

「お、美味しい！」

「本当!？」

「美味しいよ！」

「昨日のから揚げとどっちが」

「こっちだよ！」

「よかった。昨日帰ってすぐ準備したから」

「昨日……?？」

そっか。そういうことか。

昨日早くいなくなったのは今日のために弁当を準備したからか。

「昨日寝ている間に仲よさそうにしているから」

ああ、これは嫉妬ってやつか。

「なに言ってるんだよ」

「ごめんね。こんな彼女で」

下を向く彼女。

俺はなにやってんだよ。

こんなことでいいのか。

違うだろ。

「ちよっと付き合ってくれ」

そう言つて。俺は釣り道具をしまい車に積む。

車を走らせて沼津港にやってきた。

沼津の海に立つ大きな水門。びゅうお。

ここは津波から街を守るために作られ、最上階が展望台になっている。海と街を見渡せることができ、富士山も見ることが出来る。

エレベーターに乗って最上階に行く。

夕日が海に沈むところだった。

「前から思っていたけど自分を下に見すぎだよ」

あの頃もそうだった。自分には無理など言っていた。

「俺はその笑顔で助かったことが何度かあるんだ」
いつも隣で支えてくれる笑顔。

「今日、釣りの帰りにここにこようとしていたんだ」
俺は沈む太陽を見ながら言う。

「そしてここで言おうと思って」

彼女の手を握って、

「好きだ」

彼女の顔を見ながら。

「こんな俺だけと一緒にいてほしい」

言う。俺の願いを。

「しかたないな。いつも一緒だよ。darling!」

その顔はいちちもの元気な小原鞠莉に戻っていた。

違うのは頬の赤みはいつも以上に赤かった。

第12話 謎が謎の木曜日

「大変だよ、これは事件だよ！」

第一声は大きな声から始まった。

「朝からどうしたの？忘れ物でもしたの？」

「なにを言っているの曜ちゃん。千歌が忘れ物で騒ぐなんていままさらでしょ？」

「それは、どうなの千歌ちゃん……」

梨子は空笑いしながら話しを戻す。

「そうなの、これは事件だよ！」

また話しが冒頭に戻る。これでは無限ループだ。

「えーと、事件はわかったから詳しく話してくれない？」

「えーとね曜ちゃん。これなの！」

千歌は二人に白い封筒を見せる。

「も、もしかして!!」

「なんだろう?」

「なんでー!!」

千歌が首を傾げると二人は驚いて言う。

「千歌ちゃん。それはラブレターだよ」

「曜ちゃん、そんないきなり言っちゃうの」

「梨子ちゃん。これは千歌ちゃんのためなんだよ」

「う、うん。そうだね」

二人頷き、千歌に顔を向ける。

「えーと、数字しか書いてないよ」

「勝手に開けちゃったの!!」

「えっだって千歌の下駄箱に入ってたんだもん！」

「そうだけど」

「現代の女子高生が下駄箱って、クツ入れて言わないんだ」

曜は呆れて、梨子は別のことに驚いていた。

「数字だけ？」

「あつそれなら私も貰ったよ」

「え」

「私も」

「梨子ちゃんも！」

二人とも千歌に封筒を見せるが、色が違う封筒だった。

そこには白い紙に数字が2つ書かれていた。

千歌の紙には『15』

梨子の紙には『23』

曜の紙には『03』

とそれぞれ書かれていた。

「みんなバラバラなんだね」

千歌が紙を見て言った。

「なんだろうね、これ？」

梨子が呟くと、

ピーポーパーポーン

『2年生の高海さん、渡辺さん、桜内さん。至急生徒会室に集合してく

ださい。繰り返します——』

校内放送が響いた。

「この声はダイヤさんの声、だよな？」

「うん。ダイヤさんだね」

「生徒会室に呼ばれたね」

千歌と曜、梨子は顔を見合わせた。

「まったく、遅いですわ」

「遅い？時間に100se??」

「いやいや、今さつき放送したばかりだよ」

「それでもすぐ来るものですわ」

イライラし始めるダイヤさん。

「あーあー、飽きてきたなー」

鞠莉はあくびをした。

「いやいや、飽きるの早いよー、最初に騒いだのはマリーでしょ」
果南姉はタメ息を吐いた。

「遅れましたー!!」「すみません!」

扉を開け生徒会室に入ってきた2年生トリオ。

「遅いですわ!」

「落ち着いてよダイヤ!」

「ホワツツ!ダイヤがカンカンダイヤに」

「なんですってー!」

「わわ、マリーも変なことを言わないでよ!」

3年生トリオがヒステリック状態に。

「これは、どうしたら」

「ほっときなさい。そのうち収まるわよ」

「あれ、ルビィちゃんに善子ちゃん?」

「ヨハネよ!」

「それは……」

「私が説明しますわ」

ダイヤさんがその場にいる全員に見せたのは、

「あ、白い封筒!」

「やっぱり、高海さんのところにも」

「やっぱり?それじゃ!」

「そうなのよ、梨子。マリーたち全員このラブレターを持っているのよ」

「全員じゃないでしょ」

「あれ?全員じゃないの?」

「いやー、曜たちは封筒貰ってるでしょ?」

果南姉に言われ頷く2年生。

「1年生も全員貰ってるけど、3年生は……」

「なぜ、私だけないのですの!」

「ダイヤだけNOラブレターなのよ」

「「あぁー」」

なにか、納得する2年生。

さつきまで怒ってる原因が自分だけ白い封筒を貰ってないからつと納得する。

「話しを戻すわよリトルデーモンたち」

「あ、そうでしたわ」

善子に話しを戻される。

ダイヤさんは話し始める。なぜここに全員を集めたのか。

いや、集めなければならなかったのかを。

「皆さん、机の上に貰った紙を出してください」

ダイヤさんに言われ机の上に出す。

千歌が『15』

梨子が『23』

曜が『03』

善子が『21*』

ルビイさんが『43』

果南姉が『32』

鞠莉さんは文字が書かれていた。

ダイヤさんは無し。

これで全員が出した。

千歌がそれぞれの紙を見回す。

「鞠莉さん以外はみんな数字なんだね」

「Yes! マリーだけ特別よ」

「それで、なんて書いてあるの?」

ダイヤさんが紙に書いてあるの文字を読み上げる。

「海を守護する9人の女神たちにおくる。」

今我の手に知恵の女神がいる。返しほしければ6人の女神に謎を送った解いて、我の元に来たまえ。

更なるヒントが欲しければ黒い石の者に聞きたまえ』と書いてありますわ」

文章を聞き、固まる全員。

「9人の女神って、千歌たちのこと？」

「そう、だね」

「それで知恵の女神って？」

「黒い石の者ってのも気になるね？」

「ヒントとも書いてあるわね」

「謎が謎を呼ぶ、Mystery」

千歌と梨子、曜、果南姉、善子、鞠莉は顔を見合わせては謎を解こうとする。

「あの一、知恵の女神ってマルちゃんだと思っただけど」

「「「「ああー！ー！ー！！」」」」

「なんでそのことを早くいわないのルビィ！」

「だって今気が付いたから」

「でも知恵の女神がマルだと過程づけるなら納得することできる」

「すごい、果南ちゃん探偵さんみたい！」

「Detective果南、この黒い石の者は誰？」

「いやいや、マリー。そこまではわからないよ」

「とにかく、今は花丸さんを探すしかないですわね」

「そうだねダイヤ。そのためにはこの暗号を解くしかないのか」

果南姉はもう一度机に並べられた紙を見直した。

「やっぱり、さっぱりわからない」

果南姉は見直した途端に諦めた。

「このヒントを持っている者を探さないといけなくなってきたわね」

善子の一言に頷く皆。

「「「「このヨハネにお任せ！」」」」

第13話 解答する木曜日

「さあ、悪魔よ。このヨハネに探し物の場所を教えたまえ」

「これは、なにをやってるの……」

「電気消して、カーテンまで閉めて」

「それより、怖い」

「けど、おもしろいよ!」

「Yes! 闇呪文ね」

「ええい! 馬鹿らしいですわ!」

「あ、眩しい」

ダイヤさんがカーテンを開けて太陽の光が差し込む。

「ああ! なんてことを!」

「静かにしなさい。まったく、このようなことで探し物が見つかるわけじゃないですわ」

「なんでそんなこと言い切れるのよ!」

「だって、善子さん。あなたどっからだしたかわからない水晶でさっきからなにかやってますけど、バレバレですわよ」

「な、なにが……」

「スマートフォンで調べてることが」

「あ、えーと……」

みんなの視線が向けられる。

「まったく、そんなもので調べ物がわかるわけじゃないですわ」

「そんなことない!」

「でしたら、今探している黒い石の者はどこにいらっしやると言うのですか」

「それは……」

「それは?」

「あ、あなたよ!」

善子はビッシ、とダイヤさんを指を指した。

「私！」

「そうよ。あなたはあのときの封筒はどこにやったの」

「あのとき？」

「ここに皆が集まったときに見せた白い封筒よ！」

「ああ、あれはなぜか私の机の中に入ってたわ」

「それって……、ちなみに中身の確認は？」

「見てみましたが全くわからないものでしたわ」

「ちよつと、貸しなさい！」

ダイヤさんから封筒を奪い取り、中身を確認する。

「こ、これは！」

「なになに、善子ちゃん？」

皆が封筒の中身を見る。

そこには、『この封筒を見つけたってことはヒントが欲しいと言うことか？』

「やかましい！」

『どうしても？欲しいか？』

「はやく、教えなさいよ！」

「善子ちゃんさつきからなに突っ込んでるの？」

『ヒントを二つ与えよう。一つは手紙の裏を見て見たまえ』

「手紙の裏？」

「ああ！数字が書かれてる！」

「本当だ！果南ちゃんは④番で千歌は①番だ！」

「けどこれがどうなると言うのよ」

「まあまあ、ダイヤ。続きを聞こうよ」

『もう一つのヒントは数字を平仮名表に当てはめたまえ』

「数字を平仮名？」

「ますます謎が深まるばかりですね」

『少しヒントを与えすぎてしまった』

「そのヒントでさらにわからなくなってきたよ。ううー」

『ここまでヒントを与えたんだ。早く謎を解いて、助けに来ようね！』

「つと、書いてあるわ」

「そう言われても、謎が全く分からないな」

「とりあえずこれまでわかったことをまとめてみましょう」

千歌『15』①

梨子『23』④

曜『03』②

善子『21*』③

ルビィ『43』⑥

果南姉『32』⑤

「この数字はやはり文字になるのでしょうか」

「そうだね、ダイヤ。数字を平仮名……まさか！」

「え、わかったの果南ちゃん！」

「たぶん、だけだね。善子、スマフォを貸して」

「ヨハネよ！まったく。はい」

「ありがとう。もしかしてだけど」

そう言って果南姉は善子から借りたスマフォに文字を打っていた。

「数字を平仮名って言うのは、スマフォに文字を打ち込んでいくときのことなんだよ」

「スマフォ？文字を打ち込んでいく？」

「例えばこの『15』をスマフォに打ち込むときは最初に左の数字『1』つまり『あ』行、右の数字は『5番目』を現していた。その答えは『お』となるの」

「なるほど、『*』は文字に点々をつけるときに使うから、そのことをすべての数字に当てはめると『お』『く』『ん』『が』『つ』『し』になるのわけね」

「そういうことだよ、ダイヤ。そして手紙の裏の数字は文字の順番を現しているの」

「それじゃ、並べ替えると『お』『ん』『が』『く』『し』『つ』となるわけだね」

「鞠莉もわかったようだね」

「どうやら、三年生のトリオは謎を解いたようだ。」

「だけど、他の皆はただただ驚いているだけだ。」

まったくこれだけの問題を解くのにどれだけ時間を使ってるだか。

「それじゃ今から音楽室に行こう！」

おお、千歌を先頭に皆こっちに来るか。

「さーて、皆くるよ」

俺は隣で本を読んでいる女子生徒に言った。

「意外に遅かったすら」

パタンと本を閉じてここ、音楽室の扉を見つめる。

ドドド

多くの足音が聞こえる。

まったくなで廊下を走るかな。ダイヤさんは怒らないのかな。

バーン

「ああ！まー君と花丸ちゃんいたー！」

扉を開ける音が響く。

もう少し優しく開けろよ。

「さて、説明をしていただきましょうか？」

「ダイヤさん、少し落ち着いてくれますか？」

「落ち着く？なに言ってるの誠」

「怒っているの果南姉」

「果南さんだけじゃないよ。誠君」

「おお、これは皆さんがお怒りですか」

「マルちゃん大丈夫？」

「大丈夫ずら。意外に楽しめたよ」

「まったく心配して損したわ」

「一年たちは温かいねー」

「それよりなんでこんなことをしたのかなYOU？」

「えーと、少し遊んだだけだよ」

「これが少しなんだ、誠さんにとっては」

「あれー、梨子さんも怒っているのかな？」

「梨子ちゃんだけじゃないよまー君」

「ははは、これは俺のゲームオーバーってやつかな」

このあと皆からの質問攻めと言葉で説明できない地獄を見た。

BS 「良い」より「善い」人

7 / 13

あの空はこれまでと変わらない。星が輝く星空。
この街は少し変わった。年を増すごとに姿を変える。
私の心は少しも変わらない。あの頃から歳をとらない。
彼との距離はずっと変わった。これからもこの先も。
変わらない。二人の距離。

「相変わらず人がすごいな」

人混みを避けて安全地帯である場所を見つけて立ち止まる。
あちらこちらへと人は行き交う沼津の夏祭り。

歩行者天国にされた道は波に流され歩くのがやつとだ。
スマホオに連絡がくる。

『今どこにいるの』

「悪い、人混みに流されて」

『はやく来なさいよ！』

「怒るなよ」

『怒るわよ！なんで私だけこうなるのよ！』

はあー、俺は絶賛迷子中の幼なじみを搜索していた。

「もう少し待っている。俺が見つけるから」

『うん……』

「周りになにが見える?」

『えーと、大きな交差点で大きな時計がある』

「だいたいわかったよ。あと少しの辛抱だ」

『うん。はやく来てね』

電話を終え、人と人の間をすり抜けていく。
少しでも早くアイツの場所に行かないと。

「え、善子ちゃんがない!?!」

千歌が大声を出す。

周りの人たちが何事かと振り向く。

今A q o u r sの皆は沼津駅南口、電車の車輪が置かれた記念石碑前に集合していた。

いや、一人を除いて。

「声が大きいよ」

果南姉に口を押さえられる。

「果南さん、手離してあげてください」

「千歌ちゃんが大変だよ！」

「え……あ、ごめん千歌！」

千歌を見ると顔が青くなっていた。

果南姉力強いから、千歌の息止めていたようだ。

「ゼーハーゼーハー」

「大丈夫、千歌ちゃん？」

「う、うん梨子ちゃん。なんとか」

千歌の力ない返事が帰ってくる。

「どうしますの、手分けて探します？」

「それだと、さらにバラバラにならないかな？」

「うーん、最大級のQ u e s t i o n」

3年トリオが考える。

まあ、実際に考えてるのは果南姉だけだと思うな。うん。

「しかたない。俺が探してくるよ」

「え、まー君一人で？」

「まあ、不幸なあいつでも連絡ぐらいはつくだろ」

「けどこの前、起動画面から動かなくなって連絡とれないって泣いていたよ」

「マジですか、梨子さん」

「うん。私が操作したら動くようになったけど」

「ああ……これは」

「はやく善子さんを探しなさいー！」

「私たち三年生と一年生は迷子センターに！」

「それじゃ、千歌たち二年生は駅周辺を！」

「俺はとりあえず遠くを探してくる！」

「一時間後は花火の席に集合ですわ」

「そっか、ダイヤさんのおかげで花火の席が人数分あるんだった」

「ですから、善子さん一人いない席は認められませんわ」

「わかってます。しっかり探してきます」

こうして俺たちは不運の墮天使、津島善子探しが始まった。

迷子放送をしてもらってすぐに、まさかの善子から連絡がきたことがよかった。

善子と連絡後、皆に花火の場所に善子と行くと伝えた。

「それで、あいつがいるのは……」

善子がいる場所にたどりついたが、人が多く見当たらない。

まったくこれでは人がごみのようだ。

「こっちー！」

声が聞こえそっちを見ると、手をぶんぶん振る人が。

見間違えるはずがないお団子頭の少女。善子だ。

「待たせたな」

「まったく、ヨハネを待たせるなんて」

「いいだろ、見つけたんだから」

「それでも遅いのよ！」

「どうしろと言うんだ」

「呪文とか魔方阵などで現れなさいよ！」

「無茶言うなよ！」

「なによ、リトルデーモンのくせに生意気よ！」

「確かに俺はお前のリトルデーモンかもな」

「あら、今回はあつさり認めたのね」

「わからないけど、お前がいなくて聞いて心配したからな」

「そ、そうなの。ありがとう」

「さて、皆さんのところに行くのにもまだ時間があるな。どうする?」

「どうするとは」

「二人で少し屋台を見て回るか」

「そ、それって!？」

「やだったか」

「別に、リトルデーモンの願いを叶えるのもヨハネの使命だもね」

こうして善子と二人で沼津の夏祭りを見て回ることにした。

「祭りって言ったらなにを食べる?」

「そうね、この輝く禁断の果実かしら」

「はいはい、りんご飴と言おうね」

「ちよつと!次はあの茶色い麺!」

「焼きそば、確かに祭りの焼きそばは一味違うな」

「あと空の綿毛と偽りの仮面」

「綿飴とお面だろ」

「どれもわかるのね」

「そっか?簡単にわかったぞ」

「そ、そうなの」

「ああ、ほら欲しいもの買いに行こうぜ」

「それなら。うん」

「え……」

差し出される左手。

「これは、どういうことなんでしょうか?」

「このこともわかりなさいよ!」

善子は自分の左手を俺の右手に絡めた。

「これで、私がどっかに行っても大丈夫でしょ」

「そ、そうだな」

なんだ、一瞬顔を赤くなった善子にドツキつとなったぞ。

「好き」

「え、えええ!？」

なんだって！好きってなんだ！いや、待て。これは好きって言うてもよくあるLOVEではなくLIKEのほうであって、異性としてではなく、友達として好きってやつであって俺が好きってやつではない。うん。そう。そうだよ。うん間違いない。それなら好きだよ俺も友達として、いや幼馴染として好きだぞ。よって答えは！

「ああ、好きだぞ」

「よかった。はいチョコバナナ」

「ちよ、チョコバナナ？」

「あれ、もしかしてイチゴのほうがよかった？」

「バナナ……そんな、バアアアアアアアアアアア！」

そうだよな、なに考えているんだよ。一人いろいろ考えてバナナが好きって。ははは、バカだな俺。

「あなたは何も買わないけどいいの」

「そうだな、なら久々にあれ買うか」

そう言い、俺は近くの店であるものを買った。

「まだ、売っていたのね」

「それより味がたくさんあるんだな」

「もともとはピンク色のしかなかったのに」

「おお、みかん味があるぞ！」

「み、みかん！」

「怯えるなよ。いつものピンク色しか買わないから」

「はやくここから離れましょう！」

「わかったから引つ張るな！まだ品をもらってないから！ああ、お釣
り！」

善子に引つ張られながらも品を受け取り離れる。

俺が買ったかったものは『さくら棒』と呼ばれるピンク色の麩菓子である。静岡県にしかなく他県では見かけたことがない。これがな
いと祭りに来たとは思えないんだよな。まあ、最近では沼津に東名高
速ができたため全国的に少し知れ渡ったようだが。

「そうだ。今日は浴衣じゃないんだな」

「だって浴衣だと、汚してしまうから」

「そっか。今ここに浴衣が無料で着れる券があるんだが」

「なんでそんなものが……」

「バイトで貰った。有効期限が今日までなんだよ」

「それなら、もつたいないからしかたなく貰ってあげるわ」

「そっか。よかった」

俺は無料券を持って商店街の中にある着物専門店に。ここには子
供の頃からお世話になっている。

そのためか、

「あら、誠くん」

「あ、お久しぶりです」

「この前おばあちゃんが来たわよ」

「そうなんですか」

「ああ、そうそう。今いい浴衣が届いてね」

「ああ、あのすみません。それはまたお願いします。今日はこの券が
あったので」

「あら、それじゃ隣の彼女に浴衣を？」

「はい。お願いします」

善子が心配した顔で俺を見るが俺は笑顔で送り出す。心配するな。おしゃべりだけど怖い人ではないから。

善子が奥に連れてかれ、数分後。

外では人がさらに騒がしくなってきた。もうそろそろ花火の時間か。

「誠くん、待たせたわね」

店主の後ろから現れた善子。

俺は言葉が出なかった。

「どう……」

「ああ、いい……」

白の浴衣に淡い青い花が描かれていた。

髪のお団子は横ではなく頭の後ろに束ねられていた。

最初は善子とわからなかった。いつもの雰囲気かなかった。

「……」

「……」

二人店を出たあとも無言が続いていた。

なにを話せと。いつもの善子ではなく、知らない女性と歩いている
としか思えない。

「今って何時」

「まてよ、えーと7時だな」

「そう」

「うん」

うん。7時。うんんんんん!?

「7時!!」

二人そろって液晶に映し出された時間を見る。

そこには花火の席に集合する時間。今から向かうか? いや、ここからだと少し遠い。

「これは……」

「とりあえず」

俺は電話を。

「あ、ダイヤさん。すみません、時間が過ぎてしまいました。はいはい。大丈夫です、隣にいます。それで今からそちらに向かうのはどうやら無理そうなので、皆で楽しんでください。はいこっちは心配しないでください。はい、それでは」

「大丈夫なの」

「ああ、今からあそこに向かうぞ」

俺は沼津駅の隣に立つショッピングセンターとマンションが一つになった建物を指を指す。

「あそこに、今から?」

「心配するな。さあ」

善子の左手を引き、向かう。

3、4、5階は立体駐車場となっていて、人がいない。

その駐車場の4階に来た。外をみると祭りの光りが照らされていた。

「こんなところに連れてきてどうするの」

「まあまあ、もうそろそろだから」

キューン

バーン

大きな音と共に暗い空に鮮やかな大きな花が咲いた。

「きれい」

「だろ」

空に広がる花は現れては消え、現れては消えるを繰り返した。

「まるで、あなたね」

「俺が花火か？やけどするぜ」

「バカなの」

「うわー、冷たい視線」

「現れたらいつの間にか消えた」

「でも、また現れただろ」

「でもまた消えそう」

「心配するな。俺は消えない」

「本当……」

「ああ。今度はずっと隣にいるから」

「私ずっと——」

バーン

——だったの」

「なんだって?」

「ううん。今日はありがとうって」

善子の笑顔は花火のようにきれいだった。

第14話 金曜日の放課後

「だから違おうよ果南ちゃん！」

元氣よくダンスを教える千歌ちゃん。

「えーと、こう？」

一生懸命ダンスを習う果南ちゃん。

「だからなんでスノハレのダンスをしてんだよ」

私の知らない二人のもう一人の幼馴染の誠君。

私が知っているのは私たちの頼れる人であり、由一の男性であること。

私が知らないことは二人だけが知っている顔があり、知らない顔がないことである。

それがなんだか………。

「どうした？」

「え、うわ!？」

座っている椅子からバランスを崩しおしりを床にぶつけてしまった。

「え、大丈夫曜ちゃん！」

「誠なにしたの」

「さつきから元氣なくしているから心配して顔を近づけただけなのに」

「大事な曜ちゃんになにかあつたらどうするの！」

「えー！俺の責任になるの」

「そうだよ曜は高飛び込みの選手の中でも大切な人材なんだよ！」

「おお、それは大変失礼しました。お体に異変など痛みはありませんか？」

「おお、まー君がいきなり弱腰になった」

「これはただ、女の子を怪我させることに大変恐れているんだよ」

本当に三人は仲がいいな。

ここに梨子ちゃんがいいたら同じことを考えるのかな。

今ここにいるのは私と千歌ちゃんと果南ちゃんと誠君の四人だけ。

皆がそれぞれ用事があるようだから今日は練習がお休み。今日の

休みのことを知らなかった誠君とたわいもない会話をしていた。

それなのに、今こんなことになってしまった。

「だ、大丈夫だよ——」

一瞬私の心に悪魔の囁きが聞こえた。

「やっぱり、少し足を挫いたかもしれない」

「「えー！！！」」

大声をだす三人。

耳がキーンってするよ。

「どうするのまー君！」

「落ち着いて千歌。とりあえず誠を離してあげて！」

「お、俺が怪我を、将来の選手の人生を……」

「えーと、誠君？」

あれ、なんか大変なことになってしまった？

「お嬢様、お望みの飲み物です」

「う、うん」

「肩凝ってませんか？それともお菓子が欲しいですか？」

「だ、大丈夫だよ」

なんでこうなった。

あの後誠君は千歌ちゃんと果南ちゃんに連れられて、どこかに行つてしまった。

数分後、黒い執事服装を着込んだ誠君が戻ってきた。

なんでも言うううことを聞くと言うので取り合えず飲み物を買ってきてもらった。

『了解しました』つと言つて教室を後にした、また数分後戻ってきた。

これでわかった。誠君は本当に私の命令を聞いてくれるのだと。

「他になにかありましたら言つてください」

「それじゃ、その他人行事をやめてくれる?」

「えーと」

「なんだか、これまでやっとわかつてきた誠君がわからなくなつてきちゃつて」

「わかった。曜」

「うん。それこそ知つている誠君だよ」

「そっか。そう言つてもらえてうれしいよ」

「でもなんでいきなりそんな服装をしているの?」

「怪我させてしまったから、少しでもお詫びとして」

「いいのに、そんなにたいした怪我じゃないから」

「でも、怪我をさせたから」

悲しい顔をする誠君。

初めて見る顔。

「な、なんでそんな顔をするの」

「え……」

あ、声にでていた。

恥ずかしい。

「あのね、少し場所を変えよう」

「わかりました」

「え、おわ!?!」

「それで、どこに行く?」

「その、とりあえずこの格好を——」

「歩かせることはできないから」

でも、お姫様抱っこなんて恥ずかしいよ!

この体制だと、顔が近い。

こんなに人の顔を見たことはないな。手を伸ばせばすぐに届く距離にある。

「——う、よう、曜?」

「あ、え、なに!」

「それで、どこに行きたいんだ?」

「う、海に行きたい」

「海。わかった」

誠君は器用に足を使いドアを開ける。

え、この状態で外に行くの!学校は部活でまだ人がいる。

今私の状態を誰かに見られたら噂されるよね。それも他校の誠君にも迷惑をかけてしまうよね。

「あ、曜ちゃんだ!」

あ、ほら!考えているあいだにクラスメイトに見つかった!

どうするの、なんていい訳をするの!

「どうした?えーと、だれだっけ?」

「自分は沢田誠。時々この学校にお邪魔させてもらっている者です」

「う、うん。自分は曜ちゃんの友達で」

「それじゃこれから何度か顔を合わせることがあるかも」

「うん。そうだね。それで曜ちゃんはどうしたの?」

「少し足を挫いてね。それではこのあと用事があるから」

「うん。またね」

「また」

なんでもなかったように話しが終わった。

けれど、二人の会話を聞いていてなんだか……。

「それで外に来たけど、このあとどうするの?」

「え、海に行くんじゃないの」

「うん。そうだけどもさかこのままの状態で！」

「違うよ。俺の自転車を使うんだよ」

そう言つて、誠君は自分の自転車の荷台に下ろしてくれた。
まさか、これって。

「しかつりつかまつていろよ」

「つかまるつてどこに」

「脇はやめてくれ。肩にしてくれ」

「うん。じゃないよまさかこれって！」

「それじゃ、海までひとぱしりしますか！」

誠君がペダルに力を入れる。私は肩に手を乗せ、つかまる。

自転車はゆつくり進み、徐々にスピードが出てきた。

この学校の名物の坂に突入する。

「しかつりつかまつていろよ！」

「安全運転でお願い！」

自転車は急な坂をスピードを出して下りていく。

私はぎゅつと肩に力を入れて、背中に顔を隠す。

「見てみろよ！」

誠君に言われ顔を上げる。

「きれい………」

そこには坂の上からとの景色とは違い、太陽の光を浴びてキラキラと輝く海が見えた。

一瞬だけだったけど、あの輝きは忘れられない。

彼の大きな背中は安らぎをくれた。

「海に来たけど、どうする？」

学校近くの海の防波堤に腰を下ろす。

「本当はね足怪我してないの」

「え」

「歩けるんだよ、ほら」

私はその場で歩いてみせた。

「なんだー、よかった」

安心して横になる誠君。

「怒ってないの？」

「怒る？誰が？」

「誠君だよ。嘘ついていたんだよ」

「まあ、嘘はいけないな」

「ごめんなさい」

「でも、なんともなかったほうがうれしかった」

「うれしかったの」

「だって、曜の飛び込みを見ることができから」

「そ、そっか。よかった」

誠君は優しい。だから、あの二人は誠君と一緒にいることが好きなんだ。

「でも、なんで嘘をついたかは説明してくれるか？」

「それは、三人が仲よさそうにしていたから」

「三人？千歌と果南姉と曜のこと？」

「違うよ。私じゃなく、誠君だよ」

「お、俺！」

「自覚はないんだ」

「ないよ！そんなに仲良く見える？」

「うん」

「即答するほど」

「まわりの人が嫉妬するほど」

「そんなにか……」

言い過ぎたかな。

自分も嫉妬している一人なんてとつても言えない。

「たぶんだけど」

誠君は海を見ながら離し始めた。

「そんなに仲良く見えるのは、俺が忘れてるから」

忘れてる？

「俺、小さい頃の記憶をほとんど覚えてないんだ」

「え………」

記憶がない。

どういうこと。

でも、あんなに。

「記憶がないって言っても、全部ではなくところどころなんだよ」

それって。

「ああ、二人には教えてないんだ」

つまり。

「だから、覚えてないことを聞かれても困るから、二人と今を楽しんで
いるんだ」

そうだったんだ。

「卑怯なんだよ。昔がわからないから今を楽しもうなんて」

そんなこと。

「けど、今日はいい思い出を作ることができたよ」

そんなこと言わないでよ。

「ありがとう」

言わないで。

私は立ち上がり言う。

「昔を覚えてないんだって言わないでよ！」

そんなこと。

「認めない！そんなこと！」

言わせない。

「昔より今を楽しもうなんて！」

私は。

「私は今日は楽しかった！だから昔のことを覚えてなくってもいい
じゃん！今を楽しもうよ！」

「曜………」

「だから、そんな悲しい顔をしないで」

「ごめん。そうだよな」

誠君は立ち上がり、さつきとは違う笑顔を見せてくれた。

「これから、楽しい思い出をつくろう」
「うん！」

私は今日のことをどれだけ覚えていたのだろうか。

それでも、今日あったこと。

初めて知った彼の事実。

最後に見た笑顔。

忘れるかもしれない。

それでも、彼の背中の中から見る景色は忘れないだろう。

BS 奏でる桜色

9 / 19

今日の出来事は忘れない。

あなたの笑顔とあの景色。

私が知らない事を教えてくれる。

終わらない、これは始まり。

「ふうー、テスト勉強は休憩」

図書館で腕を伸ばす。

二時間も机に向かっているなんて、初めてで体が痛い。

「お疲れ様。頑張ってたね」

「少し頑張らないと」

「関心関心」

あー、こんなに頑張ったことがないから今は癒しがほしい。

「でも、疲れたー」

「そうだよね」

「よし、ひとつ走りしてきますか」

「うん。そうしよう」

おいおい、頭は疲れても身体は元気なのか。どうなっているんだあの二人の体力は。

俺はもう無理だ眠いよ。

「それじゃ、少し走ってくる」

「行くよ！千歌ちゃん！」

「あ、待ってよ曜ちゃん！」

「おーい、図書館内は静かにしろー」

「はーい」

本当にわかってるのかあの二人は。

「でも、珍しいね勉強会を開こうなんて」

「いやー、少し梨子に聞きたい問題があつて」

「へー、優等生の誠さんにも苦手な教科があるんだ」

「この問題がどおしても解けないんだ」

「ああー、それはここの数をここにいれるんだよね」
か、顔が近い。

「おおー、なるほど。ありがとう梨子」

「ふふっ、これぐらいの事ならいつでも教えてあげるよ」

「よし、お礼をさせてくれ」

「いいよ、大したことしてないから」

「それじゃ、問題」

「次はどこがわからないの？」

「違うよ。勉強じゃないよ」

「それじゃなに？」

か、顔がまた近い。

「いや、たいした問題では……」

「なに？はつきり言っつて」

「はい。いいますから」

「ならなぜ顔をそむけるの？」

「だって、梨子の顔が近いから」

「あ……」

元の位置に戻る梨子。これでエビ反りになっていた体制を変えることができるよ。あと少しで椅子からずり落ちるところだった。よかったよかった。

「それで、私に聞きたい問題って」

「ああ、本当にたいしたことではないけど」

「いいから言っつてみて」

「いや、この沼津っつて楽しい？」

「……………」

「まさかの無言！」

だから言いたくなかったんだ。だけど言わずにはいられなかった。どうするかこの空気、『やっぱりさっきの無しで』っつて、いやこれはなにか俺が感じ悪いな。『梨子にこの沼津を好きになってほしいから』

まあこれが本当に俺の気持ちだけど……まさかの無言。

「え、あ、ごめんなさい」

「いや、いいよ。無理しなくって」

「違うの。まさかそんなこと言われるとは思わなかったから」

「ほんと?」

「うん。ほんと」

「ほんとのほんと?」

「ほんとのほんと。千歌ちゃんにも言われたことがないから」

「千歌にも言われてないの?」

「千歌ちゃんには『沼津が好きになった?』つとは言われたけどね」

ああ、千歌には言われそうだな。あいつ東京から来た梨子のことすごく気にしていたからな。

うん?俺は千歌と同じ考えなのか?

「それじゃ、沼津はもう案内してもらった感じ?」

「そうだね、ほとんど」

そうだよね、沼津のほとんどは千歌たちが案内しているよね。

「それじゃ、沼津から離れた少し遠い場所に行かないか?」

土曜日の朝。

いつもよりはやい待ち合わせ。いつもより遠いため早めに集合しなければならぬ。

それなのに――。

「なんで俺は遅刻してんだよ!」

自転車をもう急ぎで漕ぐ。

信号で息を整える。十分の遅刻だ。いつもならありえない。

なのに今日に限って時計が遅れているなんて。

「着いたら謝ろう」

青になりまた全速をだす。

自転車を駐輪所に止め急いで駅に走る。

10分も遅刻だ、もしかしたらもういないかもしれない。
それならしかたない。

「やっぱり、いないか」

待ち合わせの記念石碑前には人はおらず、鳩が首をふっていた。
そうだよな、待ち合わせには遅刻はするし乗る電車はもう出てしまっている。

なんで俺はこんなにもダメなんだろう。

「はあー」

「ごめんなさい。お待たせしました」

「あれ？梨子」

「出かける準備をしていたら遅れてしまっ

「なんだ、よかった。今来たところなんだ」

「よく聞くセリフだけどまさか言われるなんて」

「いや、本当に今来たんだ。俺も遅刻してね」

「なんだ、よかった」

「どうするかー」

「どうするって、なんか困ったことでもあるの？」

「いやー、電車の時間が過ぎてしまっ

「え、一時間……」

「御殿場線だからな。本当にあそこは本数が少ないんだよ」

「東京ではありえない」

「はははっ」

そうだよな。東京ではありえないよな。

ただここは東京から離れた田舎だぞ。本数も限られた数しかないんだよ。山本線のように五分に必ず来るものではないしな。しい

て言って、バスもそれほど多くはない。

「さて、すぐ近くの喫茶店で休憩するか」

「それかすぐ近くのゲームセンターに行きませんか？」

「ゲーセンですか？まさか梨子からゲーセンと言う言葉が出てくるとは……」

「最近皆で遊びに行つて面白かつたので」

え、最近？……最近は皆と一緒にいたよね？

「あれ、それ俺呼ばれていない気がする」

「あ、それは……」

「今日を反らしたね」

「いいえ、反らしてません」

「いやいや、今更そのような言葉を言われても」

「さあ、ゲームセンターに行きましょう」

「はいはい。わかりました行きましょうか」

なんだかんだで流された気がするけど、そう言うことで南から北へと移動することにした。

確か俺が沼津にいるときはこの何でも施設「B I V I」は一度しか入つたことしかない。

隣にいる人は何度か来たことがあるようだが。

「さて、どうしますか」

「あれ？ゲームセンターに行くんじゃないの？」

「いやー、なんだかんだ来てみたが時間のようなので」

「え、ここまで来たのにー！」

「そうなのです。本当になんだかんだで一時間が過ぎてしまいました」

施設のネタが思いつかないとかではなく、来るまでの間で喫茶店で梨子が持つて来た手作りお菓子を食べながら一休みしていたからである。

「では、御殿場に行きましようか」

「うん」

御殿場線は沼津駅から出ている。そこから神奈川県まで繋がっている。

つまり、寝過ごしてしまうと静岡県から神奈川県へと少し旅ができってしまうのだ。

それでは御殿場線に乗って遊びにいきましょう。

「なんか車両少ないね」

「御殿場線だから」

「料金も少し高いね」

「御殿場線だから」

「窓の外も殺風景だね」

「御殿場線だから」

「さつきからその答えしかないの」

「御殿場線だから」

「そう、なの……」

「まあ、今から向かうのは少し山にあるから」

「海の次は山なんだ」

「静岡県は海も山も、東京には負けるけど町もあるから」

「けど、東京にはなかった輝きがあそこにはあった」

そっか。東京からなにもない沼津にやってきて、大変なことになってないか心配だったけどそんな心配はいらなかったみたいだ。

「輝き、か……」

輝くことは難し。俺にとってその輝きは眩しく、手を伸ばすことしかできないかったけど彼女は、梨子はその輝きに手を伸ばして自ら輝くことができた。

電車に揺られながら一時間。会話も電車の揺れのように弾んで一時間には三十分を感じるくらい。

「えーと、確かバスがあるはず。ああ、あれだ」

「次はバスに乗るの？」

「だから、集合時間が早かったのだ」

「な、なるほどー」

無料シャトルバスに乗り、目的地はすぐそこだ。

「さあ、着きました。ここが御殿場が誇る大型ショッピングモール！」

「おお、人がたくさん」

「そこなの、驚くのは」

「え、ごめんなさい。内浦との人の差がすごくて」

「はははっ、それでは気を取り直しておもいきり楽しもう！」

「うん！」

俺は忘れていた。女子という生き物を。

「あ、この服可愛い！」

洋服屋に行くとき可愛いと言って、長い時間を過ごすことができる。

「どうでしょうか、この服は？」

そして必ずと言ってもいい。なぜ男子に女子の服を質問するのだろうか。

「このバックいいな」

ブランド店に行きたがる。ここも長い時間を過ごすことができる。

「あ、けど値段が……高い」

そして必ずと言ってもいい。ブランド店なのだから高いだろ。

「うーん、このアイス美味しい！」

甘いものを食べて幸せな顔をする。

「誠さんのほうのアイスも美味しそう」

そして必ずと言ってもいい。なぜ人が食べてるものを欲しがる。

「すごい富士山が見える！」

初めて見たものに目を輝かせていた。

「一緒に写真を撮りましょう。あの写真をお願いします」

携帯を通りすがりの人に預けて、富士山を背景に写真を撮ってもらった。

「フフフツ」

携帯を見て笑った。

よほど、いい写真が撮れたのだろう。

帰る時間になってきた。

帰りもバスに乗って帰る。帰りは人がたくさんで座って行くことができないか。

2人立って行くことに。

「私こんな楽しい時間を過ごすことができたのはいつぶりかな」

「楽しいっていつも皆と遊んでいるのに」

「そうではなく、2人で楽しむのは久しぶりで」

「そっか、いい思い出ができたかな」

「はい。楽しい思い出ができた場所から離れるのが寂しくなるほど」

「今度はまた皆で来ようよ。いつでも行くことができるから」

「はいまた、来ましよう……2人で」

思い出は記憶だけではなく、心にも残る。

そしてまた来たいと思う。欲を言えばまた、2人で。

BS 勇気ある小人

9 / 21

小さな心に収まらない気持ち
初めての感情を隠して

今隣にいるなんて不思議な気分だ
この気持ちを伝えたい

気づいてほしいあなたにこの気持ち

今日は後輩からお誘いがかった。

天気もよく、出かけるには持つてこいの日だ。そんな日に遊びに行
くなんていい日だな。

けど一つ気になることがある。

「なんで、俺誘われたのだろう?」

誘われた理由を聞くと、

『お礼とお願いがしたので』

俺がお礼されることなんてした覚えがないぞ。

さらに言えば、お願いもなんのお願いか聞いてないな。

そう言えば、最近もお菓子をくれたな。

『え、これくれるの?』

『はい。美味しいので食べてほしくって』

確かにあのスイーツポテトは美味しかった。

いやーまさか手作りなんてね。手作りであんなに美味しくできる
なんて。

こんどレシピ教えてもらおう。

「確かここだよな。待ち合わせ」

皆だいきすき沼津駅。

なんか毎回ここで誰かと待ち合わせをしている気がする。

うーん、時間には少し早いな。

「あ、あそこに行こう」

いやー、時間つぶしにはあそこだよな。

「うーん。涼しい」

外は少し暑いので店内の中で休ませてくれますね。すぐ近くにコンビニがあったてよかった。ここなら多少は時間を潰すことができるな。まずは新商品を確認してと。

「おお、このお菓子新しいものでたんだ」

里にするか山にするか。人によって違うんだよね。

まあ、俺は里派かな。

よし、今度皆に聞いてみるか。

「つて、もう時間か」

なにも買わずにコンビニを後にして、待ち合わせの駅に向かう。

「まだ来てないか」

柱に寄りかかり、待つことにした。

くく5分後くく

「まだ来ないか」

くく10分後くく

「もしかして、待ち合わせ時間間違えた」

くく15分後くく

「どうしよう、連絡したらいいのかな」

悩んで悩んで携帯に手を伸ばす。

スーリコールで電話にでた。

『はい、黒澤です』

「ああ、ルビイさん。俺誠だけど今どこ？」

『え、今沼津駅ですが』

「俺も今沼津駅なんだけど」

『もしかして、南にいるのですか？』

「いや、北口にいるけど」

『私も北口にいます！』

「あれ、それじゃもういるのかな？」

一歩足を踏み出し辺りを見る。

『あのー、誠さんですか？』

「うお！携帯からも回りからもルビイさんの声が聞こえる?!」

振り向くとそこには、

「ルビイさんー！」

俺が寄りかかっていた柱の裏から現れた。

なるほど、柱の裏にいたからお互い確認することができなかったのか。

「さて、なんとか会うこと出来ましたね」

「はい。会えてよかったです」

「……………」

「……………」

言葉が詰まってしまう。

「とにかく歩こうか？」

「そ、そうですね」

とりあえずリコー通りへと歩みを進める。

その間も無言が続く。

お互いの視線がチラチラと交差するだけだ。

こうなったらこっちから話を切り出すしか。

「ねえ——」「あの——」

お互いに同時に発言してしまい、時が止まる。

「ルビイさんからどうぞ」

「いえ、誠さんからどうぞ」

「いやいやルビイさん」

「いえいえ誠さん」

お互いに引かない。いや押せないだろ！

けどこんなことを繰り返しては話しが切り出せない。やっぱり押すべきなのか？

でも、女子を引かせて男の俺から言うのもなにか違う気がするし。うーん、難しい。

「あの誠さんは楽しいですか」

「楽しい？なにが」

「今ルビイと過ごしてますけど楽しいですか」

「え、楽しいけど」

「それならいいですけど、ルビイ男の人と話すのもこのように一緒に歩くのも誠さんが初めてなので」

「緊張してる？」

「はい……」

「そうだよねそうだよね。こんな俺が隣だもんね。」

「なんか自分で自分の悪いところを考えるのって辛いな。」

「大丈夫、俺はルビイさんを大切するから」

「誠さんらしいですね」

ルビイさんに緊張されないように今日一日はカッコいいところをみせてみるか。

「よし！ルビイさん今からイトヨーに行こう」

「は、はい」

確かルビイさんはファッションが好きだったはず。

あそこに行って少し服など見て回るか。

俺とルビイさんは目的地のイトーヨーカドーにたどり着く。

ここな、服もあるし小物など雑貨も扱ってる。

確か俺の高校のカップルも学校帰りによく来るとか言っていたな。

「そっか、もう秋の服か」

「秋は可愛い服が沢山でるので迷うのですよね」

「そうなんだ」

「少し寄ってもいいですか？」

「もちろん。そのために来たのだから」

「やったー」

ルビイさんは喜んで服を見に行った。

俺もルビイさんの服選びを見ながらも自分の服を少し探す。

確かに秋の服は夏とは違い、少し大人の雰囲気が出ていて大人の仲間入りしたような気分がする。

「誠さん、この服どうですか?」

ルビイさんが服を選んで感想を聞いてくる。

その服は秋のような服装であったが少しルビイさんには大人すぎる気がする。

「いや、ルビイさんにはまだそれは早いかな?」

「そうですか、この模様が良かったけど」

「こっちはどうかな?」

「ああ、それもいいですね!」

ルビイさんは目を輝かして俺が選んだ服を見る。

少し近くにあったのを適当に言ったただけなんだけどね。

まあ、ルビイさんが喜んでいるならいいか。

「この服もいいなー、けどこれも」

長い。服を見て回るだけなのに長い。

ここにあるのはハッキリと言ってそこまで高校生に合う服は少ないのに。

「どうですか誠さん!」

「うん。悪くないよ」

けど、そんなにはしゃぐほどかね。

それにしてもすぐくはしゃいでくれて嬉しいな。

ぐうっく

「ピギイー!」

今のはお腹の音を隠すためのピギイーなのかな?

お腹か、そうだな俺もお腹が減ってきたな。

「よし、少し早いけどお昼にしよう」

「お昼ですか?ならルビイはあそかがいいです!」

ルビイさんに連れてかれたのは地下の食品エリア。

「ここは、ファーストフード店？」

「はい！一度来てみたかったんです」

まさかあの黒澤家の次女がファーストフードを食べたいなんて。俺たち庶民よりいいもの食べていると思えるが。

いや、あのダイヤさんでもプリンが好きという可愛い一面があると考えると黒澤家はそれほど俺が考えるほど豪華な食事をしていないのでは。

「誠さんはどれにしますか？」

「うん、ああ」

いろいろな思いを巡らせている間にルビイさんは自分のものは注文したようだ。

俺もすぐに注文をして、2人で座ることができる席に移動する。

「うーん、美味しい」

「はははっそれはよかったね」

「はい。これも誠さんと来られたからです」

「いや、俺はなにも。そうだ電話でお礼とお願いつて話していたけど」

「あ、それは……」

「話しにくいことかな」

「いえ、お礼はルビイみたいな小さく気が弱い女を彼女にしてくれたことです」

「なにを今更」

本当に今更だ。

俺とルビイさんは去年から付き合っている。ルビイさんから呼ばれ屋上に、そこで告白された。

『前から好きでした。あの、ルビイと付き合ってください』

顔を赤くして勇気を振り絞った告白。

俺の答えは、

『それは俺が言いたい。前から好きでした。俺と付き合ってください』

告白を告白で返すものだった。男が苦手と言い、男に話しかけられるだけで泣き出しそうになっていたのに、俺のことが好きと言ってく

れた時は驚いた。

お互い両思いだったのが勇気がでなく告白できなかつたが、あの場であの時はできた。

それから2人は晴れて恋人になった。

「俺はルビイさんが好きだった。小さいところも、勇気がないと言いつつ誰よりも勇気がある俺はそんなルビイさんが好きなんだから」

「ありがとうございます」

「お礼ってそのことなの？なら俺もお礼を言いたいよ」

「あと、もう一つあるんです」

「もう一つ？」

「はい、今日ルビイの我がままに付き合ってもらって」

「そんなこと」

「いえ、誠さんは優しいからそう言うんです大学生は忙しいとお姉ちゃんが」

「ああ〜」

確かに俺は今大学一年生、ルビイさんは高校三年生。

大学はそこそこ忙しいけど、暇なときは暇なんだ。

ダイヤさんは俺より有名な大学に通っているから忙しいだろうな。

「大丈夫、学校の勉強にもなんとかついていていけるから」

「それならいいのですが、誠さんはルビイの我がままにこれまで付き合ってもらったのでお礼がしたかのです」

ルビイさんは立ち上がり頭を下げた。

「これまで迷惑をかけたと思いますがこれからもよろしくお願いします」

迷惑なんて、一度もこれからも俺はしない。

ルビイさんといることが、一緒にいる時間が幸せなのだから。

「こちらこそよろしくお願いします」

俺も頭下げる。

お互い顔を上げ笑みを向ける。

周りからの視線を受け見ると拍手と声援が投げかけられた。

俺とルビイさんの2人は顔を赤くしてその場から逃げるように立

ち去った。

外に出て駅に向かい歩く。

「そう言えばお願いって?」

「あ、はい。その今日の思い出が作れたらなと思って」

「ならあそこに行こう」

なんでも施設「BIVI」。ここなら2人の思い出を作るにはもってこいだ。

「あのどこに行くのです?」

「え、ここ」

俺は指をさす。白い箱に入り口にはカーテン。

カップルで写真を撮る機械。

「もしかしてプリクラですか」

「そう、プリクラ。一度撮ってみたかったんだ」

俺とルビイさんは箱の中に入り、お金を入れる。

プリクラは初めてだ。ルビイさんにフレームやその他を任せてしまった。

「ごめんね、俺が連れてきたのにすべてを任せてしまった」

「いえいえ、2人の思い出を作っているので楽しいです」

さっそく写真を撮る。

3・2・1

パッシャ

撮った写真をいろいろ弄ることができるとみた。

ルビイさんが後で驚かせたいと言うので俺は今外でルビイさんを待っている。

「できました、誠さん」

ルビイさんはプリクラを渡してくれた。

2人とも顔を近づけ、顔が少し赤いがそれでも幸せそうに笑っている。

プリクラには『今日はありがとう』と書いてあった。

その言葉は俺も言いたいよ。

「また、会うことができですか」

またではなくすぐに俺は会いたい。

今を終わらせたくない。

だから俺は、

「明日も休みなんだ」

第15話

休息のはずな土曜日

今日は土曜日。

この一週間はいろいろあった。うん、本当にいろいろあつて一ヶ月間は過ごしたと思ってしまうほどだ。

まあ、そんなことないんだけどね。ないんだよね？ 本当にないよね？ 俺だけ違う時間軸を過ごしていないよね？

なんだか不安になってきた。

これはあれだ、今から迎えに行く人のせいだな。

えーと、確か10時に駅に待ち合わせだったよな。

「あれ、時計動いてない……」

時計が動いてない↓今何時かわからない↓つまり遅刻

「おいおい、待ってくれよ」

それじゃ、今は時間がわからない？

「えーとスマホはどこだ。俺のスマホは」

本当に俺のスマホはどこ？どこにやったけ。

そして、今ふつと気になったことがある。スマホと言うときもあれば、携帯と言うことがある。

おれはどっちが正しいのだろう。まあ、いつか。

「違うだろう。早く支度しないと！」

えーと、昨日は曜を家に送るため千歌に連絡した。その時は確かに持っていた。

その後曜を家に送り届けたら曜とアドレスの交換をしたんだよな。その時も確かにあった。

へとへとになりながらも家に帰ってきたら鞆をリビングに放り投げて風呂に入つて、夕飯食べてテレビ見てベットに飛び込んだらそのまま寝てしまった。

あれ、それじゃスマホはリビングに転がってる鞆の中か！

リビングに向かい転がってる鞆をひっくり返し中身をぶちまける。

「ないないないないないー！」

ない。ないぞ。鞆にないとしたらどこにあるんだ？

もしかして脱いだ服と一緒に洗濯してしまったのでは？

「ないぞないぞないぞないぞーぞー！」

洗濯した服をすべて外にだしたがどこにも小さな箱は見当たらない。
いい。

本当にどこにやったんだスマホ……。

うん？なにか忘れてるような。

「あ、約束の時間ー！」

とにかく斜めかけ鞆に財布と本を入れて待ち合わせした場所へ。

また待ち合わせ場所は沼津駅。家が駅から自転車で30分であった。
かった。

「つて、今から迎えに行く人必ずと言ってもいいほど多くの荷物を
持ってくるー！」

そう必ずだ。土産と言いながら自分の荷物を多く持ってくる奴
だった。

そうだとすると歩いて行くしかないのか。

そうして荷物を俺が持つことになる。

「はあー、行くのをやめるか」

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

何処からか音楽が流れる。

この音楽はμsの『僕らのLIVE君とのLIFE』だ。

この曲を聞いているだけでやる気と元気が出てくる。

「いやいや、聞いている場合か！この曲はスマホから流れてる！」
どこだ！どこから流れてる！

曲は俺の部屋から聞こえる！

間違いない部屋に入ってさっきより曲がはつきり聞こえる！

たぶんこれは電話だ！

相手が電話をかけてきている短い時間で見つけ出さなければ！
聞くんだ。

相手からの思いを。

聞くんだ。

その場所を。

耳を済まして、目瞑り神経をすべて耳に集中。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

「そこだー」

俺はベットの下に手を伸ばして掴む。

手に伝わる振動。

しつくり来る形。

見なくてもわかる、これはスマホだ。

誰かはわからないけど電話を鳴らしてくれた人ありがとう。

さして電話にでましようか。

「はい。もしもし」

『あ、やっとでてくれた』

「お、曜か。昨日ぶりだね」

『うん。もしかして今忙しかった？』

「いやスマホどこかやちやって」

『それじゃ見つかったんだね』

「ああ、曜のおかげだな。ありがとう」

『そんな私ほしたことはしてないよ』

「曜が電話してくれたから今電話できているからな、今度お礼するよ」

『お礼……私に、なんでもいいの』

「おう、俺にできる限りなら」

『うん。そのお礼期待しているね』

「おう、またな」

電話を切って時間を確認する。

「やっぱり時間過ぎてているか……さして、急いで行きますか」

急がなければ、アイツ怒っているな。

そう言えば、曜はなんで電話してきたのだろう。

まあ、アイツのおかげでスマホが見つけることができたからお礼しないとな。

家から駅まで走って行きますか！

「はあはあ、なんとか駅についた」

家から駅までの全力ダッシュ、すごく疲れる。

さて、どこにいる。たぶん荷物を多く持つていて周りからものすごく見られてる人だよな。

「つと、思ったが意外にもキャリアケース一つかそしてあの服装」

間違いない。あの人が探し人だ。

「あ、誠ちゃん！遅いよーまったく」

うわっ、一気にこっちに視線が集まった。

やめてくれよ俺は人に注目集めるのが苦手なのだから。

「ごめん、スマホが見つからなかったんだよ」

「それで遅れたの？」

「そう、時間がわからなかったんだよ」

「まあ仕方ない。許してあげよう」

「はい、ありがとうございます。はい」

「うん？その手はなに？」

「そのキャリアケース俺が持つ」

「おお、やさしーありがとうございます」

「へいへい」

キャリアケースを受け取りもう一度服装を確認する。

「その白衣はいつも着ているわけ」

「そりやこの服装があたしですから」

「さようですか。それでお昼ご飯どうする？」

「うーん、そうだねお昼か」

この辺でお昼を軽くすませることができるのは、赤い看板の格安ハンバーガー店にするかそれとも緑の看板のイタリアンのレストランに行くか。

ゆっくり話しができ何よりこの人がこの問題人を速やかに移動させないとまわりからの視線を移動させたい。

「しかたない、一番近いお店にするか」

「はい、誠ちゃんが決めたお店にあたしはついていくよ」
本人から許可が下りたので行きますか。

「それで」

「うん？ああ、あたしはBセットだよ」

「俺はAセットだ、じゃあない！なんでこっちに来たんだよ！」

「仕事だよ。今度はこっちで働くことになったんだ」

「今度はって、飛ばされたわけではないよね」

「やだなー首にはなってるよ。その目は信じてないな」

「わかったわかった」

手を伸ばしてポテトを食べる。やっぱり病みつきなる塩加減だ。

「ところで誠ちゃんはどなの？」

「どうってなにもないけど」

「スクールアイドルのプロデューサーになったんだっけ？」

「な、どこでそのことを」

「他にも千歌ちゃんと喧嘩したとか」

「ううっ……」

「簡単な謎で皆を翻弄させたとか」

「あ、あれは訳あつて」

「理事長もグルだからでしょ」

「そこまでも」

「どうせ、チームの結束力を高めたいとかなんとかで頼まれてやったんでしょ」

「はあー、わかってるならもういいだろ」

本当にどこまで知ってるんだ。いや、本当にどこで入手してるだ。

「フツ相変わらず誠ちゃんはいじりがあるね！」

「こっちはこれからストレスが貯まりそうだよ」

「それで、できたの？」

「なにが」

「好きな、ひ・と」

「……っ」

「その顔を見るなりまだなんだ」

「そうだよ。好きになるってこともあの時に無くしたんだから」

「そっか、急がなくてもいいんじゃない」

飲みものを飲み干して顔を向ける。

「だって誠ちゃんに好きな人ができたら、あたし困るもん」

彼女の笑顔は嘘やこれまでの冗談ではなく、本気のものだった。

第15話（浦） 沼津の紹介

「またもや千歌から連絡が昨日にきた。」

「明日7時に沼津駅に集合だと。俺は言われるがまま今沼津駅にいるのだが。」

「夏が近づいてきているとはいえまだ朝方は冷え込む。言いだしつぺの本人たちは後からぞろぞろとやってきた。」

「来るの遅いぞ」

「そうすら、二人でずっと待っていたすらよ」

「俺とマルさんの二人で来るのが遅いメンバーを待っていた。マルさんが持ってきてくれたのっぽパンを二人で食べながら文句を言う。」

「二人とも何時に来たのよ」

「二番目の善子ちゃんが来る2時間前すら」

「ヨハネよ！どんだけ早く来ているの」

「次に来たのが曜だな」

「ヨーソロ！早起きは得意なので」

「次に来たのは私と鞠莉だね」

「イエス！果南と一緒に来たのは」

「その後すぐにわたくしとルビイですわ。まったくルビイを起こすに苦労して」

「ごめんねマルちゃん。誠さんもすみません」

「これで残るのは二人だね」

「曜の言うとおり。残るのは二人。梨子と千歌、まったく困ったもんだ。」

「あれ千歌の家の車じゃない？」

「そうだよ果南姉、千歌の奴また車で送ってきてもらったな」

「ワンボックスがロータリーに止まり二人が下りてきた。」

「ごめんなさい！ほら千歌ちゃんも謝って！」

「あ、待ってよ莉子ちゃん。ありがとう志満姉」

「やっとこれで全員そろった。」

「さて、おはようみんな」

「なにがおはようだ。このバカチカ」

「そうよ、まったく千歌ちゃんも起こしてもまったく起きないんだもん」

「あはは、ごめんなさい」

「まあお昼は千歌のおごりとして」

「ゴチになるであります船長」

「果南ちゃんも曜ちゃんも冗談だよ」

「……」

「なんで黙るの！」

「まったく朝から騒々しいですわね。今日はこの沼津の紹介するために集まったのにあなたがたは」

「そうなのでですかダイヤさん」

「そうですね、この話しを読んでくださっている方々にさらに沼津を知っていたいたくためにですわ」

「この話し？おねちゃんはなにを言っているの」

「フツこのヨハネにはわかるわ。この世界は偽りの世界の物語——」

「深く触れちゃいけないからよ」

「それでダイヤまずはどこからいくのかしら」

「最初はこの駅周辺から説明しますわ」

・沼津駅

「沼津の主な交通手段と利用されていますわ」

「そうだね、駅前の記念碑はよく待ち合わせに使ったよね」

「東京にも近いから多くの人が使いますわ」

「でも沼津は新幹線が通ってないのよねー」

「まあそこが一つ問題だよ、新幹線乗るのにわざわざ隣の三島に行かないと行けないからね」

「新幹線はなくともここには御殿場線がありますわ！」

「御殿番線ね」

「そうね果南」

「なんですのその目は」

「一時間に一本」

「うっ」

「動物との遭遇率の高さ」

「あっ」

「御殿場アウトレットに行くにはいいけど」

「スリープしすぎたら隣の県」

「ですが使う人は使うのですわ!」

「ないほうがいいとはいわないけど」

「沼津にしかない路線ね」

「それに、電車を待つ時間は沼津駅で買い物などしたらいいのですわ」

「そんな沼津駅に」

「皆さんも一度は」

「カモーン!」

最後に決めポーズを決める三年生たち。

以上が三年生による沼津駅の説明でした。

・沼津駅南

「ここ仲見世商店街には色々なお店が入ってるぞら」

「特にルビィとマルちゃんがよく通うのはマルサン書店さん」

「あそこには古今東西の本が集まってまるで宝箱ぞら!」

「さらにアニメイトと少しいったところにこのヨハネが店長を勤めるゲームズもあるわ」

「墮天長ぞら」

「ファッションはもちろん食事も遊ぶところもあるんだよ」

「珈琲店では大人の味を楽しめ、スイーツでは昇天しまうほど甘いお菓子を楽しめるのよ」

「マルは特にどんぐりっていうお店のきしめんがおいしいぞら」

「それはあなたの意見でしょ」

「仲見世商店街の周りには狩野川があつてそこでは夏祭りになると花火をやるんだ」

「他にも大きな図書館があるぞら。その図書館は外から見るとフクロウの姿をしているぞら」

「このヨハネの屋敷も近くにあるのよ」

「と、とにかく皆さんも」

「仲見世商店街に着てみてはいかががずら」

「集えリトルデーモンたち」

一年生たちも決めポーズを決める。

・沼津駅北口

「沼津は北と南に別れてるんだよ」

「大体の町は北と南に別れてるもんでは」

「梨子ちゃんも少しは説明して」

「それじゃ、北は町と多くの学校があります」

「南は海と漁業が多いかな、内浦も南だね」

「人も多く内浦とは違うから面白いんだ。とくにこのB I V I」

「北口目の前にありよく紹介されるなんでも施設ね」

「映画館もゲームセンターもあって極めつけはバケツパフェがあること」

「曜ちゃんと果南ちゃんの三人で挑んだけど限界だったよね」

「次はA q o u r sの皆でとか言わないよね？」

「なるほど！その手があった!!」

「やっぱりそうなるのね。B I V Iの隣は大きなイベントなど行うことが出来る場所になっていて毎月何かしろイベントを行ってるます」

「さらに北に向かうと山があるね」

「千歌ちゃんそれだと南は海よ」

「山は行き過ぎだけど北には多くのお店と学校があるから内浦よりは都会なんだよね」

「うん。たがら私たちは学校の廃校を阻止するために」

「ついでに内浦を盛り上げるために、ね」

「この沼津の素晴しさを伝えるために」

「みんなもこの街に遊びに来てね！」

二年生たちによる紹介を終える。

これで沼津駅周辺の紹介が一通できた。

「今日はこれぐらいでいいでしょう」

どうやらダイヤさんが満足なのでこの辺で終えるようだ。

第16話 気になった彼女の正体は

私は本当に運が悪い。

運動会はいつも雨が降り、遠足に行けば台風が直撃。

卒業写真など写真を撮るときはいつもインフルエンザ、写真を撮られても私だけ後ろ姿や頭のお団子しか撮られた記憶がない。

このような事を人間たちは言う。

不幸、だと。

だから私は気がついた。

小さい頃にずら丸に『わたしはほんとうはてんしなの。いつか、はねがはえていつかてんにかえるだ!』なんて言ったことがある。

今思えば恥ずかしいことを言ってた。いくら小さい頃の出来事だからと言っても自分のことを天使とか、そうよ私は天使。

そして天から追放され墮天使になった。

だから運が悪い。

これは宿命、運命なの。

少しも後悔したこなんて、いやあの時あそこを通っていればテレビに写ることができた。

他にも一人前だったら福引きで特賞を引くことができたのに。

私って本当に不運ね。

今もほら、彼が知らない人と食事してる。

別に彼が誰と食事しようが関係ない。

なのになんで私は隠れてるのよ!

「それで、できたの?」

「なにが」

「好きな、ひ・と」

「……っ」

な、なんだって!?

「その顔を見るなりまだなんだ」

よかった。

な、なんで私がこんなにドキドキしているのよ。

「そうだよ。好きになるってこともあの時に無くしたんだから」

「そっか、急がなくてもいいんじゃない」

あの時?あの時とはどういうことなのかな。

私が知らない彼がいる。

彼女が知っている彼がいる。

「だって誠ちゃんに好きな人ができたら、あたし困るもん」

ガタツン

「え、なに?」

「さあーなんだろうね」

つっー、驚きのあまりに机に足をぶつけてしまった。

あの女なんてことを言うのよ。

好きな人ができたらあたしが困る、なによどう言うことよ。

「そう言う冗談はやめろって言ったよな」

「なによ、冗談ではないわよ」

「なにを言っているんだか」

なんなのあの2人の空間。

まるで、まるでリア充の空間!

「さて、お昼は済ませたからどうする」

「そうだねー」

「ないなら家に行くぞ」

ガタツンガタツン

「おい、さつきからなんだ」

「うーん、なんだろうね。そうだそうだ今からカラオケに行かない?」

「カラオケか、最近行ってないな」

「それじゃ決定！」

まさか二人つきりで密室のカラオケに行くなんて。
どれだけギルティーなの。

「それにしても2人でカラオケなんて中学以来か？」

「そうだね。あの時は2人で遅い時間まで騒いだよね」

「本当だよ、あの時は高校の受験前だったのに」

「まあその受験してすぐまた違う高校に通ったけどね」

「その繰り返しを何度おこなってきたか」

「それで友達も彼女もいないんだよね」

「そうだよ、悪いか」

「悪いかと言われても、あえて言うなら親御さんの仕事のせいだよね」

「けど、二年になってからは沼津で一人暮らしを許してくれたからな」

「良かったねこれで安心して二人で過ごせるね」

「本当だよな、安心して過ごせないな」

なんだろう二人の会話に私はついていくことができない。

二人の会話を、二人を見ていると心がざわつく。

心が苦しい。

もう見てられない。帰ろう。

「あれ、善子？」

「ヨハネよ！」

「うん。善子だなどうした一人で」

「しまった、いつもの反射で反応しちゃった！」

「よかったら一緒にカラオケに行かないか？」

「一緒に、いいの？」

私は視線を隣にいる女性に向ける。

「いいよ。一緒に楽しみたいから」

「そ、そうですか……」

いいの、この二人の時間に私が入っているの。

「さて、カラオケに行くか。そう言えば善子の歌を聞くの初めてかもな」

「そんなわけないでしょ。小学校の校歌とか音楽の授業で聞いたことがあるでしょ」

「そうだっけ？まあ今から聴けるから楽しみだ」

「まったくあなたって人は……」

本当に覚えてないのかしら。

何度かあなたの隣で歌を歌ったのに。今でも覚えているのに、あなたは忘れているの。

「ねえ、カラオケで何歌う？」

か、カラオケで何を歌うかですって!?

どうしようなにを歌えばいいのかしら。

「そうだなー、俺はやっぱりアニソンだな」

「あたしはいつもの歌かな」

「いつもってアイドルの歌だろ」

「だって歌っていて楽しくなるんだもん」

「善子はなにを歌う？」

「え、歌。ヨハネは墮天使だから地上の歌がわからないわ」

「つまり、今の人気の歌がわからないと」

「そ、そんなわけないでしょ！」

「心配するな大丈夫だ、俺も昔のアニソンを歌うから」

「う、うん……」

まったく私の事をわかってくれる。今も昔も変わらないのね。

「ねえねえ、ヨハネってなに？この子の名前は善子ではないの？」

「うーん、こいつは何ていうかまあ、理解してくれ」

「うん。理解できた、この子は善子ちゃんていわゆる中二病と呼ばれる痛い子だね」

「ぐはっ！」

「しつかりしろ善子！」

なんだろうこれまで言われ続けてきたけどこの人から言われると
すごく心に刺さる。

「なんだかんだ話しをしていたらカラオケに着いたな」

沼津駅南口、ビル五階のカラオケ店。やはりここはよく一人で歌い
に来る場所だ。

まさかここに来るとは思ってた。なかった。

どうしよう今日は土曜日だからバイトさんかな。

「いらしゃいませ、三名ですか？」

「はい。えーと設備は——」

彼女が話しを進める。

「手慣れているのね」

「あえて言うなら遊び慣れてるとも言うな」

「それってどうなのよ」

「まああの人だからしかたない」

「そう、なの……」

それほどあの人をすべて理解しているみたいだ。

私はあなたをそんなに理解できていないのね。

また胸に痛みが……。

「さあ二人とも部屋の準備ができたから行こう」

「ってなんで俺にすべて荷物を預ける」

「ちよつとヨハネちゃんを借りるね」

「え、私！」

なんで私が借りられるの！

それより彼女と二人きりは少し、だいぶ辛い。

チラッ

「はあー、わかったよ。早く来てくれよ」

あー、だよ。わかってくれるわけないよねー。

諦めるか、渋々彼女についていく。

「ふー、一人で歌うのも悪くはないな」

ガチャ

「やっとな来てくれた……か」

彼は部屋に入るなり驚いた顔をして固まっていた。

仕方ない。これは彼女の仕業なんだ。

「なんで、なんでそんな……」

「服装をしているか？」

「そうだよ、なんでそんな服装しているんだよ。どこから借りてきた
！」

「えー、ここのカラオケ店で借りることできたよ」

「善子もなんで一緒に仮装してんだ」

「え、そのー少し興味があって、なんの仮装かわかる？」

「善子は魔女だな、背中に羽根が生えているけど」

「墮天使をした魔女だよ」

「それって魔女なのか、初めてしつたよ」

「それじゃ私はなにかわかる？」

「なんだそのふわふわした耳は」

「えーわからないの。ふわふわでもふもふだよ」

「猫？いや化け猫か」

「犬だよ！犬！」

「そうですか、区別がわからない」

「もう、あたしは怒った歌いまくるぞーイエーイ！」

「「そうですか」」

それから彼女の独占ステージだった。

私たちが歌ったのはほんの数曲を歌った位。

それでも楽しかった。

こんな大勢で楽しく歌って、騒いだのは初めてかもしれない。

それよりも先ほど聞いた話しに私は驚いている。

『ねえ、善子ちゃん?』

『は、はい!』

『善子ちゃんは誠ちゃんのことを好きなの?』

『は、はいー!?!』

『やっぱりそうなんだ』

『あ、その…:…』

『さらにあたしは誠ちゃんの彼女』

『うっー』

『っと思っっているでしょ。ぎーねん、あたしは誠ちゃんのお姉さんなんだよね』

『え、えー!?!お姉さん!?!』

『ふふふっ、面白い。そうあたしは誠ちゃんのお姉さんなのです。名前は沢田さわだ 聖来せいらいよろしくね』

『よろしくお願ひします』

『けどこれは言っつくね。あたしは誠ちゃんのこと本当に好きだから』

『好き、それはLOVEですか』

『そうだよ誠ちゃんLOVE。誰にも負けないけど皆楽しく仲良くしようね』

彼女じゃなくお姉さん。

これまで私の苦労は何だったんだろう? 疲れた。

それでも彼が知らない女性となにか楽しそうにしていると心が痛む。

あの痛みはなにかわからないけど、すごく大切な気がする。

「あ、そうだ善子」

「なに」

「その仮装の魔女可愛いな。俺は好きだぞ」

「え、そう。ありがとうあなたもリトルデーモンになってみる」

「それは結構。今度のハロウィンに期待してくれ」

「そうするわ」

彼に褒められると今度は心が温かくなって不思議な気分。
今度のハロウインは魔女の他もいいかも。

第17話 暇な日こそ暇

日曜日、これは神が人類に与えし唯一の安らぎの時間。

そして夕方6時から始まる静岡県静岡市が舞台のアニメを見てい
つも思う。

「日曜日が終わってしまう」

それは世界の終わりを感ずる。明日からまた1週間が始まる。

「学校か……」

別に俺は学校が嫌いなわけではない。学校に行つて友達と会話し
て勉強する、これらの事は俺は好きだ。なのに月曜日になるとやる気
がだだ下がりになる。不思議だー。

「誠ちゃん、バスタオル持つてきてー!」

昨日訪れた嵐になる人が家にやってきた。

そのせいで俺はお疲れモードになつてきている。だからか月曜日
が疲れてきたのかもしれない。

「誠ちゃん、早くー」

「それぐらい自分で用意しろよ」

そう言いつソファァーから起き上がりよろよろとバスタオルを用意
する俺つてまじ優しー。

朝に届いた段ボールの山の中から探すのは面倒だな。

しかたない。

「おーい、ここに置いておくよー」

「うん。ありがとうねー」

バスタオルを置いてよろよろと出てリビングに向かう。

テレビを見ようとソファァーに座るが面白いものやってないな。ど
うしよう頭がくらくらするな。

昨日は善子と聖来姉でカラオケを楽しんだがほとんどは聖来姉の
独占ステージだった。その後は暗くなるまで遊んだ。ほとんどは聖
来姉に付き合う形で善子はへとへとに疲れていた。

そして、俺と聖来姉で善子を家まで送つていった。そこで俺は初め

て善子の家を知った。

あいつの家花火が見える場所にあるんだな。今度の花火大会でお邪魔させてもらおうかな。

「ふっー、気持ち良かったー、タオルありがとね。でもこれって誠ちゃんのだよね?」

風呂から出た聖来姉はキッチンから冷たい麦茶をコップに注ぎました。

「だってあの山の中から探すの面倒だったから」

「まあ、あたしはいいけどね」

「俺はその格好に問題を感じるけど」

「え、なに?」

聖来姉は首を傾げる。どこがおかしいですかと聞いてくるように。いや、おかしいから。その格好。

なんで、バスタオル一枚を羽織ったまま出てくるのかな。パンツは履いているようだけど。

「風邪ひくぞ。パジャマを着てくれ」

「やだなー、この格好は誠ちゃんの前だけだよ」

それはよけい困る。弟の前でも恥じらいをもってほしいと思うが俺もよくそのような格好をしていたから文句は言えない。

「暑ければ冷房を入れるけど」

「そこまでは大丈夫。さてパジャマ着て少しはこのダンボールの山を片付けますか」

「ベットはもう昨日のうちに準備できてるから」

「ありがとうね。さて少し手伝ってくれる?」

「そうしたいけど、なんか体がだるいんだ」

「もしかして風邪でも引いた?」

「そうなのかな」

「人に言っておいて自分が風邪引くなんてさすが誠ちゃん」

聖来姉がコップに水を入れて薬と一緒に持ってきてくれた。

受け取り飲み干す。薬の苦味を水で喉の奥に流し込む。

ああ、こんなに話しているのに体がだるく動こうとしない。頭も少

しぼーとして考えるの辛い。

目を閉じたらこのまま開けることなく終わりそうで怖い。意識という糸がプツンと切れる音がどこかでした。まぶたがゆっくり下りて目に映る景色は暗闇に変わった。

子どもたちのあいさつを交わす元気な声が外から聞こえる。鳥が朝の訪れを告げる。ゆっくり目を開ける。

まわり景色がリビングから俺の部屋へと変わっていた。

何がおきたか理解できずに体を動かそうとするとするが重い。自分の体が自分ののではないようだ。

何がおきたか考えていると部屋の扉が開いた。

「あ、起きた?」

「聖来姉……」

「大変だったんだよ。昨日いきなりソファで倒れて部屋まで運ぶの」

「ごめん。ありがとう……」

「熱計って今日は学校休みの連絡入れたから」

「ありがとう……」

「うんうん。わかればよろしい」

体温計を渡され俺はスイッチを入れて計る。

「なんか小さい頃を思い出すね」

頭を手をおかれ、やさしく撫でられる。

そのぬくもりが気持ちよく温かい。

また眠気に襲われる。

「ああ、また寝てしまったのか」

次に目を覚ますと時間はお昼になっていた。

体は前より軽く感じる。熱を計ってみると熱も少し下がっていた。先ほどよりは頭がすきつりしているがまだボーとしている。携帯に手を伸ばして見るとチカチカと点滅していた。

「うわっ……」

着信がたくさんきていた。全部A q o u r s からだった。

電話が五件、無料アプリの通知が十件もきていた。

『まー君が風邪引いたって聞いたけど大丈夫？今日お見舞いに行くね』千歌から。

『ヨーソロ！って気分じゃないよね。今日アイス持って行くね』曜から。

『体調が悪いと聞いて千歌ちゃんと曜ちゃんが見舞いに行くっていうから私も心配だからついていくね』梨子から。

『誠が風邪引くなんて珍しいね。今日はゆっくりやすんでね』果南姉から。

『ハーン誠元気にしている？元気がないならマリーが会いに行つてあげよう』鞠莉さんから。

『風邪引くのは心が弱っている証拠。仕方ないのでわたくしが看病にしてあげますわ』ダイヤさんから。

『風邪を引いたと聞きました。ルビイも風邪を引いて一人でいるのは寂しいのを覚えてます。今日の放課後見舞いに行つてもいいですか？』ルビイさんから。

『体調が悪いときは食事を取って元気になるのが一番。今日の放課後食べ物たくさん持つていきます』マルさんから。

『体調を崩すなんてリトルデーモンなのに情けない。いい今日は見舞いに行くからそれまでに元気になってなさい。あと風邪を引いたのは私のせいかもしれないから』善子から。

「皆……個人でそれぞれ送ってくるなよ」

皆個人に送ってきて確認して返事してを繰り返すのは面倒くさい。グループで送ってくれば楽なのに。

けど、こうやって連絡をくれるのは嬉しい。寂しい心が温かくなってくる。

「あ、恵からだ」

最後の一人、恵から来ていた。

『大丈夫？風邪引いたって聞いたよ。バカのくせに風邪引くなんてね、神様も驚きだよ』

「なんだよ喧嘩うっているのか」

『はやく直して学校に来なさいよね。誠がないとつまらないんだから』

「恵……まったく」

俺も恵も二年つて言う中途半端な時期に転校してきた。

俺は転校を何度もしてきたから慣れてしまった。また新しい生活を送る、そう考えてきたからだ。

だが恵は違った。初めての転校でこれまで育ってきた町から離れまったく知らない町での生活が始まったのだ。あいつは不安と寂しいの重みでつぶされそうだった。

俺と転校の時期が重なり、お互いの席は隣、移動なども一緒に行うことが多くなった。始めは人見知りなのかクラスメイトと会話もしていなかった。俺も人見知りするほうだから気持ちはわかる。だからなのかお互いがお互いを気にしてながら話しかけるタイミングを探していた。

俺が友達ができずに本を読んでいると、クラスメイトの会話が耳に入ってきた。

「電王つて四フォームに変身するよね」

「ソードとロット、アックス、ガンフォームになるよね」

「あれ、もう一つ変身あったよね。白いフォームが」

「たしか鳥だよね。名前なんだっけ？」

「フアング？それはガンダムだ。えーと」

「テディ？それは違うイマジンだ」

俺はイライラしてきた。

なにも知らない、なのに盛り上がるのがイラつかせる。それよりもその会話に入っていない俺にイラついた。

なんで俺はこうも一人で本を読んでクラスメイトの会話にイラつ

いているんだ。

「ジークだよ!!」

俺ともう一人の声が重なりクラスメイトの会話を止めた。

もう一人の声こそ、金岡恵だった。

それから俺と恵は話すようになってきた。

俺と恵は趣味が合った。アニメも特撮も話しがよく合った。

まさか女子で俺と話しが合うとは思わなかった。けどそんなの関係なかった、それから恵はクラスメイトたちと話すようになり俺も話すようになっていた。

本当に一週間で関係が変わった。

ここ最近もすぐく変わった。

「お腹減った」

今はお昼のおおとを忘れていた。

聖来姉はいないのか家が静かだ。ごはんを作るか。

キッチンに来てみたが食材がない事に忘れてた。

今ある物でできるものはやっぱりインスタートラーメン。

さて唐突に始まった誠の三分クッキング。

「まず最初は鍋に水を入れて沸騰させます。まあ、その時点で三分切るんだけどね。」

沸騰したら麺をいれます。今回はみそラーメンです。卵一個をといておくこと、ここがポイント。そして器にごはん一杯分入れときます。

残り三十秒になったら卵を入れて完成！」

この料理は名前をつけるならラーメンライスと名付けよう。

お腹はいっぱいになったらやることがない。

今なら学校でクラスメイトとお昼を食べながらたわいもない会話をしているのだろうか。

本当に転校初日にはありえない日常になってきた。

千歌たちが来るまで暇だから部屋に戻って漫画でも読んで待つているか。

くく2時間後くく

「ああ、暇だー、漫画も小説も読んでしまった。どうするかもう一度寝るか」

けどもう眠くと言うか寝すぎて眠くない。

どうするか、とにかくベッドの上で横になってゴロゴロしていよう。

くく2時間後くく

「失礼しまーすって寝ている」

ああ、何か聞こえる。

「まったくどうなのよ心配してきたのに」

どこかで聞いた声だ。懐かしい。

「熱は下がったの?」

額がひやつと感じたのに温かく気持ちい。

「……うーん、明日香」

「明日香? 誰よ」

「うっ、恵……なんで」

気が付くと目の前に恵がいた。

「目覚ましたの、ぐっすり寝ていたから起こそうか悩んだ」

「来てくれたのありがとう」

「なにか食べる? ゼリー持って来たの」

「ありがとう、いただくよ」

「心配してきたけど元気ね」

「寝ていたら元気になったよ」

「それなら明日は学校に来れるのね」

「お前が来てくれたからかもな」

「……なにを言っているのやら」

「まー君! 心配してきたよー!」

「千歌ちゃんちよつと」 「病人がいるのにまったく」

「相変わらず元気いいね千歌ちゃん」「風邪ひかないのは千歌さんのよ
うな人すら」「元気いいのはもう一人いるけどね」

「誠！見舞いにきたわよー」「鞠莉さん静かにしなさい」「ダイヤモンドもねう
るさいよ」

大勢の声が聞こえる。

相変わらず騒がしいって言うのか善子が言ったとおり元気って言
うのか。

けど本当に退屈しない。

「ありがとうな、皆」

第18話 春と夏の間で

春の暖かい風はいつの間にか夏の暑さと変わっていた。

夏が暑いのは当たり前だが暑すぎるのも困りもんである。学校の制服も春服から夏服に変わり日差しが照り付ける。夕方になると日差しは弱まるが暑さには変わらない、こんな日は家でおとなしく涼しみたいもんだ。

だが、今日は用事があるため学校終わりの放課後は仲見世へと足を向けるのであった。

「あつーいー!」

いつものごとく一緒に来た恵は隣で大声をだし訴える。

俺に訴えてもどうにも出来ないのですよ。

「ねえ、あそこで休もう」

恵が指差したのは沼津駅南口にある緑の屋根のハンバーガー店。

確かにあそこなら涼しいし、美味しい食べ物もある。

「しかし、だめだ」

「えーなんでー」

「まだ本を買っていないからだ!」

「それは後にして涼しもうよー」

「俺はあの本をどれだけ楽しみにしていたか」

「そんなになの?」

「当たり前だろ、ネットで見つけたときの興奮はすごかった」

「そうなんだ、少し興味あるかも」

「だから俺は本を手に入れるために目的地に向かい歩き続ける」

仲見世商店街へと歩く。

「それにそんなに行きたいなら、お前だけ先に行っていればいいだろ」

「う、それだと……」

「とにかく俺は本屋で本を買ってからではないと行けないな」

「えーつまらない」

「買ったらすぐに行くから、俺の席も取って置いてくれ」

「うー、そういうことなら」

「買ったらすぐに行くから」

「約束だからね！本をすぐに買って来てね！」

「はいはい」

恵とは商店街前の横断歩道で別れた。

仲見世商店街は小さい頃はよく映画の後のお昼を食べに来た。

あの時の思い出は懐かしく、ところどころしか覚えてない。これも記憶喪失の影響らしい。

なぜ記憶喪失になったのか、どこまで覚えていてどこまで忘れているのかはわからず今を生きている。

このことを知っているのは曜と聖来姉だけ。いつかは千歌にも果南姉にも、A q o u r s の皆にも、もちろん恵にも話さなければならぬ。

「暗くなってもしかたない」

忘れたなら今を楽しめばいい。曜も言った『楽しい思い出をつくらう』つと。だから俺は今を楽しんで生きている。そして今から買いに行く本も楽しみの一つ。

気が付けばマルサン書店の目の前に来ていた。

扉を開け店内に入る、そこにはたくさんの本があり、読書好きの人にはたまらない世界になっている。

本好きと言ったらマルさんもそうだな。この前も偶然あつたときもここにきて目を輝かせていたからね、そのあとのたくさんの買い物には驚いたけど。

まったくこの世界は何度来ても飽きることはない。店員の一押しの本、今月のおすすめなど楽しめる。その中で俺が一番好きな場所は一階の奥にあるミステリーの本が並べられた棚。

あそこで俺は運命の出会いをした。世界で有名な探偵シャーロック・ホームズとの出会いだった。

それからミステリーにはまっていた。

そして今日もミステリーの本を買いにきたのである。

「あつた！探したよ」

目的の本を買って早速レジに向かう。

わくわくして会計を済ませる。

歩く足は浮いていた。

そして横断道路で信号待ちであることを思い出す。

「あ、恵」

青信号に変わったが方向を変え地下道に向かう。ここから目的地に向かうには地下道を通ったほうが近い。

恵はちゃんと席取ってくれているかな。この時間は学生の下校時間だから駅前の飲食店は学生のたまり場になっている。

他にも北口のB I V Iのゲームセンターもたまり場になっている。そのせいかある学校では教師が見回りに来る学校もあるみたいだ。

地下道であるものを目にとめた。

夏祭りのポスターである。これまで多くの県に夏祭りを見てきたが、そのほとんどを覚えてない。覚えていても人が多かつたことだけで夏祭りを楽しんだ記憶がない。

今回は沼津で夏祭りを楽しみたい。

ハンバーガーと飲み物、ポテトを買って二階で恵を探す。

だが、人はほとんどいなく、重たい空気が漂っていた。見てみると一人の女子生徒が複数の男子に絡まれていた。

なるほどだから人が少ないのか。

困った女子を見捨てることは俺は学んでない、つまり助ける。近づくとその女子は特徴の栗色の髪をしていた。

「恵」

「あ、誠」

振り向いた女子は目に少しの涙を浮かべていた。

「なんだ連れがいたのか」

「それにしてもよわよわしい奴だな」

よわよわしい言うな。結構気にしているんだぞ！

「俺の彼女になにか用でも？」

「彼女って……」

「ここは彼女ってことで場を流すしかない。ごめん恵少し我慢をしてくれ。」

「チツ行くぞ」

なにもなく団体は帰っていた。

場で安堵のため息が聞こえた。

「悪かったな、遅くなつて」

「怖かったけど誠が来てくれるって知っていたから」

「これからはなにかあったら俺に言ってくれ、頼りないとおもうが力になるから」

「うん。ありがとう」

少し恵の気持を落ち着かせることにした。よつぽど怖かったのだろう。次にあったら容赦はしない。

「さあ、食べよう」

冷めたハンバーガーを一口、そこからわかる美味しい味。久々に食べたからかものすごく美味しく感じる。

「そうだ、もうそろそろ夏休みだよね」

「そうだな、夏休みもすぐそこだな」

春の温かさも忘れもうすぐ夏のカーニバル、学生の特権夏休みもすぐそこに迫ってきていた。

夏休みは毎日遅くまで寝ていられるからいいものだ。いや夏休みは毎日千歌に呼ばれて練習に付き合わされるんだろうな。

だんだん暑くなる日差しに練習、体調管理をしっかりとしなければ。

「誠は夏休みは用事ある？」

「ないと言いたいが千歌たちの体調管理と練習の手伝いがあると思う」

「そっか……」

「だからそれ以外の日は一緒に遊ぼうぜ」

「うん！」

練習がない日は一緒に遊んで気分を変えたいからな。

それに夏にはビックイイベントがあるからな。

「それじゃ今から約束をしたほうがいいね」

「そうだな、先に会える日を決めたら楽かもな」

「それじゃ一日付き合って」

「一日でいいのか」

「うん。海の家の手伝いをお願い」

BS あなたの愛の約束

12 / 25

「本当にいいのお姉ちゃん」

いつもは早く寝るはずなのに今夜、小さな体から考えられない声を出す妹のルビィ。

いつもおどおどしているのに今日は違った。わたくしの目を真っ直ぐ見て訴えてくる。

「本当にそれがお姉ちゃんがしたいことなの」

今日の天気は雨だった。

いつもはやな一日の始まりだが今日はあの人と待ち合わせ。

「お待たせしましたわ」

雨が降る道の向こうから走ってくる彼女の姿。

「いえ、大丈夫です。それより走って来ましたが濡れませんでしたか？」

「さすが、ここですかさずハンカチを渡してくるのは」

「えーとありませんでした」

「いいえ、ありがたく使わせてもらいます」

体を拭き終わり、ハンカチを自分のかばんにしまおうとするのを止めめた。

「え、だって使って濡れてしまったのでわたくしが洗濯してアイロンにかけないと」

「いやいや、そこまでしなくってもいいですよ」

「そうなのですか？」

「いいですよ、どうせハンカチは濡れる物ですし」

「それでも借りた物はちゃんと返さないと、わたくしの気持ちが治まらないのでわ」

「そんなこと言われても……それじゃ、今からのデートを楽しみましょうよ。それで借りは無しで」

「それでいいのですか？」

「いいんです。さ、雨の日デートですよ」

今日は雨だが隣にダイヤさんがいる。

それだけで俺は幸せだ。雨の日も悪くないと思ってしまっ、俺って
いがいに単純な人間なのでは？

ダイヤさんの提案で今日は御用邸記念公園にやってきた。

「ここにはよくくるのですか？」

「ええ、一人で悩み事など考えごとがあるときはよく来ます。ここに
来る綺麗な景色と大きな海がわたくしのちっぽけな悩みなんてどう
にもなるような気がしてすつきりすのですわ」

「そうですね。俺もここに来ては癒されによく来ます」

「そうですね、ですが今はわたくしが隣にいるのですからわたくしに
癒されてほしいですわね」

「ダイヤさんは癒しではなく美しいですから」

「な、なにをいっているのですか！」

顔を赤くしてそっぽを向いた。

ダイヤさんのときどきする拗ねるのも可愛いが最も可愛いのは唐
突に言われて焦る姿だ。

その姿にいたずら心をくすぐる。まったく可愛いなこの人は。

付き合ってから1日1回はダイヤさんを弄らなければ気がすま
ない。

ダイヤさんと付き合うことができるとは思わなかった。

俺とは住む世界が違う、格式が違いすぎる。

そう思っていたからだ。

だが違った。格式など関係なく接して結局は住む世界は同じだと
考え直された。

だから果南姉とも鞠莉さんとも仲良くやってこれたのだろう。

なによりもダイヤさん自身が、

「抹茶プリンですって！それも期間限定！」

子どものようにはしゃぎ、興奮する。

これがあの黒澤家長女で浦の星女学院生徒会長の黒澤ダイヤとは驚きである。

「なにをしているのですか！はやく行きましょう！」

「わかったから、ちよつと！」

手を引かれて店内に入っていく。

食べている姿は本当に可愛く、愛らしい。

この二人の時間が永遠に続けばいいのに、俺は願った。

だが、この世に永遠はなく別れはやってくる。

その別れは二週間後唐突にきた。

「い、今なんと……」

「ですから終わらせましょう」

「なぜです、か。そんないきなり」

「わたくしは新しく好きな人ができました」

「え……」

「それに、わたくしにあなたは釣り合わないのですわ」

「……」

「ですので、これ以上のお付き合いは無理ですわ、さようなら」

「……」

目の前が暗くなるとはこの事を言うのだろうか。

俺はダイヤさんが目の前にいなくなってもその場に立ち続けていた。

気がつけば家にいて、朝になっていた。

ソファーに座りながら時計を見る。

「学校に、行かないと」

『わたくしにあなたは釣り合わないのですわ』

「うっ、なんで……」

俺はソファアールで丸くなり涙を流した。

それから幾日か過ぎた。

家から出なくなり、学校も休むようになった。心配してか家に来てくれる千歌や恵達とは会わず引きこもるようになった。

もうなにもやる気がでない。住む世界、格式など関係ないと思っただけなのに。

結局は釣り合わない存在だったんだ。

俺は、俺は……。

スマホから音楽がなる。

でる気力などなく鳴りやむまだ待った。

しかし、鳴りやむ気配はなく最後には留守電になった。

『ルビィです。誠さんと最近会わないので皆元気がありません。その原因はお姉ちゃんのことと関係あるのではないのでしょうか。お姉ちゃんのことについて話したいことがあるので明日の午後4時に沼津駅に来てください』

ルビィさんからの留守電は終わり、俺はベットに向かった。

次の日俺は沼津駅に来た。別にルビィさんに言われてたのではなく外にでないと行けないと思ったからだと自分に言い聞かせていた。

ルビィさんはすぐに会うことができた。

その後近くの公園に移動した。その間は無言が続いた。

「お姉ちゃんと別れたのですね」

「そうだよ。釣り合わないだって」

「違います。誠さんはそんな存在では」

「でも実際に本人から言われて」

「お姉ちゃん、結婚するんです」

「その事を言うために来たの？さらに俺を追い込むんだ」

「違います。お姉ちゃんは結婚したくありません」

「でも結婚するんだろ」

「はい。そうです」

「ならそれはダイヤさんの意思であってやっぱり」

「今から話すことを静かに聞いてください。その結婚は本当はルビイがするはずでした、しかしルビイよりお姉ちゃんを相手の方が好まれました。そのことにより仕方なくお姉ちゃんは……」

「ダイヤさんが、だから俺と別れたと」

「はい。だからお姉ちゃんはまだ誠さんのことを」

「少し考えさせてくれ。混乱してきた」

「わかりました。これを渡しときます、結婚式の案内ですここに会場も時間も書いてあります」

ルビイさんは手紙を預け帰っていった。

一人星を見て頭を整理していた。

「二人は苦しいときも、辛いときもお互いで助け合うことを誓いますか」

「違います」

「……違います」

「それでは、誓いの口づけ——」

「させるか——」

扉を開け、会場がざわつく。

神父の話しを打ち切り現れたんだ、当たり前だ。

「誠さん!」「まー君!」

ルビイさんと千歌が驚く。それはそうだろう立派な服装に包まれ、大切な瞬間を壊す私服姿の男がいるのだから。

「なんだね君は!」

新郎の父親だろうか、物凄く怒っている。

それに対してダイヤさんの家族は来るのが遅いとも言いたそうな顔をしている。

そんなに俺の好感度は黒澤家では高いのですか？

「君は誰なんだね。この場をなんだとおもっているのかな」

新郎が物凄く正論を言ってくるがどうでもいい。

俺はダイヤさんだけを見る。

白色ウエディングドレスに一瞬言葉を失った。

「ダイヤさん、俺はあなたのことが好きです。それは誰よりも好きです。誰にも負けません、だからと言ってあなたを幸せにすることを誓うことはできません。苦労も、辛い思いもさせるかもしれない、だけど俺はあなたのことが好きだから！」

「なにを言ってる、ダイヤさんが苦労も、辛い思いもさせる男と付き合いわけないだろ。さあ、この指輪のように綺麗なダイヤさんは僕の花嫁だ」

「バカか、ダイヤさんは綺麗ではないんだよ」

「な、なにを言ってるだね！」

「誠さん！」

まわりから言ってる意味がさつきと違うだろと言われるがそれだけでいい。

なぜなら、

「ダイヤさんは綺麗ではなく、美しいからだ！」

「……！」

ダイヤさんがこっちを向く。

俺は小さな箱取り出す。

「なんだね、中身は空だぞ」

「この世にダイヤさんに釣り合うダイヤが俺に買えるわけないだろ」

「バカかね、君は」

「この世のどのダイヤよりもダイヤさんは美しい！そんな硬度10の石などダイヤさんの美しいには敵わないんだよ！」

「ええい！さつきから聞いていればあなたは何しにきたのですか！わたくしを辱しめるために来たのですか！」

ダイヤさんがやつと俺と話しをしてくれた。

「そうです！」

「なに元気よく言っているのですか！」

「ダイヤさんが恥ずかしがる姿が好きだから」

「え……」

「抹茶とプリンが好きなども好きだから」

「ちよ、ちよつと……」

「自分にも相手にも厳しいがときどきドジする姿も好きだから」

「……」

「俺にだけに見せてくれる可愛い姿も好きだから」

「……」

「人のために自分を犠牲にするところは嫌いだ、一人で背負うのは辛い、だから俺も一緒に背負っていく」

「……」

「俺はもう一度言う、誰よりもあなたを幸せにすることはできないかもしれないが俺はあなたのことが好きだから俺と付き合っしてほしい！」

俺は右手を差し出す。

「……まったく、しかたないですわね」

俺の震える右手をそつと包み込んでくれる温かさを感じる。

「そう言うことですので、わたくし黒澤ダイヤはこの結婚を破棄します」

「そんな、ダイヤさん」

「この安いダイヤの指輪お返しします。わたくしはそんな硬度10の石より美しいようですから」

指輪をその場に放り投げる。その姿がとても似合っていた。

会場からの拍手がおこる。

神父をみると笑いながら言葉を続けた。

「二人は、苦しいときも、辛いときもお互いで助け合うことを誓いますか」

「誓います」

「誓いますわ」

「それでは誓いの、口づけを」

「ダイヤさん、綺麗です」

「わたくしは綺麗ではなく美しいですわよ」

その時初めて俺の唇に誰かの唇が重なった。

1 / 1

その人は誰よもバカな人でした。

後先考えずに行動して周りを驚かせる。

けど、そのバカはわたくしを幸せにしてくれた。

これも雨の日デートで願ったことが叶ったからかもしれないわ。

これからもわたくしは幸せに暮らしていく。

いつまでもあなたの隣にいる時間が永遠に続くから。

1年間ありがとう（まだまだ続くよ）

「ねえねえ、今日はなんの集まりなの？」

「なにを言っているの千歌ちゃん」

「そうだよ集まってるの千歌ちゃんでしょ」

「曜ちゃん梨子ちゃんそうだけど、まー君に言われて集めたから」

「なるほど、この集まりは誠さんしか知らないよ」

「はい、ダイヤさん」

「だからってこんな場所に集まるなんてね」

「朝早くから疲れるねー」

「そう言ってる果南さんも鞠莉さんも来るのが一番最後だったけどね」

「善子ちゃんも最後から二番目だったから」

「ははっ、花丸ちゃんは朝一番だったね」

「それでまー君は？」

「俺はここだよ」

「遅かったね誠」

「ごめん果南姉、席を予約するのにちょっと手間取って」

「席？なんの？」

「鞠莉さんいい質問。もちろん——」

「お疲れ様！それでは……」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「今日は1年間ご苦労様&アニメお疲れ様会」

「予約ってカラオケのことだったんだ」

「広い部屋だったからね」

「あの一、まー君？1年間ご苦労様はなんとかわかるけど、アニメってなに？」

「いやいや1年間もわからないよ。梨子ちゃんわかる？」

「え、それはあれよ、あれ」

「つまりわからないよ」

「うん。ごめん」

「まったく二人ともわからないの？」

「善子ちゃんはわかるの？」

「ヨハネよ！この小説が始まって祝1年間なのよ」

「小説って……なに？」

「小説は小説よ」

「……わからないな」

「それにアニメってなんですよ」

「えー、ダイヤはアニメを知らないのー」

「アニメぐらい知ってますわ！あれですわ、キテレツ大百科よ」

「よくダイヤ見てたもんねあれ」

「沼津ってあれ好きだよね」

「見飽きるほどやっていたからね」

「あ、ここポテトあるすら」

「ポテト！食べよ花丸ちゃん」

「うん。注文するすら！」

「さつそくルビイさんとマルさんは注文してるね」

「それで今日にするの？」

「それがまったく考えてないんだよね」

「本当に今日の集まりはなんなの」

「うーん、まあせっかくカラオケにいるんだから歌う千歌ちゃん」

「う、うんそうだね曜ちゃん！梨子ちゃんも歌おう！」

「え、そうだね曜ちゃん」

「うん梨子ちゃん」

「あれ、千歌は？」

「そうずらな、善子ちゃん歌おう」

「ずらマル、仕方ないわね」

「聖歌にしようかな」

「そこは違うものにしなさいよ！」

「それじゃ果南歌おう！」

「鞠莉と歌うと疲れるんだよね」

「いいじゃないうたいましょ！」

「首振る曲はやだな」

「それじゃお姉ちゃんはルビィと歌おう」

「え、そうね。歌いましょうか」

「うん。もちろんμsの曲を」

「千歌さんもどうですか？」

「ダイヤさん」

「μs好き同士歌いましょう」

「はい！」

「それじゃ俺は一人で歌おう」

こうして俺たちはカラオケで何も祝うことなく歌って今日を終えた。

これからも俺たちの物語は続いていく、これからも楽しくから応援よろしくお願い！

BS 南からのそよ風

2 / 10

いつも一人で見る星空は自分が星の海を潜っている感覚だった。今隣であなたと見る星空はまるで星座になった感覚で神秘的。

誰でもいいわけではなくあなただからこそ感じるこゝろがてきる。

昔も今も、これからも知らないあなたと知っているあなたを見るこゝろができる。

誰も知らない特別席ですつと隣で見えていきたい。姉として彼女として。

小学生のとき習字の授業があった。その授業で先生はいつも終わる数分前に星座の話しをしてくれた。

理科の授業で天体の時間で習う星座よりも習字で先生の話す星座の昔話のほうが面白く、分かりやすかった。

その時だけ真面目に授業を受けていたことを覚えている。

なぜ、いきなりこんな事を思い出したか聞かれたらと言うとダイヤさんの一言からである。

部室に入るとなぜか A q o u r s 皆の卒業アルバムを持ってくることになり小学生の時代で盛り上がった。

話を聞いてみるとダイヤさんが持つてくるように言ったそだ。

『卒業アルバムを製作することになり参考に皆さんの小学校、中学校の卒業アルバムを持ってきてもらったのです』つとなぜか胸をはっていた。

しかし卒業アルバムを取り出してはあるときはあれが流行り、あのテレビがやっていたと話しが盛り上がり参考にはなっていない。

俺は善子が持つてきた卒業アルバムの一枚の写真を見つけた。

習字を教えてくれた先生。歳は54歳で生徒からはおじい

ちゃんと愛称で呼ばれていた。いつもにこにこ笑っていたことを覚えてる。

「そう言えばまーくんの写真ってあるの?」

「面白そうね、探しましょう」

千歌の一言で皆が1つの卒業アルバムに顔を近づける。

「ないね、誠くんの写真」

「曜ちゃん諦めるの早いよ」

「あ、これは誠さん?」

「ルビイちゃんこれはただのそっくりさんずら」

「見当たりませんわ」

「闇に飲まれたのよ!」

「善子うるさい、シヤラップ」

「本当だね、果南ちゃん見つけた?」

「これでしょ?」

「「「「「え!?!」」」」」

果南姉は1つの写真を指差した。

それから他の俺が写ってる写真を見つける。

「すごい、すごいよ果南ちゃん!」

「大げさだよ千歌」

「大げさじゃあないよすごいよ」

「曜ちゃんまで、星を探すのと一緒だよ」

「「星?」」

「そう、星座が好きだから探すの慣れてそのおかげだよ」

「へー、そうなんだ」

「星座が好きなんだ」

始めて知った果南姉の好きなもの。

それがなんだかうれしい。

「それにしても」

「そうだね」

「写真どれも小さく写ってるね」

「本当に果南ちゃんよく見つけられたね」

「後頭部しか写ってないものまである」

「写真写り悪いね」

「おいおい千歌と曜そんなこと言うなよ。」

「ふっ、俺を写真に撮るとその者は呪われるのだ」

「え、それじゃこの前皆で撮った写真は、ルビィ呪われるの!」

「ルビィちゃん真に受けすぎ、こんなの善子ちゃんの真似すら」

「善子言うな!」

「笑いが起きる。」

「ふふっ、どうしたの果南?」

「うん、なんでもないよ」

「どうしたのですか?」

「ダイヤまで、さあ練習しよ」

「今日の練習の練習も疲れたね」

「梨子ちゃんはそうでもなさそうだね」

「え、そうでもないよ曜ちゃんのほうがまだ体力残ってそうだよ」

「そんなー、私も今日は疲れたよー」

「曜ちゃんが疲れてるのなら千歌はもうヘトヘトだよ」

「もう寄りかからないでよ千歌ちゃん」

「二人とも元気まだあるのね」

「「そんなことないよー」」

「2年生は本当に仲いいね」

「あら、マリーたち3年生も仲いいよ。ね、ダイヤ」

「そうですわね」

「あら、今日は素直なのね」

「なんですのその言い方ではわたくしがいつも素直ではないようないかたわ!」

「ワーオ、ダイヤが怒った!」

「あ、こら待ちなさい鞠莉さん!」

「あーあ、二人とも」

「3年生も本当に仲いいね」

「誠、今日の練習の手伝いお疲れ様」

「果南姉こそお疲れ様、果南姉は疲れてなさそうだね」

「いやいや、疲れてるよ。このかばんを誠に持たせたいぐらい」

「それは姉特権ですか？」

「それはいいかもね。お姉さん特権」

「なになにそれ誠がかばん持つてくれるの？」

「いけ、ません。はあはあ、そ、そんなの」

「大丈夫ダイヤ？」

「これ、くら：い」

「果南姉、かばん持つからダイヤさんを持つてあげて」

「ごめんね。ほらダイヤ手かして」

「あ、ありがとう、ごぎいます、果南さん」

「いいから、大きく息すつて深呼吸」

「すーはー、すーはー」

「たいへんだね誠」

「この原因を起こしたのは鞠莉さんですけどね」

「そのお詫びとして今日の夜、淡島に来てくれる？」

「また、なんですか唐突」

「いいからいいから」

「おーねーえーちやーん！」

「る、ルビイうるさい」

「あわわわわ」

「うーんこれは、ごめんね鞠莉、先に帰って」

「OK！」

ダイヤさんを担いで果南姉はあわあわしているルビイさんと一緒にバスに乗って家まで送っていった。

「うん？あれ果南姉のかばん！」

「ありやりや、よし早いけど淡島に行こう」

「今から！」

「ゴーゴー！」

鞠莉さんに連れられ俺は淡島に。

二人船に揺られ鞠莉さんのホテルに案内される。

「ここで少し待っていてね」

「あ、はい」

部屋で一人固まって待つ。

「お待たせ、はい飲み物」

「ありがとうございます」

「ふー、今夜は月が綺麗に見えるみたいよ」

「そうなんですか」

「よく果南とダイヤ三人で星を見に行つたな」

「仲いいですね」

「その仲を取り持つてくれるも果南のおかげ。ダイヤと喧嘩しても果南が仲直りしてくれる」

「俺も千歌と喧嘩したときは果南姉が仲直りしてくれました」

「果南と喧嘩したときは大事な友達を失いかけた。けど今はすごく楽しく過ごしている」

「それも果南姉のおかげ？」

「それはどちらも仲直りしたかったかな。けど果南たつら頑固だから」

「それはそうかも」

「それに人の部屋に濡れて入ってくるし」

「人の冷蔵庫を勝手に開ける」

「そうそう、人より人の部屋でだらける」

「うんうん。人が食べてるものを欲しがる」

「まったくなんなのあの子は！」

「それが年上のやることなのかって！」

「だけどあの笑顔はすごい！」

「まうなんでも許してしまう可愛さ！」

「わかる誠！」

「わかりますとも鞠莉さん！」

「なら、果南の気持ちもわかる？」

「気持ちですか？」

「あの子自分に鈍感だから」

「はー、鈍感」

「ここにもう一人鈍感がいるけどね」

「うん？」

「もし果南が知らない男と歩いているとすると誠はどう思う？」

「え、それは仲がいい男子友達がいるんだなって」

「本当にそう思う？」

「うん、だって果南姉はだれでも仲良くなれるから」

「あの天然たらしが……それじゃ、その男が果南の好きな人だったら」

「好きな人……」

「それも結婚の約束をしている」

「結婚……」

「どうする？」

「その男子が果南姉と結婚をする仲がいいとしても、果南姉が決めたらなら」

「本当に？」

「けど、果南姉を幸せに出来ないならその男子を俺は許さない！」

「誠は果南のことが好きなんだね」

「俺は果南姉が好き。今はつきりわかった」

「まったく世話が焼ける二人だね、果南」

鞠莉さんが扉に向かって言うと言いつと果南姉が入ってきた。

「果南姉！」

「誠……」

あ、さっきの話もしかして聞かれていた!?

どうしよう急に恥ずかしくなってきた。

「果南姉、さっきの話し」

「うん。聞いていた……」

うおー恥ずかしい！顔が熱い！

「……誠もなんだね」

「うん、誠も？」

「……これから少しいい」

「う、うん」

果南姉は先に外に出ていった。

俺は鞠莉さんを見る。

「ほら、行ってあげなさい。果南が待つてるわよ」

「うん。ありがとう」

俺は果南姉を追いかけた。

「まったく世話が焼けるんだから」

果南姉の後をついていき外に出る。

「果南姉……」

「わたしねずっと心のどこかで思っていたの」

吐く息は白くなる。

「その思いがだんだん確信に変わってきた」

前を歩く果南姉の顔を見ることができない。

「けど、その事を伝えることが怖かった。これまで姉として誠たちし

たわれてるのにこの思いを伝えることが怖かった」

怖かったつか、俺もたぶんそのことに気づいていながら俺も怖かったんだ。

「だから今日言われて嬉しかった。やっとわたしも言える」

前を歩く果南姉が立ち止まり振り向く。

「誠、わたしもあなたのことが好き」

その笑顔は今日の満点の星空のように輝いていた。

BS 今日つていう日にハナマルをください

3 / 4

本はいつも物語の世界に連れていってくれる
本の世界なら冒険をして謎を解いて楽しんで
そして、物語のヒロインになって王子に出会い恋に落ちる
ヒロインの恋はいろいろある。とくに恋にはライバルが現れる
現実であなたの隣にいるヒロインは誰ですか
それは私ですか、それとも他のヒロインですか

冬の寒さも春の温かさになってきている3月の朝。

その中俺は駅前でホットのお茶を両手でもて遊んでいた。

日曜日の9時に人と待ち合わせをしていた。俺が珍しく日曜日に外に出てる、なんて珍しいんだ。

今日は日曜日だから駅は人の出入りが多い。みんな電車に乗ってどこに行くんだろう。

カップルは手を繋ぎ、会社員は休みなのに仕事しにいくのか改札にすいすい飲まれてはぞろぞろと出てくる人たち。

見てるだけで面白い。一人ひとりそれぞれの物語がある。もちろん俺にも隣にいる彼女にも。

「人がやっぱり今日は多いぞら」

「そうだね」

俺と隣にいるマルさんこと花丸さんは本屋でおこなわれるイベントのために朝から集まった。

今日おこなわれるイベントはある有名な作者のサイン会がおこなわれる。

「けど俺で良かったの？俺なんかと」

「うん。だってこの本を読んでるのマルと誠さんしかいなかったから」

「それもマルさんのおすすめの本だからね。面白かったよ」

「それは良かったずら。ルビイちゃんも善子ちゃんも本を読まないから」

「善子は変な魔法書なんか読んでいそうだけど」

「うーん、昔の善子ちゃんはすごく可愛かったのに」

「俺の知ってる善子も可愛かったけどな」

「けど善子ちゃんが持つてる本は面白いずら」

「へー、マルさんはいろんな本を読むんだね。俺はミステリーが多いな」

「本とは知識と冒険が詰め込まれた世界ずら」

「なるほど、さすがだね」

本とは知識と冒険が詰め込まれた世界つか。

たしかに俺も本を読んでいるときは冒険している感覚があるかな。

「それではサイン会を今から始まります」

列が少しづつだか動きだし始めた。

「やったー、ついに手に入ったずら！」

「よかったね。サイン本なんて初めてだよ」

「マルもずら。うふふ」

隣で本を大事そうに抱えるマルさんを見て俺もこのサイン本がさらに特別なものになった。

人生初のサイン会がサイン本が二人のものになるとは。

「ねえ、マルさん」

「どうしたずら？」

「お腹空かない？」

「うーん、そうずらなー」

首を傾げ考える。

もしかしてお空いてない？俺は……

ぐ〜

「ごめん。お腹空いた」

「ふふつ、マルもお腹空いたずら」

「俺の一押しのお店紹介するから」

「頼もしいぞら」

「それではこちらです。お嬢様」

「うむ、くるしゅうない」

俺のお腹が限界に来たため俺一押しのお店に案内することに。

それは仲見世商店街のちよつと外れた場所にある甘味喫茶。

「どんぐり?」

「そう、どんぐり」

店内に入る。

売店機で券を購入する。

「おおー!メトロ感の中に未来を感じるぞら!」

「すぐく喜んでくれてよかった。さあ、座ろう」

「席に沼津つて書いてある」

「そうなんだよ。ここのお店は東海道を現しているんだ」

「おー、面白いぞら。この目の前に流れてる水は何ぞら?」

「川を現していて、お盆が流れてくるからそこにさつき買った券を入れるんだ」

「おおー、こうすらか。流れていく」

川に流れるお盆。まるで一寸法師が旅をしているみたいだ。

それを目を輝かして見ているマルさん。

先ほどの本の話しをしていたら、注文がすぐきた。

「うーん、このうどん美味しいー」

「でしょ!俺一番好きなんだ」

「このクリームあんみつもお美味しい」

「う、うん。美味しそうに食べるね」

「うん。だって美味しぞら」

「美味しそうに食べてる姿を見てるだけで幸せになるよ」

「大げさぞら」

大げさではなく本当のことだよ。

その美味しそうに食べる姿を見てるだけで美味しさが伝わってくるんだよ。

「最後はここに一緒に来たかったずら」

「図書館？」

「そうずら。知ってるずら？この図書館が動物の姿をしているのを」

「動物？この建物が」

「おお、初めて聞くぞ。動物ってなんだ？」

「わからないずらか？答えはフクロウずら」

「フクロウ？鳥の？」

「鳥のフクロウずら。知恵を尊重するフクロウを図書館はしているずら」

「へー、初めてしつた」

「これでおあいっこずら」

「まさかさつきお店を自慢したのきにいらなかった」

「マルは負けるの嫌いずら。誰にも負けないずら」

「そつか。それじゃ図書館と一緒に来たのもなにか理由があるの？」

「だれもこんな風と一緒に来る人はいないと思つて」

「ふーん、なんかわからないけど本が好きだから俺は楽し」

「よかつたずら。さあ、一緒に本を楽しむずら」

「う……」

いきなり手を握られ少し手汗をかいたがばれてないよね？

「うーん、遅くまで楽しんずら！」

「そうだね」

空は夕方に、星も輝き始めてる。

「でも本の話しでそこまで盛り上がるなんて思わなかったずら」

「俺も驚きだよ知らない本をたくさん教えてもらつて楽しかつた」

「これからも本で語れると嬉しい……」

「うん。これからも知ってる本、知らない本で語りたいな」

「うん！語りつくすずら！」

「それじゃ、家まで送っていくよ」

「え、そんなことまでしなくっても」

「けど、暗い夜道を女の子一人で歩かせるわけには」

「だけど迷惑では」

「それにバスの中で本の話しができるからね」

「う、うん」

俺は一緒にバスに乗ってマルさんと本の話しで盛り上がった。

長い道のりをバス内での話しはさらに長く感じた。

楽しい時間はすぐ来る。マルさんが下りるバス停まで来た。

「今日は楽しいかったぞら」

「俺も楽しかった」

「こんなに楽しいのは久しぶり」

「それはよかった。また出かけよう」

「うん。あと、ずっと言いたいことが」

「うん？」

「これでマルもヒロインに」

「俺も言いたいことがあるんだ」

「誠さんも」

「うん。今日は月が綺麗だね」

「え……」

「今日は月が綺麗ですね」

「意味を知っているぞらか」

「うん。俺がずっと言いたいことがやつと言えた」

「まったくずるいぞら」

返事なのか笑って顔を近づけて口にやわらかいものが触れた。

第19話

雨が降るのは梅雨だからさ

雨は嫌いだ。ヤル気も元気も失う。

服は濡れるし、靴はさらに濡れる。だから雨は嫌いだ。

外に出るだけで道には水たまり。俺の道を歯向かう。

だからこのような雨が降る日は家から出ない。

「雨、降ってきましたね」

「そうだねー」

「すごく元気ないですね」

「朝は晴れていたのにここに来たら雨が降ってくるなんて」

「ははっ」

ふてくされる俺とから笑いする梨子。

放課後いつものようにA q o u r sの練習を手伝いにきたのだが、部室には梨子しかいなかった。

「それで他の皆は」

「えーと、曜ちゃんは水泳部のほうに顔を出しにいついて」

「曜は大変だな、水泳とスクールアイドルの両方を掛け持ちして」

「一年生の皆は花丸ちゃんの図書室の本の整理を手伝っているわ」

「仲いいな一年生は微笑ましいな」

「三年生はダイヤさんの生徒会のお手伝いを」

「三年生も仲いいな。それで俺を呼んだ張本人は」

「千歌ちゃんは先生に呼ばれて補修を」

「千歌らしいと言えば千歌らしいけど」

「千歌ちゃんはまだいま先生と二人きりで指導を」

「二人きりか、それなら俺たちも二人きりだな」

「え……」

外で雨が勢いを増す音がする。

内ではそれがわかるほど静かになった。

二人の間に漂う気まぜい空気。

よく考えたら俺は梨子の事をよく知らない。

知っていることは東京からの転校生でピアノができ、A q o u r s
の作曲を担当。好物はゆで卵とサンドイッチ。苦手なものはピーマ
ンと犬。家は千歌の隣。

うん。この情報しかないな。

「私たち二人きりってあまりないですよね」

「そうだな。なにを話しているかわからないや」

「ふふっ、私も何を話そうか考えていました」

「そうだなー、ここはやっぱりお互いの好きなものを紹介していくと
か」

「好きなものって言いますけどこの前話しましたから」

「うん。そうだね。どうするか」

「そうですね、こういうときは千歌ちゃんと曜ちゃんが話しを広げて
くれるので」

「あの二人がいると話しのネタに困らないですむんだよね。そうだ最
近なんか面白かった話しはない？」

「急にそんなこと言われても、そうですねー、千歌ちゃんが授業中寝て
いて私は起こそうとしたのにぜんぜん起きてくれなくて、曜ちゃん
に助けを求めたら曜ちゃんも寝ていて」

「ははっ、千歌は寝ている姿は想像がつくけど曜が寝ているのは想像
がつかないな」

「千歌ちゃんは寝ていることが多いけど、曜ちゃんも寝ていることが
多いですよ」

「そうなんだ。ああ、曜は水泳部と掛け持ちだから？」

「そうですね。曜ちゃんはスクールアイドルと水泳部を掛け持ちし
てさらに衣装を制作して、曜ちゃんは本当に大変だと思うな」

「そうだね、けどまさか曜が制服好きだったと知ったときは驚いたな」
「うん。制服の話しになると曜ちゃんは目が変わるんです」

「だけど制服はスクールアイドルにとっては大切なものだからな」

「誠さんも制服好きなんですか？」

「制服好きって聞かれると、千歌にこの前みせてもらった梨子の音ノ
木制服はよかったな」

「な……!?!」

「そう考えると俺は制服好きなのか? ってなんでそんなに顔を赤くしているのですか梨子さん」

「忘れて……」

「え、いやそんなに気にすることでは」

「忘れなさい!」

「待て待て、椅子持たないで危ない危ない!」

「忘れませんか」

「忘れる忘れる!」

「わかりました。千歌ちゃんにあとで写真消してもらわなきゃ」

「おおー、梨子さん怖い。そう言えば千歌が、『梨子ちゃんって怒らせると怖いんだよ。ホラー映画に出れんじゃないかって思うほどだったよ』なんて言っていたな。」

「そうだ千歌ちゃんに早く歌詞をはやくもらわなきゃ」

「そっか、千歌が歌詞を考えているんだよね」

「歌詞はいいものにはやく出してほしいんです」

「それを聞いたら千歌もやる気になるのでは?」

「いやですよ。そんな事言ったら舞い上がって逆にやりませんよ。それに恥ずかしいです」

「そうだな。千歌にはこの事は二人の秘密だ」

「いいですね。二人の秘密」

梨子は笑顔に言ってきた。

「そうだ、皆まだ来ないので少し付き合ってくださいか?」

「いいですよ。どこまでも」

梨子に連れられやって来たのは音楽室だった。

暗い音楽室は少し怖いのが、明かりが灯れば優しい部屋だ。

「音楽を聴いて感想を聞かせてください」

梨子はなれた手つきで準備する。

ポーン

と音を鳴らして調整。

俺は近くの席に座り演奏を聞いた。

優しく鍵盤を弾く。

二人だけの空間に流れる曲。

暗い心を暖かくしてくれる。

曲が終わり、俺は目を開ける。

「今途中まで曲ができていて」

「名前は何ていうの」

「まだ決めてなくって、だけど千歌ちゃんと曜ちゃんと海に潜ったと
きに聞こえて」

「そっか、それなら海に還るものは」

「え、海に還るもの……ですか」

「うん。海で聞こえた、そのお礼にこの曲を送る」

「海に贈る感謝の気持ち」

「いやならいいんだ」

「いいえ、その題名気に入りました。海に還るもの」

「よかった。この曲に歌詞もほしいな」

「それは千歌ちゃんに言わないと」

「そっか。あ、晴れた」

「そうですね。きれい」

雨はいつのまにかやんでいた。

雲の間から差し込む光はステージで当たるスポットライトのよう
にキラキラと梨子を輝かせていた。

第20話

あの日の花火を忘れない

夏休み。一年で最も暑く過ごす日が多くなり、一年で最も熱く遊ぶ日が多くなる日である。

Aquorsの練習も多くなり、俺のやることも多くなった。

「まー君お水ちようだーい」

「はい千歌、水」

「あ、水がない」

「曜ちゃんと替えをよういしないと」

「ふふっ二人とも」

「梨子も体をしっかり休めて」

「この暑さは墮天使の敵」

「わかっているならその黒い布を被るな善子」

「はいルビイちゃん水分をしっかりと取るすら」

「ありがとう花丸ちゃん」

「水分もいいけど塩分も取ってね」

「Oh、誠がすごい。まるでダイヤね」

「そうだね。これまではダイヤが指揮とっていたからね」

「なんですか、二人ともわたくしの悪口ですの」

「まさか、ダイヤを誉めているのよ」

「ありがとねダイヤ、これまでもこれからも」

「て、照れることを言うのですね」

「はい、3年生の3人も恥ずかしいことを言っていないでしっかり水分と塩分、体を休めてね」

「う、ありがとうございます」

顔が赤くなってるダイヤさんにタオルと水分を渡す。

これで全員に水分とタオルを渡したよね。

「ねえ、まー君なんかこれまでよりやる気になってない？」

「やる気？普段と変わらないら」

「いやいや、なんか違うよ」

「もしかしてこの後祭りがあるから？」

「そうだよ曜ちゃん祭りだよ、沼津の夏祭り」

「まさか千歌ちゃん忘れてた？」

「ははっ、実は忘れてた」

千歌の笑いにダイヤさんが説明する。

「今日は沼津でおこなわれる大きなイベント、沼津夏祭りでわたくし
たちAqoursがライブをおこなうのです。このライブが成功し
たらさらに知名度も上がり廃校を阻止することができますわ。なの
にこの大事なことを忘れるとは何事なんですの！」

「うー」

ダイヤさんの怒号にしゅっんと小さくなる千歌。

「まあまあ、今日のライブを頑張って成功させよう。そしたら明日は
皆で祭りを楽しもう」

「やったー、千歌ね焼きそば食べたい！」

果南姉が間に入りダイヤさんをなだめる。そんな中千歌はすぐに
元気になりヨダレを垂らしていた。

「誠さんはなにか祭りで食べたい物がありますか？」

梨子が質問しながら水渡ししてくれた。礼を言ってもらおう。

「祭りねー、俺あまり祭りで食べ物食べないな。いや、あれは食べる
な」

「あれ？」

「うん。ああ、東京じゃないのかあれは」

「あー、東京には無く沼津にはあるものってあれのことね」

「え、鞠莉さんはわかるの」

「うーんマリーーだけではなく梨子以外のAqours皆なら知ってる
ものね」

「私以外は知ってる……私は仲間外れ、なにもない私ははっはっ」

「あー梨子ちゃんが壊れた！」

「まー君、梨子ちゃんに謝って！」

「梨子ごめん！大丈夫、梨子には可愛さと素敵なピアノの演奏がある
だろー！」

「か、可愛い……まあ、それほどでも、あるけど」

「梨子ちゃん……」

「はっ！大丈夫です。少し暑さにやられただけなので」

「そっか、ほら水分とタオルで頭を隠して」

「はい。ありがとうございます」

「あと、さつきはごめん。祭りでちゃんと教えるから」

「できれば奢ってくれと嬉しうです」

「う、うん。わかった」

「なんか、まー君と梨子ちゃんがなかいね」

「前まではよそよそしいって言うのかな一歩引いた感じだったのに」

「この前二人でなにかあったのかな？」

「そうかもね。……うーん、負けてられないな」

「さあ2年生方休憩も終わりですよ。最後の確認をしますわよ」

「二はい」

「誠さんは確かこの後は祭りの役員の方と話しがあるのでしたね」

「そうだった、忘れてた」

「大丈夫ですよ、心配ですわ」

「心配しないでくださいダイヤさん。強いスケットを呼んでありますから」

「スケット？ですか。それはわたくしたちが知ってる方で？」

「えーと、善子は知ってるね」

「え、ヨハネだけがしてるリトルデーモン」

「違うすら。善子ちゃんが知ってる人って誰だろ」

「まあいつか紹介す「今すぐ紹介してくれてもいいんだよ」

「あつ！あのときの！」

「やっほー、善子ちゃん」

「ヨハネよ！」

「あなたはせ——」

「聖来姉！なんでここに？」

「誠にちゃんが遅いから来たんだよ。さあ時間がないから行くよ」
「あ、ちよつと、それじゃまた後で。聖来姉引つ張らないで！」
「慌ただしいね誠は」

「鞠利さん。成る程そういうことですか」

「ふふっ、さて始めましょダイヤ」

「そえでしたね」

聖来姉の運転する車で沼津へ。

沼津ではすでに祭りがおこなわれ、楽しんでいた。

役員と話の場は善子の家の隣のホテルが役員のテントが立っていた。
た。

「今日ライブをすることになっています浦の星女学院の者です」

「ああ、待ってました。こちらで話しを」

役員に連れられホテルの一室に通された。

詳しい話しは聖来姉が役員と話しをする。

「今日は沼津の祭りが新しい一步を歩むんですね。沼津は人口の流出が年々増えているので今回のことで少しは良くなると思います」
確かに今回の祭りはこれまででないことをおこなおうとしている。
今確かにスクールアイドルは人気である、いくつかの学校はその影響で生徒人数が増えた場所もある。町もそれを使い人を集めたいと思うところだろう。

「そうですね。ですが彼女たちは学校のためにやっているのです。大人の事情で彼女たちを利用するのはやめていただきたいですね」

聖来姉は役員に冷たく言い放つ。

「それは、確かにそうですね。失礼な言い方をしました。謝ります」

少し息が詰まる空間になったが話しは終わり、外に出る。外は少し青から赤に変わっていた。

「驚いたよ、まさかあそこまで考えていたなんて」

「そう？私の大切な人がいる場所だから守りたいと思ったただけだよ」

「ありがとね。聖来姉」

「ふふっ、どういたしまして」
俺の顔も今は少し赤いと思う。

「もうそろそろだ。緊張してきた」

「千歌が緊張するとは珍しいことがあるんだな」

「緊張を解く魔法の言葉を教えようか？」

「わかるよ、ヨーソローだろ」

「結局わからなかった。東京にない祭りの物ってなんだろう」

「梨子はまだ考えてたのか。はい梨子と同じ名前が入るさくら棒」

「今日はいつもとは違う祭りすら」

「いつもと違うってワクワクするね」

「ふーいつもよりお客がいっぱい」

「大丈夫ルビィさんはこれまで頑張ってきたから」

「今日はヨハネのためにたくさんのリトルデーモンが来てくれた」

「なにがヨハネのためだよ、お前も緊張しているのか？」

「まさかこんな場所で踊るなんて考えたことなかった」

「そうだね、俺も驚いているよ」

「いつもと違う場所、いつもと違う空間。素敵」

「今の鞠莉さんも素敵だよ」

「今回の事といい、これまでの事といいありがたいありがとうございます」

「なんですか、まだこれからも俺は手伝いますよ」

「さあ、皆行こう！」

千歌の言葉にうなづく皆。

「皆頑張ってきて、しっかり見てるから」

俺の言葉に皆は、

「「「「「行ってくる」「「「「「」」」」」」」

笑顔で振り向いてくれた。

彼女たちはその後沼津の花火より綺麗な踊り、今日のことを忘れな
い。

これからも俺は彼女たちを支える。

第20話（浦）

沼津を紹介Ⅱ

また千歌に呼ばれ沼津駅に集まった。

「それで今回はどこを紹介するの？」

「うーん、今回は沼津の港を紹介する予定だよ」

「またなんて広い範囲を紹介するんだな」

「まあまあ、今じゃ沼津港なんてバス旅行の団体以外の人たちも来る場所になったんだよ」

「やめろ！そのメタ発言！表ではいい人なのに浦でメタ発言するなよ！」

「浦ではメタ発言でもなんでも作者が思うことを言うんだよ」

「だからやめろよ！フオローできなくなるから」

「なんでも作者最近は生徒会の○存にまたはまったみたいだよ」

「だからやめろよ。お前はお子ちゃま会長じゃないだろ」

「まー君も好きなんだ生存」

「う、確かに好きだけど」

「あんなふうにはーレーム作りたい？」

「え、いや、その……」

「「「「「「ふーん……」」」」」」」

「やめろよ！その目！男の子ならあの本を読んだら夢見るでしょ！」

「さて、まー君の恥ずかしいことを騒いでるのをほっといて紹介を始めよう」

「「「「「「はーい」」」」」」」

「なんだよそれ、泣くぞ俺！」

・びゅうお

「W o！大きな建物ね」

「沼津が誇る水門だからね」

「この水門は津波がきましたら壁が降りてきて私達と沼津を守るのですわ」

「さっそく中に入りましょう！GoGo！」

「そうだね、外もいいけど中からの景色も綺麗だよ」

「あ、二人とも待つてください」

「上にのぼると沼津の景色が綺麗ね」

「海もいいけど山も綺麗だね」

「夕日の海はさらにきれいですわよ」

「そう言えば鞠利の誕生日回ここを紹介されたよね」

「そうでしたわね」

「そうなんだよ二人とも！マリーの誕生日で紹介されたここはなんとその後アニメでちゃんと聖地になったんだよ！」

「おおー」

「なので、3年生は」

「このびゅうおを」

「紹介しましたわ」

鞠利さん、果南姉、ダイヤさんたちは決めポーズをして3年生の紹介が終わる。

・ 深海水族館

「1年生はここ深海水族館に来ました！」

「ここは悪魔の化身が沢山いるわよ」

「いないすら。善子ちゃん」

「ヨハネよ！」

「でも深海水族館は沼津ならではの魚がいっぱいいるよね」

「沼津の海はすぐそこが深くなっていて珍しい地形すら」

「かなりテレビで取り上げられたわよね」

「あー、そうだねやっていたね。ルビイ見ていたよ」

「研究者も注目の場所すら」

「だけど深海水族館にいるシーラカンスはいないのよね」
「それは無理だよ善子ちゃん」

「シーラカンスは生きた化石と言われ、珍しい魚なんだから。それに沼津にシーラカンスがいるのは日本でもここだけすら」

「このヨハネがいる沼津なのよ！だったら沼津にもシーラカンスがいなくてもおかしくないわよ！」

「善子ちゃん言ってることがめちゃくちゃだよ」

「善子ちゃんだから。あ、もう尺がないすら」

「ドラマCDでも紹介した」

「深海水族館に来てほしいすら」

「待ってるわよリトルデーモンたち！」

ルビイさん、マルさん、善子1年生たちが決めポーズを決めて紹介を終える。

・沼津みなと新鮮館

「いやー、やっぱりここは人が多いね」

「沼津の新鮮な魚がいっぱいあるからね」

「どれもおいしそうだね」

「梨子ちゃん魚は鮮度が命ですから」

「なんで千歌ちゃんが偉そうなの？」

「ははっ、慣れて梨子ちゃん」

「曜ちゃんまでー」

「さて梨子ちゃん。ワサビを食べる？おせんべいを食べる？」

「えっ！魚じゃあないの！」

「この建物の中には魚屋さん以外のお店もあるんだよ」

「さあ、梨子ちゃんはどこが食べたい？」

「できれば私は魚が食べたいな」

「しかたないなー、それじゃ梨子ちゃん、はい」

「え、これは干物？」

「違うよ梨子ちゃん。干物じゃあなくて干物の揚げ物だよ」

「え！干物の揚げ物！」

「そうなのだ！学校でよく出たんだよ」

「懐かしいよねー、千歌ちゃん」

「沼津にはまだまだ私の知れないことが沢山あるんだ」

「そうだね梨子ちゃん」

「これからもっと楽しもう」

「うん。皆さんも知らない沼津を」

「訪れては歩いて」

「楽しんでいってね」

梨子、曜、千歌それぞれの決めポーズをして2年生の紹介が終わる。

さて、それぞれ沼津港の紹介を終える。

「なんとか今回も終わったね」

「最初などいなるかと思ったよ」

「けど、いつもしっかり撮ってくれるよね」

「当たり前だろ俺はお前らのプロデューサーなんだから」

「さて、プロデューサー今度はどこを紹介しますか？」

「そうだな、水族館はどうだ？」

「それドラマCDでやったよ」

「うん。そうだな」

「とにかくまたやろうね」

第21話 都会へGO!

沼津での夏祭りイベントを終えて1週間後のことだった。
「大変ですわ!」

部室でそれぞれ夏の暑さに負け、涼しい方法を探りながら過ごしている中、扉を音をたて開けるダイヤさん。

「どうしたのですか?」

「どうしたもこうもありますか!」

「え、えー」

「大変だと言っているのにあなたたちは!」

「あ、あのなのでなにか」

「だから大変なのです!」

「う、うんー」

俺は救いを求める目を鞠莉さんに向ける。

「(助けてください)」

「(うん? ああー)」

わかってくれたようだ。

「もーダイヤたつら。そのことは私が説明するわ」

「そ、そうなのですか」

「さて皆、ダイヤが言いたいことはね……」

鞠莉さんがタメをつくり誰もが続きの言葉を期待して、楽しみにしている。

「このスクールアイドル部に顧問ができました!」

「え」

「「「「「えー!!!」」」」」」

ダイヤさんが何か言っていたが皆の声にかき消される。

「顧問いなかったんだこの部活」

「え、まー君は驚かないの!」

「顧問だよ顧問!」

「うん落ち着け千歌、曜」

「えー、だってー」

「けど私も驚きました」

「梨子が驚くならそれほど大変なことなんだな」

「ねーちよつとなんなのそれ。梨子ちゃんと扱いが違うよね？」

「そうであります！梨子ちゃんと扱いが違うのであります！」

「そんなに大度違うか？」

「うーんそうなのかな？」

「「そうだよ!!」」

「そうかー」「そうなんだー」

千歌と曜の抗議に俺と梨子は押されて頷くしかなかった。

「それより問題は顧問のことでしょ」

果南姉が間に入り修正される。

「それで顧問って誰なの？」

「いえ、わたくしが言ってる大変なことはその事ではなく」

「なんなの、鞠利は誰か知ってるの？」

「YES！私たちの顧問になるのは！」

「呼んだかなん？」

「そう。この人——」

「やっぱり聖来姉か！」

「あれ？誠は知っていたの？」

「知っているもなにも俺の姉さん」

「あつやっぱり。通りで同じ名字だと思った」

「前回のこともあるからもしかしてとは思ったけど」

「ふふっ誠の驚いた顔もなかなかいいねー」

「え、あの鞠利さん？」

「なにダイヤも驚いてるの？あなたも知っていたでしょ」

「ええ、知ってましたわ」

「なのになんでダイヤまで驚いてるの？」

「なぜってわたくしが言いたかったのはこのことではありませんの

！」

「うん？」

「わたくしはこのことを言いたかったのです！」

そう言うダイヤさんの手には手紙が握れていた。

「あー、なるほどお姉さんは帰りますね」

そう言うときさつきと部室から出ていった聖来姉。いったい何しに来たのやら。

「それで嵐のように来て嵐のように去っていったあの人より大変なこととは？」

善子が頭を抱えながらも聞いた。

確かにあの人が顧問なのは驚いたがそれよりもダイヤさんが驚くこととは？

「よろしいですか。落ち着いて聞いてください」

「いいからはやく教えてください！」

「ダイヤは変に間をつくるから」

千歌と果南姉がダイヤさんを急かす。二人の気持ちはわかる。十分にわかる。はやく話してほしい。

「わかりましたから、顔を近づけないでください！」

顔を反り逃げる人からそつと手に握ってる紙を奪う金髪理事長。

「えー、なになに。ふむふむ……え、えー！」

大声を出して固まる人を取り囲み紙を読んではまだ固まる人びと。なんだよこれ。

そんなアホなメンバーから紙を取り戻しやっと話し始めるダイヤさん。

「先日夏祭りでのライブがすごい反響を呼び今回東京でおこなわれる全国スクールアイドルたちによるイベント『東京スクールアイドルワールド』に招待されました」

ダイヤさんの口から話された内容はさつきまでのバカみたいな茶番を忘れさせるほどの内容だった。

「東京……私たちが」

千歌の一言で正気にもどるメンバー。

「私たち東京でライブができるの」

「そうだよ曜ちゃん！」

「千歌ちゃん……やった！」

「うん。これで東京で優勝したら廃校が阻止できるよ」

「うん。がんばろう」

「目指すは優勝！」

「掴み取れ優勝旗！ヨーソロー！」

「ふふっ二人ともはしやぐの早いよ」

「だけど東京だよ」

「都会だよ」

「うん。知ってる」

「あ、今のは田舎者を見る目」

「クツ、これが都会育ちの余裕」

「そんなのじゃないよ。誠さんからもなにか言ってくてください！」

え、なんでそこで俺が出てくるんだ？

「あ、誠君を頼った」

「それならこちらは果南ちゃんだ」

「えー、なんでわたしなの。梨子ちゃん誠を頼ってもいいことはないよ」

「おお、失礼なことを言うね果南姉」

「なにを騒いでますの」

「どうしたのダイヤ？」

「どうもこうありますか。東京でライブをするのですならば今から練習をおこないます」

「やる気だお姉ちゃん」

「東京では今練習中の新曲を披露します」

「新曲……やろう。優勝を確実にするために」

千歌の言葉にメンバーは頷き、さつきまで暑さに負けていたのが嘘のように熱気の外で新曲の練習を始めた。

「今度こそは優勝をとります」

「お姉ちゃんなにしてるの？」

「ええ、今行きますわ」

「東京でのライブ優勝を掲げてもう特訓が始まり、気がつけば明日は東京に向かう日。」

夜の部屋、俺は眠れないでいた。明日のライブが気になるのもあるがそれよりも気になることがあった。

「東京か……」

記憶がなくなる前は東京で過ごしていたがそれも覚えてるのは少ない。俺はなにか東京で大事なことを学んだ気がする。だが思い出すことができないでいた。

もやもやする夜を過ごし、気がつけば朝になっていた。

「寝過ぎしたー」

やっぱり寝過ぎした。今から待ち合わせの沼津駅には間に合わない。

しかたない。皆には先に行ってもらい後から向かうことにした。

少しお金がかかるが俺は一度三島駅で降り、新幹線に乗り換えた。

なんで沼津には新幹線がないのかな。新幹線は早いなー。

なんだかんだ考えていたらもう東京についていた。そこから目的地のライブがおこなわれる会場に向かうため電車を探している時だった。

「お久しぶりです。沢田誠」

名前を呼ばれ振り向くとそこには紫色の髪をした二人の少女たちがいた。

BS 海は地平線まで続いている

8 / 1

彼と会ったのは本当に小さい頃だった。
突然の出逢いなのに不思議と違和感なく楽しんだ。
彼がいる日常。彼がいなくなった日常
今ある日常。なくなつた日常があつた。
そしてこれから始まる私たちの日常。

「長旅ご苦労様です。お荷物をお持ちします」

俺はでかい荷物をお客様から預かる。

笑顔で接して、ここで過ごす数日間を満足してもらおう。

「この旅館の名物は富士山が見える露天風呂なんですよ」

そう言ってお客様を旅館に案内する。

本当に俺がなぜこのようにことをしているとと言うとそれは数時間前に戻る。

「ふぁー、眠いな」

さすがに少し寝すぎた。寝すぎるとさらに眠くなるのはなぜなんだろう？これって俺だけなんですかね？

朝の気持ちいい太陽の光は光合成できそそうだ。

ああ、また眠くなってきた。

ボーとしていると携帯が歌いだした。

「はいはい。誰ですか？」

液晶画面に映し出される名前。

「……はぐっ」

耳から少し放して構える。

『あ、もしもし！』

耳から放しても響く声。

「どうした、今日は練習休みの日だよな」

最近バイトを行いながらも練習には顔を出している。

その中で唯一の休日。ゆっくりさせてくれよ。明日は騒ぐ日なんだから。

『その、今からって家に来てくれても大丈夫？』

「今からか……」

今からは少し用事があるからな。

『今日団体さんのお客さんがいっぱいですらに、今日に限ってお手伝いさんが風邪引いて休んじゃって』

おお、それは大変だ。

人がいないのに人が大勢来る。そんな中働くとか大変だな。

『お願い！助けて！』

助けて……。

そっか。何してるんだ俺は。

アイツが俺を頼ってるだ。だったら答は一つ。

「今からそっちに行くから」

俺はそうやって歩きだす。

電話の向こうで何度も『ありがとう』を繰り返す。

アイツが困ったら俺は助ける。

約束は忘れない。

「いやー、来てくれて助かったよ」

「本当ねー」

千歌のお姉さんの美渡姉と志満姉たちから言葉をもらう。

「いえ、暇だったので」

「でも、あの誠君が」

「大きくなったなー」

いやあの志満姉と美渡姉さんたち、俺の身体をベタベタと触るのやめてくれますか。

「あー！お姉ちゃんたちずるい！」

旅館の服装をした娘がこっちやってくる。

ほらみる、千歌がカンカンみかんになっちゃた。

「千歌もまー君を触りたい！」

「お前もかよ！」

なんなの！高海三姉妹は人の体をベタベタ触りたがるの！そのよ
うな人種なの！

「千歌ちゃんはいつも触ってるわよね」

「少しぐらいいいだろ」

「ずるいよー！千歌も触りたいー！」

ああ、これが高海三姉妹の姉妹喧嘩か。

こんな廊下で大声で喧嘩するとはさすがだな。

お客様に迷惑かけるし、さらに言えばあの人に怒られるぞ。

「なにやってるのー！」

「「っ！！」」

あーあ、怒られた。

こちらの方に歩いてくる千歌に似た小さい人。

高海三姉妹の母であり高海家のお母さんである。

「お客様がいるのにあんたたちは、まったくなんで毎回毎回迷惑をかけるの！ほら、さっさと部屋の案内と部屋の掃除に風呂の掃除をしてきなさい！」

「「はいっ！！」」

お母様の一言で素早く動く高海三姉妹。

お母様すごいです。

「誠くん」

「は、はい！」

な、なに！え、怒られるの！俺怒られるの！やだ、怖い！待ってください、今のことは俺悪くないんです！いえ、俺も悪いです。ですから怒るなら優しく怒ってください。優しく怒るってなんだよ！怒ってるだから優しくもなんにもないだろ！

さつきから一人でぐるぐるなに言ってるの俺！

あわあわ、とうとう目の前まで来てしまった。心を決めろ！お前は誠。自分の名前のように自分を信じろ。

「誠くん。今日はありがとうね」

「うう、え……」

ありがとう？俺に言ってる？

「あの三姉妹があんなに楽しくしてるのは久しぶりだから」

え、俺が知る限りあの三姉妹は毎日楽しそうに騒いでますよ。

「誠くんが戻ってきてくれてから、毎日千歌は楽しそうに誠くんのことを話してるわよ」

うわー、恥ずかしい。なに話してるんだよアイツ。

「今日は急に来てくれてありがとうね。無理しないでね、給料はあるから」

「え、あ、ありがとうございます！」

お手伝い気分で来たのに、まさかのバイトですか。それならおもいつきり頑張りますよ！

「今からお風呂のほうを掃除してきてくれる？」

「わかりました！」

俺はお風呂があるほうへ向かって歩いた。
それはうきうき気分です。

「だけどお客様に迷惑かけるのは感心しないな」

「は、はい……」

心を落ち着かせて歩く。これ以上怒られないために。

ある英雄は2000の特技を持っている。

俺の得意なことは20000はある。

なんてわけではない。

俺の特技は10あるかないかがやつとだ。

まあそのひとつが掃除である。

俺は掃除が好きな男子なのだ。え、気持ち悪いだと。俺から言わせると部屋が汚いほうが気持ち悪い。

これまで何度も千歌たちの部屋を掃除してきたことか。

「そう。俺は女子力が高いのである！」

モップを片手に高らかに宣言する。

格好はカッコ悪いが、ヤル気は格好いいぞ。

まずはシャワーなど石鹸が残ってそんな部分を洗う。

「はー、さすがは旅館だ」

広い。お風呂が広い。

シャワーだけでも10はある。

そのひとつ一つを綺麗にする。

座椅子、桶を綺麗に設置する。

次は風呂を綺麗にする。

「湯船は気持ちいいだろうな」

なんてことを思い浮かべながら手を動かす。

アワアワになったらモップやブラシで綺麗にして、ホースで洗い流す。

「外は熱いな」

次は露天風呂を掃除する。

太陽が照りつける熱さはさすが夏だな。

「あれ、まー君?」

どこからか名前を呼ばれた。

「こつちだよ!こつち!」

こつちつてどつち!

「ここだよ!」

ここつてなんだよ!怖いよ!

「もー!女湯だよ!」

「あ痛!」

後頭部に痛みが走る。

足元に桶が転がってくる。桶を拾い、飛んできたほうを向く。

「やつと、気がついた」

扉から半身を見せて手を振る千歌がいた。

「痛いだろ千歌!」

「ごめん。だつて気がつかないんだもん」

気がつかないんだもん。よしだから桶を投げよう。つてなに怖いところを考えてるの!」

「まー君もお風呂掃除?」

「そうだよ。千歌もそこにいるつてことは千歌もか」

「うん。露天風呂はウチで一番の目玉だからね」

「確かにすごいな、海と富士山が綺麗に見えるな」
「でしょでしょ！」

「広いお風呂に綺麗な景色、一度入ってみたいな」
「一度入ったことあるじゃん」

「え、ああ。そうだな」

あつぶねー、入ったこと忘れていた。

忘れたことを忘れていた。

「掃除早く終わらせてアイス食べたいな」

「だったら早く手を動かせ」

「もー、真面目すぎるよ」

「俺は真面目っていうよりこれから起きることがわかるんだよ」

「え、どう言うこと？」

「千歌ー！掃除早く終わらせなさい！」

「げ、美波姉！」

隣の風呂場から騒がしい声が聞こえる。

だから言ったのに。怒られるのが好きなのか千歌は。

そして怒るのが好きなのか美波姉は。

俺は黙々と掃除をする。

「ねえ、誠くんは料理できる？」

「はい？」

夕飯の準備を始めるため千歌母に呼ばれてみたら驚きの一言を言われた。

確かに俺は一人暮らしで料理をしている。今現在は家族に料理をしているため少しは料理の幅が広がった。

「で、できますが」

「よし。それじゃこっちにきてくれる」

なんだろう今の発言は失敗してしまった気がする。ギャルゲーなら積んでる。

千歌母の後について行くと、そこは。

「さてこの魚をさばいてくれる?」

「えーとこれは鰹あじですか」

「そう鰹。この鰹をさばいて欲しいんだ」

「さばくのですか?」

「できる?」

「ええ、果南姉に教えてもらいましたから」

まさかアイツのためにした練習がここで役立つとか。

「おお、うまいうまい。できてるよ」

「そ、そうですか」

「さてあと5匹さばいてね」

「え、5匹!あと5匹さばくのですか!」

「それじゃ頑張つてね」

え、えー。放置ですか。

「お疲れまー君」

「お、おお……」

「すごく疲れてるね」

「そうだな今日はものすごい疲れた」

「ごめんね急に頼んじやって」

「いや、それでも楽しかった。ありがとうな」

「それはよかった。こつちもありがとうね」

「そっか。そうだ今何時だ」

「えーと11時過ぎだよ」

「うわあーバスがない」

「あ、そうだお母さんが『今日は泊まって行け』だって」

「そうか、なら今日は言葉に甘えて」

「それじゃお風呂に入ったら、今ならお客さんいないから」

「ふー、まさか自分で洗った風呂に入るとは」

今日は本当にいろいろあったな。

「さて明日のイベントどうするか」

本当は今日明日のイベントの準備をする予定だったのに。

「明日が楽しみだな」

「明日なにがあるの」

「なについて明日はっておい！」

隣にいつの間にか千歌が。驚いて立ったけど今裸だった。

「気持ちいいねー」

恥ずかしいー、幼馴染に高校生になって裸見られると思った。だけどこっち見てなくてよかったー。

「はあーお前なもう高校生だろ」

寒くなってきたしまった湯に入る。ばれないようにそつと。

「え、なんで？だつてまー君だもん」

「はあー。そうですか」

「だけどこうやって二人きりで星を見ながらお風呂に入るの」

「そうだな、いいなこの時間」

「うん」

二人で夜の露天風呂で見る星はいつもより輝いていた。

「また入ろうね……今度は隠してね」

「やっぱり見たのか！」

「こっちを見ないでよ！」

「お前、今さら言うのかよ！」

なんだかんだ言いながら、笑いながらまた二人で風呂に入りたいな。

第22話 都会の空

都会の中心、大勢の人が行きかう駅の中で声をかけられた。

「覚えているかしら」

俺は言葉を失った。

しぼって出た言葉は、

「人違いでは？」

一言だけだった。

だがその一言は以外なダメージを与えていた。

「え、人違い。どうしよう」

「しっかりして」

「だ、だけど……うーん」

あたふたし始める。面白い。

紫色の髪をした少女二人。

彼女を見た瞬間ふっと脳裏に銀世界に広がるステージで歌う二人。

そっか、俺はこのことまで忘れていたんだ。

「久しぶりだな二人とも」

忘れていたはずなのに俺の口からは言葉が出てきた。

たぶんそう言わなければならぬのだと思ったのだろう。

それは記憶ではなく思い出のだと思う。

「え、人違いではなかった！」

「当たり前でしょお姉さま！」

本当に仲いいな。懐かしさで意地悪をしてしまった。

「それで二人はなんでこんなところにいる？」

「それはあなたと同じ理由です」

「ははっ相変わらずの冷たさだね、理亞は」

「それでも楽しみにしていたのよこの子は」

「姉さま！別に楽しみなんて」

「そうね。まだ時間があるなら私たちと観光でもどうかしら？」

「観光か……」

まあ、時間があるからいいか。

「ああ、楽しく観光と行こうぜ」

千歌たちにはあとで連絡をしておくか。

「なんだかんだで楽しんだな」

秋葉原は本当に最高だ。

ここに来ればお目当ての物が手に入る。店も一件まるまる本屋だったり、アニメショップではビルまるまるアニメの物がそろっている。

これが東京、駅一つとっても沼津の駅なんて比べものにならないほど人数が下りては乗り込んでを繰り返す。

車の数、種類が多すぎる。道路を走っては止まってを繰り返し三色の信号が何台ものカラフルな車を操っているように見えた。

人もまた信号機が赤になれば止まって、青になれば歩いて。人が交差するのに誰もぶつからない。大勢が歩くのに誰もぶつからないそれが本当に不思議で面白い。

「初めての東京……」

「人が多い……」

「なんか疲れてないか？」

「ふー」

都会のすごさに圧倒されたのか最初に会った時の元気な姿がだんだん二人になくなってきていた。

少し休むか今日はかなり歩いたからな。

「ほらここで少し休もう」

ちやうど休めそうなベンチがある。そこに向かってふらふらと歩いて行く。

ベンチに座るなりすごく疲れた顔をしている。アイドルだろ、なのにそんな顔をするのか。

「姉さま疲れてない……」

「そんなわけないでしょ……」

「おいおい、だんだん声が小さくなってきたぞ」

これはそうとう疲れているな、遊びすぎたか？

「少し待っていてくれ飲み物買ってくる」

ベンチにグデーともたれ掛かっている二人を置いて俺は自動販売機を探しに旅に出た。

「そう言えば姉さまこの近くでは……?」

「この近く、それなら少し行ってみる?」

~~~~~

「ここだよ!この階段を走って練習していたんだ!」

「待つてよ!千歌ちゃん」

「ここがあの人達が練習していた場所。ハアハア、歌」

「こんにちはA q o u r sの皆さん」

「この子脳内に直接」

「PV見ました。素晴らしかったです」

「あ、ありがとうございます」

「もしかして明日のイベントでいらしたのですか」

「はい」

「わかりました。楽しみにしています」

タタタツトウ!

シユター!

「それではまた」

~~~~~

「あいっらどこ行つたんだ。うん?」

「まったく理亞たらなんであんなことしたのよ!」

「だって姉さま!かっこよく見せたかったんだもん!」

「だからってなあー、あ、誠」

「なにかあったなその顔は。ほら飲み物」

「ありがとうございます飲み物は頂くわ」

「私も頂くわ」

「おいおい、もう別れるのか?」

「ええ、また明日」

「今日のことは忘れないで」

二人の姉妹は都会の夕日に消えていった。

「あ、まー君!おーい!」

「千歌。悪い寝坊した、あれ果南姉たちは?」

「お姉ちゃんたち三年生はなにか用事があるとかで来れないみたいで
す」

「そつか。それじゃ一年と二年の六人か」

「ねえ今日は疲れたから早く旅館に行きましょう」

「善子ちゃんは勝手に居なくなるからずら」

「なによ!それなら曜さんもそうでしょ!コスプレなんかして!」

「ヨーソロー!どうでありますか誠君。似合ってる?」

「曜、こっちに笑顔を一枚撮らせてくれ」

「なに二人とも浮かれてるの。さあ旅館に行きましょう」

梨子に怒られながらも、合流できたことに安心があった。一事はど
うなるかと思っただけど心配はいらなかった。

だが二人が最後言っていた『また明日』とは一体?それに『今日の
ことは忘れないで』とは?俺の秘密を知っているのか?

それにしても俺は二人のことをまだ思い出していなかった。

外は少し涼しいな。

「おお、久しぶり。今こっちに来てんだ」

「だって言わなかったし。忙しいだろ」

「はいはい。また今度な」

「わかった。いつでも遊び来い」

「ああ、いつでもご飯準備するから」

「聖来姉は元気だぞ」

「はいはい、そんなこと言うなよ。わかったよ」

「そうだな、俺も悪いなそれは」

「うん。そうだな」

「そっか。わかった、じゃあな」

「さて戻るか」
久々の電話を終え、見上げれば沼津との違う空がそこにあつた。

戻つて部屋がなんでこんなことになっているんだ。
布団に埋まる梨子と曜、ルビイさんとマルさん。

なんか毎回面白いことになるんだこのメンバーは。

「ねえさつき中居さん聞いたんだけど音ノ木坂高校この近くなんだつて、なにやってるの?」

「ほら、千歌も手伝つてくれ」
「う、うん」

手伝いながら布団を引きなおす。

「え、千歌ちゃん今から音ノ木坂高校に行くの?」

「けどもう夜も遅いし……」
「夜はこれから堕天使には喜びの時間よ」

「それに、明日は本番すら」
「ごめんね千歌ちゃん、私もちよつとね」

「そっか、そうだよね……」
「ほら、明日のために今日は身体休めよう」

それから俺は一人別の部屋で寝た。今日はまた多くのことがあった。

開けた窓から見えた夜空は腕を伸ばしても届きそうにはなかった。沼津とは違う星が輝いていた。

第23話 挫折と後悔、そしてもう一度

東京からの帰り道千歌たちは疲れた顔で電車に乗っていた。それはしかたない結果が結果だったため俺もかける声が見つからなかった。

「……………」

夕日の中静かに走る電車は会話をすることを許さない。ライブ前の元気が懐かしい。それはしかたないのかもしれない。ライブ後にスタッフのお姉さんから受け取った投票紙は残酷なものだった。Saint Snowでも9位。30位中9位あの二人でもその順位だった。なのにAoursは30位中30位。つまり最下位だった。

あれだけ頑張った千歌たちに俺がかける言葉が見つからない。

「私は良かったと思うよ。精一杯頑張って東京に呼ばれて踊れて」

「千歌ちゃん……」

「だから胸を張っていいと思う私たちの今が精一杯できたんだもん」

「千歌ちゃん……千歌ちゃんは悔しくないの」

曜の一言は皆の心に何か刺さった。

「悔しくないの?」

「それはちよつとは……、皆で立てて私は嬉しかった……」

「そっか……」

それから電車は少しの無言が続いた。

電車乗って沼津についたときはすでに夕日が落ちていた。

沼津に帰ってきてきて皆の顔に少しは安心の顔が見える。

都会の緊張がやっとなげた。

「お帰りなさい」

駅から俺たちを迎えてくれたのはダイヤさんだった。

「おね、えちや……ん」

ルビイさんがダイヤさんの胸に飛び込み泣き始めてしまった。
なにも言わずダイヤさんは頭をなでる。

場所を移し話があると言われた。

「得票0でしたか。やはり今のスクールアイドル中では、先に言っておきますがあなたが私たちは決してダメではなかったのです」

「それはつまりどう言うことですか」

「7236。去年まででもこれでだけのスクールアイドルが存在する。Aqoursはその中でも皆を喜ばせるほどの踊りとパフォーマンスはできている」

「そんなにいるのに……」

「ですからあなたたちが歌えなかったことは恥じることはありません。二年前もわたくし達は歌うことができなかつた」

「それはなんで、ダイヤさんたちが歌えなかつたのは」

「ステージの圧倒的な威圧。他のスクールアイドルたちの実力の差が」

「そんなことが。だから私たちが学校でライブする時に言ったことは」

「そうです。二年前のわたくし達は歌えなかつたけど歌えたあなた方はすごいですわ」

ダイヤさんは優しく言つて解散になった。

皆はダイヤさんからの言葉に何かを受け取つたんだと思う。

「誠さん、少しいいですか」

ダイヤさんに連れられて来た海には果南姉と鞠莉さんがいた。

「お帰り誠。お疲れさま」

「ただいま、それで俺に言いたいことつて」

「誠には言っておこうと思つて。実は私たち二年前もスクールアイドルやっていたんだ」

「果南姉。うん知つている」

「え、それじゃ今日の千歌たちみたいに東京行つて歌えなかつたんだ」

「それも知っている」

「なんで知っているの！私は何を言えばいいの！」

「だってさつきダイヤさんが千歌たちに説明してから。だから俺は悪くないから胸ぐら掴まないでー」

「まあ踊れなかったのはマリーのせいでもあるんだけどね」

「鞠莉それは言わないでよ！」

「だって果南が格好つけるから」

「なんでそんな言い方するかな」

「鞠莉のこと思つてのことならもう少しあつたでしょ！」

「だってあの時は鞠莉ヤル気だったから！」

「ああ、もうそんなこと今は言いでしょ!!」

「どうでもいいことだつて!!」

「今日は三年生のことを話しにこんな場所にこんな時間に呼んだの！」

「そんなこと呼んだわけではないですわよ」

「今日誠を呼んだのは過去のAqoursと未来のAqoursのことを話しにきたのよ」

「過去つて鞠莉さんとダイヤさん、果南姉たち三年のことですよね？ならさつき話を聞いたので」

「それじゃ教えてあげる二年前の私たちのスクールアイドル名はAqoursつて言うんだ。そして今蒲女のスクールアイドルはAqoursつて言うんだ」

「それじゃなすけ親はだれなの」

「ダイヤよ。ダ・イ・ヤ！」

「おお意外！鞠莉さんがなすけ親だと思つたいた。まさかダイヤさんだとは」

「もー！このことはいいですから！今から話すことはこれからのAqoursのことですわー！」

「そうだね。千歌たちに少し残酷だけど現実を教えたからね」

「やっぱり東京に後輩たちだけで行かせたのは意味があつたんだ」

「だって私たちが東京で辛い思いしたのに不公平でしょ。それに一度

の挫折を味わうのも大切なことだよ」

「スポコンだ、だけどその考えは大切かも。とくに千歌には必要かも」

「だって0だったんだよー!」

千歌が泣いてる。

「あんなに頑張ったのに」

千歌が悔しんでる。

「0だったんだよー!」

千歌が初めての挫折をした。

それがなにか嬉しい。

この挫折で千歌もだが誰もが一段階成長できたんだと思う。A q
o u r s もこれからの成長に俺はすごく期待をしている。

なぜなら俺も今回のことで挫折をしたからである。

いつものようにやっていたらA q o u r s は上位に入ると思っ
ていた。だけど結果は残酷だった。

俺の頑張りが足りなかった。

俺もなにかできたのかもしれない。

俺の、俺の、俺の、俺の、俺の、俺の。

「俺の存在が彼女たちに悪影響を与えているのかもしれない」

俺も今回の挫折でなにか成長するかもしれない。

第24話　ここで待っている

「合宿ですわ！」

部室で大声をだすダイヤさん。その理由はたぶんこの暑い夏のせいだろう。

「なんですか突然夏の暑さに頭がやられてしまいましたか」

「ダイヤは昨日から騒いでいたね」

「熱いお茶飲んだせいすら」

「なんですの！誠さんはどうでもいいけど、なんで同じユニットの人たちにそんなにキツク言われないといけないのですか！」

「だってねー」

「すらー」

果南姉とマルさん二人は顔を合わせて言う。

てか、俺が言ったのはいいのですか。スルーされるとそれはそれではないかなんか。

「そう言えば昨日のユニット練習でなんか喧嘩していたような」

「喧嘩？珍しいこともあるんだ」

梨子から話を聞きそんなことあるんだな。いや、千歌と曜から聞いたな三年生組が喧嘩して仲が悪くなっていたけどお互い仲直りしたって。

それでなんか千歌の一括が聞いたって曜が笑って言ったっけ。

「それで話しを戻すけどダイヤ、合宿って何をするの？」

「合宿は合宿ですわ！はいあなた！」

「は、はい！」

「夏と言ったら」

千歌と鞠莉さんが助けを求める顔を向けてくるが残念俺もルビイさんに助けを向ける。

「たぶん、ラブライブ！」

「さすが我が妹、可愛いでちゅねよくできた妹でちゅね」

「ガンバルビー！」

「なにこの姉妹コント」

「コント言うな！今回わたくしが極秘に見つけたスクールアイドルの練習メニューですわ！」

「遠泳10キロ」

「ランニング10キロ」

「こんなの無理だよー」

マルさん、善子、千歌たちよ心配する必要はない俺も無理だ。

「まあなんとかなるね」

ここにいたよ脳筋バ果南姉が!?この人なら確実にやりかねない。

「あれ?千歌ちゃん町内会の海の家の手伝いが」

「あ、忘れていた。ですのでこの練習メニューでは……」

「あ、私もだ」

おおと、曜と千歌、果南姉三人が海の家の手伝いがあることになる
と練習できなくなるぞ。

うん?海、夏休み。

「あ、俺も海の家の手伝いがあったんだ」

「「「「「そんなの知るか!!」「「「「「」」」」」」」

なぜか皆から冷たくはなされた。

『明日の朝5時に集合!』

ダイヤさんから朝一の呼びだしがかかった。皆から元気ない返事が返ってくる。

俺はと言うとなぜか4時には来るように言われた。4時とか太陽が昇ってないぞ。

なんだかんだ言いつつ俺は……。

「あ、やべ4時半だ」

起きたのは4時半。寝ぼけた頭を無理やり起こして支度してバス停でバスが来るのを待っていた。

「……ま……くん、ま……」

「……だ……どう……」

「すうー、誠くーん！」

「うわっ!!」

突然大声で目を開けると驚いた顔をする善子とドヤ顔する曜がいた。

なぜだ俺はバスに乗ったのではなかったのか。

誰もいない砂浜で太陽が昇るのを待っているはず。

ぞろぞろやって来る皆を迎えている。

これらがすべて夢だったとは。いやこれが夢なのかもしれない。

「ゆーめーかーらーさーめーろー」

頭を振って夢から脱出を試みるが、夢から覚めることは無く頭がクラクラしてきた。

「なにしているの?」

「大丈夫?」

二人に心配されながら俺は問う。

「俺なにしていた」

「えーと私たちが来たときにはバス停横でうずくまって寝ていたかな」

「それを見かねて声をかけたのよ。それも大声でヨハネにも被害が」

「曜ちゃんは応援で大声もだせるんです!」

「だからってヨハネにも被害を与えなくってもいいじゃない!」

「それは、ごめんなさい」

「まあ、とにかく二人が俺を起こしてくれたのはありがとう。おかげで目が覚めたよ」

「それは良かった。あ、バスが来たよ目指すは海の家へヨーシコ!」

「だからヨハネ!」

「朝から元気ですねお二人とも」

バスに乗ってからも元気な曜と楽しく話す善子。

二人はこうして朝も帰りも帰っているのだろうか、それは楽しそう
だ俺も混ざりたい。

「それで昨日の配信はこれまで以上に盛り上がったわ、さすがヨハネ
ね」

「はいはい、よしよし善子」

「あーもう頭を撫でないで！」

「懐かしいなこの感触、肌触り、このくんだり」

「ヨハネには苦い思い出よ」

「誠君と善子ちゃんは仲良いね、長馴染みなんだっけ？」

「そうね地獄の窯から生まれて間もない頃ねこの悪魔と会ったのは」

「だれが悪魔だ、小学校の低学年のときが出会いだな。なぜか出合ったときに泣いていたんだよね」

「あ、それで慰めるためによしよし善子なんだね」

「もうう、いいでしょ！」

「ごめんな、ほらよしよし善子」「ごめんね、よしよし善子」

「もううだからヨハネよ！」

朝のバスは賑やかになりながらも目的地に到着する。

「朝早く来たのはオラだけだったすら」

「当ったり前でしょ。そんな時間に来るわけないでしょ」

「すらー」

花丸さんと善子がパラソルの下で休んでいた。

「まったく今回は千歌さんたちの海の家の手伝いを手伝いに来たのに」

「その後は練習があるのにあんなに遊んでいいのかな」

「まったくです、梨子さんからもなにか言ってやってください」

「私が言ってもどうにもなりませんよ」

千歌と鞠莉さんはビーチボールで遊んで、曜とルビィさんは仲良くぷかぷか浮かんでいるし。果南姉にいたっては一人波乗りを楽しんでいる。

「それでその海の家は……はて？どこにあるのやら」

「現実を見るすら」

花丸さんが言うように千歌たちが手伝う海の家は歴史を感じる建物だ。

「それにしても隣は繁盛しているね」

「未来ずらー」

海の家隣の立つ現代風の新しい海の家は繁盛している。

「はい焼きそば2、カレー3できたよ」

厨房からできたての食べ物や席に座ってるお客さんに届ける。

「お待たせしました、焼きそばです」

「カレーはこっち」

「はいカレーお持ちしました」

「すみませーん」

「はいいただきます」

このように大忙し。俺が頼まれた海の家は千歌たちのライバル店だったようで、今なぜか暑い中執事服を着せられ恵と共に働いてる。

「ねー誠、買い物頼まれたから一緒に来て」

「わかった」

恵とともに買い物に頼まれたために支度して外に出る。

仕事のために外の席に食事を提供して外に出るのと買い物のため外に出るのでは太陽の暑さが全く違う。今すぐ帰りたい。

「あれ、まー君?」

外に出たらさらに暑苦しい奴に出会ってしまった。

「よう千歌。そっちの海の家はどうだ?」

「こっちはお客さんが全く、それもこれもゼーんぶあの海の家のおかげだよ」

「それでその格好は?」

「あ、恵ちゃんこの格好はダイヤさんが」

「それで梨子ちゃんも隠れているんだ」

「だって恥ずかしいだもん」

そりゆそうだ。少しダイヤさんのセンスを疑いたくなる。

「誠さんなにやら失礼なことを思っていますか」

あ、ダイヤさん。あなたは人の心を読む力を持っているのですか、黒澤家怖い。

「去年もあなたの方が働く海の家にかけているみたです。ですが今年はわたしたちが勝ってみせますわ!」

高笑いしながらダイヤさんは離れていった。

あれ、なんだかイヤな気がする。

「なるほどー、これは勝負なんだね」

「勝負なら負けないよ」

「ち、千歌ちゃん」

「恵なんてそんなヤル気なんだよ」

千歌と恵の間に火花が散っている。なんでこうなるのかな。

それから日が暮れるまで両海の家売り上げ対決が続いた。

「それで勝負は？」

「まだですわ！まだ終わってませんは！」

「そうだそうだ！」

「ふふん、それじゃ明日もやる？」

「まだ続けるかよ」

お互い互角の戦いだったようである。

「それより練習だよ」

「そ、そうですね。それでは練習を始めますわよ！」

Aquorsの練習が始まる。

「ほへースクールアイドルって大変なんだね。海の家で働いた後に練習をしないとイケないなんて」

「そうだな、スクールアイドルは大変だ」

けど海の家後の練習は千歌たちの手伝いとダイヤさんのどうしても合宿でこのような結果になったんだけど。

恵と二人で夕日の浜辺を練習をしている姿を見守っていた。

「……さて夕飯を食べに変えられないと」

「そっか、気をつけてくれ」

「あれ誠は帰らないの？」

「ああ、今日はこれから打ち合わせがあるんだ」

「そうなんだ……そっか。それじゃまた明日もよろしくね」

「ああ、今日はゆっくり休んでくれ」

「わかった、家から持ってくる」

昨日は千歌旅館の空き部屋に泊まって今日も朝から海の家で働いて夕日を浴びた今に至る。

「今日も勝敗はつかずか」

「くー、明日こそ!」

「ええ、明日こそ!」

ダイヤさんの負けず嫌いはわかったけど恵もなんで勝負するかな。

「それで歌詞はできたのか千歌?」

「えーなんでまー君も言うの!」

「ははっ、梨子を待たせるなよ」

「もー……そうだよね、梨子ちゃんを待たせるのもね」

海の家のと練習をして恵と練習を眺めて解散。その後は皆で残った食材を食べる夜。

「できたー、船乗りカレーウイズシャイニーと墮天使の涙。はい梨子ちゃんから」

「うっ、うん。あ、美味しい!」

「本当に! パパから教えてもらった船乗りカレーはなんだった合うんだ」

「ふふっ、これなら明日は完売。わたくし達の勝ちですわ」

「お姉ちゃん」

「うん? わっ! どうしたの千歌ちゃん?」

「うん。なんでもないよ……」

「あ……」

「ふー今日も疲れた。明日も早いけど今日は星が良く見えるな」

「まー君……あのね」

「どうした千歌? そんな顔して」

千歌が珍しい顔をしてる。

「あのね梨子ちゃんのことなんでけど」

それから梨子にピアノコンクールの話しが来ていること、それがラ
ブライブの大会と重なっていること。

「それで昨日聞いたんだ」

「うん。それで」

「コンクールに出ないで、だけど」

「千歌が無理やり巻き込んでそれで梨子の夢を潰しているかもって
思っているんだろ」

「うん……」

「梨子の曲聞いたことあるか？」

「そう言えばないな」

「だったら聞いてみたら」

「うん。わかった！ありがとう」

なにか悩みが解消した顔で戻って行った。

「だからって女子二人で夜の学校に行くなよ」

「ごめんなさい」

夜遅くに抜け出す千歌と梨子を見つけて追いかけて校門前でお説
教。

「まったく、ほら音楽室行くんだろう」

「うん！」

夜の学校は暗く怖い。けどなにかワクワクする。そんなこんなで
音楽室。

「はい梨子ちゃん。気づいたら梨子ちゃんの曲聞いたことないなっ
て。ここだったら思いきり引いて大丈夫だから、気持ちを込めた曲聞
きたっくて」

「俺も聞きたいな」

「もうまったく、そんないい曲じゃないよ」

梨子はそう言って引くピアノの音は悪くない。

「いい曲だった」

「千歌ちゃん」

「梨子ちゃんAquoursが大切って言うてくれたのに……ピアノコ

ンクール出て欲しいな」

「……私が一緒じゃいや」

「違うよ！始めは一緒にスクールアイドルを初めて梨子ちゃんの中の何かが変わってピアノのが変わってくれたらって思っていたの」

「千歌ちゃん」

「私にとってこの町は大切な物だから、梨子ちゃんにとってのピアノも一緒じゃないの。私待ってるからこの町で待ってるから、梨子ちゃんが帰ってくるのを」

「ほんと……変な人」

朝日が二人を優しく包み込む。

千歌、俺も言わないとな。

第25話 離れて近づいて

駅の改札口から人が出たり入ったりしてる。

その前で私は千歌ちゃんと手を握っていた。

「しっかりね」

「お互いに」

私は東京に、千歌ちゃんたちは予選へ。

「梨子ちゃんガンバルビー！」

「東京に負けてはダメですよ！」

「そろそろ時間だよ」

「うん」

「チャオー梨子」

「気を付けて」

「ファイトずら」

「それじゃ行ってくるね」

キャリアケースを片手に改札口を抜ける

「次は、次のステージは皆で歌おうね」

「もちろん！」

私はホームに向かう。

見送りに来てくれた皆の中に本当は来て欲しい人は来てくれなかった。

「さあ、練習に戻りますわよ」

「よしこれで予備予選負けるわけにはいかなかったね」

「なんだか気合いが入りまーす！」

「ね、千歌ちゃん……千歌ちゃん？」

東京に戻るの半年振り、いやあのとき皆で行った振りか。

『2番線に三島行きの電車が来ます。黄色い線の内側でお待ちください』

一人で東京か。少し心配だな。

「お嬢さん、一人ですか？」

ほら、知らない人に声をかけられるし、どうしよう無視をしてやり過ぎしたほうがいいのかな。

「あれ、無視ですかーもしもーし」

「……」

「梨子さーん、こっち向いてもいいのでは？」

「なんで、私の名前を！」

「お、やっどこっち見てくれた」

「誠さん！なんでここに」

「いや、ほら。梨子を一人東京に行くのはさびしいと思って」

「だからってホームまで見送りに来なくっても」

「見送り？言っただろ一人で東京に行くのはさびしいだろって」

「それじゃ、もしかして」

「俺も東京に行く」

「え、ええ！」

「そんなに驚くことか？」

「だって今日は予備予選の日よ」

「そうだけどそれが」

「それがって、私なんかより皆のほうに行つてあげてよ」

「私なんかなんて言うなよ、梨子の事も大切なメンバーなんだから」

「う、うんありがとう」

頭に手を乗せてくれる誠さんの顔を見ることができない。

電車に揺られながら沼津の隣の市で降りる。

「あれ、なんで降りる？」

「え、だって乗り換えて新幹線で東京に向かうから」

「新幹線だと」

「ええ、ってあれ」

なんか物凄い勢いで電車を降りてどっかに行ってしまった。

どうしようか悩んだけど時間がないから新幹線の乗り場に向かう。

また一人新幹線が来るのを待つ。

「はあはあ、自由席だよな」

「ええ、もしかして走って買ってきたの?!」

「すごい、ものすごい疲れた」

「で、でしようね」

まさか走ってチケットを買ってくるとは思わなかった。なんだかそのまっすぐな所と、自分以外に注ぐ頑張りが皆に好かれるところなんだよね。

「そう言えばなんで一緒に来たの？」

「ここまで来て帰れは無しだからな！もう熱海通り過ぎていいるんだぞー！」

「帰れとは言わないよ。ここまで来てくれてありがとう」

「お、おう」

「で、本題のなんで一緒に来りてくれたの」

「なんでって、それは梨子が一人に行くのが心配だと思って」

「それで本心は、誰に言われて」

「だから本心もなにも梨子一人が心配だからで、千歌に言われたこともあるけど」

「そうですか、千歌ちゃんはまだ私を心配しているのね」

「いいじゃないか、心配されるのは嫌いか？」

「嫌いではないけど」

「梨子も今、千歌たちのこと心配しているだろ」

「うん、それはね。本当は私も一緒に出るはずだったから」

「同じなんだよ、千歌も梨子が今言ったことを心配しているんだよ」

「そっか。そうだよ、だからお目付役に誠さんを着けたんだよ」

「そうなのかな」

「うん。きつとそうだよ」

笑いながら新幹線に揺られながら東京に着く。

「ここが東京……」

「あれ、誠さんは前は東京に居たんですよね」

「うん。少しの間だけ」

「その時にもう見飽きたんじゃ」

「うーん、そうなのかな」

「私は見飽きたからなのかもしれないけど、新鮮に感じる」

新鮮に感じるのはきつと今住んでる沼津がこことは違って人が少なくなにも無い場所だからなのかもしれない。

それでもあそこにしかない大切場所、大切な人たちと出会えて私は良かった。

「うん。やばっり新鮮だよ」

今あなたが隣にいるかもしれない。

「ねえ、今からどうする？」

「どうするって練習するんだろ」

「うーん、練習はまだ大丈夫かな。今は本番前に遊びたい気分」

「そっか、それじゃどっか行くか」

「うん！」

誠さんと二人で遊ぶのは初めてかも。

二人になったのは夏休み前ピアノを聞いてくれた時以来かな。あの時はこんなふう二人で東京に来て、二人でどこかに行くとは思っていなかった。

私はもしかして少し前進できたのかな。

「それでどこに連れてってくれるんですか」

「どこに行こう」

誠さんとの関係はもしかして一歩後退しているのかな。

あれから何だかんだ言って私がひばっていった。

始めはお昼と言いつい何か食べに行った。

「ここに行きましよう」

「ここはカフェか」

「なんかこのサンドイッチが美味しくてネットに書いてあって」

「ネットかよ。まあ入ろうお腹減った」

「ええ、お腹減りました」

「おお、かなり人気だね」

「さあ、早く注文しましょう、すいませーん」

「えーと、どうしようか」

「私はサンドイッチと食後にパフェを。誠さんは」

「え、待って。俺はー、このスパゲティで」

「もしかして誠さん優柔不断」

「優柔不断ではない、決められないだけだ」

「そのような人を優柔不断って言うのよ」

「はは、そっか。おお来た」

「これが人気のサンドイッチ」

「おいしそうだねって早速写真を撮るのか」

「だって向こうの人たちって写真撮らずにパクパク食べちゃうんですもの」

「それはもう見飽きたものしかないからな」

「だからって私が撮っていると驚かれるのよ」

「それはなんか目に見えるな」

「でしょ、あ、パフェ来たら写真撮るので待っていてください」

「ここはあのあと少し町をぶらぶらしたりして、なんだかカップルのようなことをしていたな。」

カップルはいいすぎか。でも次に向かった場所はカップルが多かった。

「ここは……」

「少し興味あって」

「へー、俺外で待っているから梨子楽しんできて」

「待って。私一人で行かせるの！」

「行かせるもなにも入れないよ」

「大丈夫。二人で行けば怖くない」

「いやいや、行けるかよこんな場所。まだ高校生だぞ」

「高校生も来る場所よ、きつと」

「きつとてなんだよ」

「とにかく来て、一人はいや！」

「あの一どしましたか」

「あ、いえ、大丈夫です」

「そうですか？そのお連れ様は」

「大丈夫です！行くよ誠さん！」

「だからって入れるのこんな女子女子した場所に」

「何を今さら一歩足を踏み入れたら覚悟を決めて買い物に付き合つて」

「付き合うって俺早く出たいんだけど、周りからの目線が痛い」

「それは気のせい。あ、このシュシュ可愛い」

「そうだな」

「それも10色もある」

「それはいいな」

「これ買ってくる」

「おう。シュシュってそんなに必要か？」

確かにあのお店は女子が多くまわりからの目線はすごかったけど、いいものが買えた。明日皆のところに届くかな。

「ゲーセンは初めて？」

「いえ、善子ちゃんに連れられて。善子ちゃんすごくクレイジーゲーム上手くって」

「善子にそんな隠れた力があるとは」

「なんでも墮天使は落ちてるものを拾うのが得意とか」

「おお、なら俺も得意だぞ」

「え、誠さんもゲームが得意で」

「おう。見せてやる」

「見せてやるってこれは、お菓子とかすくうやつでは」

「だから俺もお菓子を救う！あ、今のはお菓子をすくうと救うをかけたいて」

「そんな千歌ちゃんみたいなダジャレはいいです」

「はい……、よし見よ俺の力を！」

「おお、おお！」

「ほらこんなに取れた」

「ふふ、私は写真を撮って誠さんはお菓子を取って」

「それはダジャレかな？」

「え、違います」

「本当に」

「本当に」

ふふ、私の中の緊張は一体どこに行っただか。

「今日はありがとう」

「こちらこそ」

「無事スタジオに着けて練習をするけど聞いてきますか？」

「いや、やめてとく。本番楽しみしているよ」

「はい。それじゃ失敗できませんね」

「大丈夫だよ梨子なら。それじゃ」

「はい、また明日」

夕方になって私をスタジオまで送ってくれて別れた。

「そうだ千歌ちゃんたちに電話しよう」

無事スタジオに着いたことだけでも伝えないと。

「あ、千歌ちゃん。今平気、うん東京のスタジオに着いたから連絡しておこうと思って」

~~~~~

私がいなくっても千歌ちゃんは楽しくやっっている。

私がいなくとも違う人が入っていた。

「やっぱり千歌ちゃんは私より……」

これはあれなのかな、鞠莉ちゃんが言っていた嫉妬なのかな。

もしかして私はずっと誰かに嫉妬していたのかな。

確かに誰にも容量が良いって思われてる。それは千歌ちゃんも思っているんだよね。

だから私なんかより……。

「本音って何て言えばいいのかな」

『千歌ちゃん私と梨子ちゃんどっちが好き』



「これは違う」

『千歌ちゃん私のこと好きじゃないよね』

「これもちがーう！」

『私、渡辺曜は千歌ちゃんのことを全速先進ヨーソロ！』

「うわー、なんか訳わかんなくなってきた」

うん、こんな時に梨子ちゃんから電話だ。

「もしもし、どうしたの？なにかあったの？」

『うん。曜ちゃんが私のポジションで歌うことになったから。ごめんね私のわがままで』

梨子ちゃん知っているんだ。きっと千歌ちゃんが伝えたんだ。

「ううん、ぜんぜん」

『私のことは気にしないで、二人でやりやすい形にしてね』

「でも、もう……」

『無理に合わせちゃだめ、曜ちゃんには曜ちゃんらしい動きがあるから』

「そんなことないよ、千歌ちゃんには梨子ちゃんがいるから。千歌ちゃんも梨子ちゃんのために頑張るっていつているし」

『そんなこと思っていたんだ。千歌ちゃん前話していたんだよ——』

千歌ちゃんがそんなことを思っていたなんて。

千歌ちゃんも思っていたんだ。

私は千歌ちゃんと何かできたらいいと思っていた。なにかしたいと思っていた。

「曜ちゃん」

千歌ちゃんに呼ばれた気がして周りをみると、堤防に千歌ちゃんが立っていた。

「千歌ちゃんどうして」

「練習しようと思って」

「練習……」

「うん。やぱり曜ちゃんの自分のダンスでしたほうがいい！合わせるんじゃないかって私と曜ちゃん二人だけの！」

千歌ちゃんも思っていてくれた。私となにかをしたいと、何かを始めたいと。

「どうして後ろ向いてくるの?」

「いいの。どうしたの、こんなに汗かいて」

「バス終わっていたし、美渡姉たちも忙しいって言うから」

それで自転車で、こんな時間に。

「曜ちゃんずっとなんか気にしていたから、居ても立っても居られなくなってる」

「私、バカ曜だ」

「バカ曜? うわ! 汚れるよ」

「いいの!」

「風邪引くよ」

「いいの!」

「恥ずかしいよ」

「いいの!」

「もうなんで泣いているの」

「いいの!」

「ほら、タクシーの邪魔になっているよ」

「いいの!」

「よくないよ」

「いいの!」

「いや、だめだよ!」

「だってバカ曜だもん」

「いやわからないよ」

「いいの!」

「なんだ解決したのか?」

「あれまー君」

「これはどう言う状態だ?」

「いいの!」

「なにが!」

「さつきから曜ちゃんこれしか言わないの」

「おーい、曜。風邪引くぞ」  
「バカ曜だから風邪ひかないもん！」  
「すごい解釈だな！バカ千歌どうにかできないわけ」  
「うーん、こんな曜ちゃん珍しいからな、わからない」  
「そつか。やつと、自分の思いに素直になれたのか」  
「うん。そうみたい」  
「なんか、さつきから二人だけの空間つくってる」  
「そんなことないよ曜ちゃん！」  
「やつといつもの調子に戻ったか」  
「うん。千歌ちゃん少し恥ずかしいところ見せてごめんね」  
「ううん、少しじゃないよ。いっぱい見させてもらった」  
「うう、そんなに」  
「けど、それで曜ちゃんの新しいことが知れて嬉しい！」  
「千歌ちゃん……！」  
「そうだぞ、これからは周りに辛くなる前に打ち明けろ」  
「誠君……はなんでここに？」  
「千歌から電話受けて急いで東京から来たんだよタクシー使って」  
「そか、ありがとうね誠君」  
「おう」

「私わかった気がするの。千歌ちゃんがスクールアイドルじゃなければならぬのか」  
「うん。千歌ちゃんにとって輝くとは誰かと手を取り合って輝くことなんだよね」  
「私や曜ちゃん。普通の皆が集まって一人じゃ作れない大きな輝きを作る。それが学校や聞いている人に広がっていく繋がつていく」  
「それが千歌ちゃんがやりたかったこと。スクールアイドルに見つけた輝きなんだ」

今頃千歌たちは予選で力を奮つてるときだろう。

そして今梨子も一人でピアノを弾いている。

離れていても思いは同じ。

きっとそれは俺の右手にも皆の右手につけたシユシユが現している。

## 第26話 妹です

昨日は梨子と東京観光をして今日は一人大都会を歩いていた。目的は待ち合わせ場所に向かっているためである。待ち合わせはいが人を待つのは苦手だ。

俺が一人待ち合わせ場所に来て、周りの人は待ち合わせの人と会うが俺の待ち合わせの人が来ない。本当に待ち合わせ場所はここに合っているのか？本当に待ち合わせの人は来てくれるのか？時間を間違っていないかなど心配になる。そんなこんなで待ち合わせ場所で人を待つ。

待ち合わせはUTX高校、大きなスクリーン下。なぜそんな場所が待ち合わせなのかは今から来る人。

「おーい！お待たせ！」

向こうから走ってくる背が小さい少女が待ち合わせ人なのである。

「久しぶりー！」

走ってくるが躓いて倒れそうになるのを受け止める。

「大丈夫か？気をつけろ」

「う、うん。ありがとう……よし」

「どうしたニヤニヤして、頭でも打ったか？」

「なっ失礼な！久々に会って言うこと！」

「はいはい、ほらさっさと行くぞ」

「うん！」

今日は久々に会った妹と東京観光しに行く。

「それで制服なのは今まで学校にいたのか？」

「うん。だから学校に近いここで集合なんですよ」

妹―沢田さわだ明日香あすかは笑みをみせその場でクルリツと回った。

顔を見ると「どう可愛いでしょ？」と言いたげな顔である。

「はいはい」

俺はそれで言って頭をぽんぽん撫でる。言葉にするのはなんだかシヤクだからなにも言わない。

「東京にいきなり来るなんてどうしたの？」

「友達がこつちでピアノの演奏があるから一緒に着いてきた。なんだか心配だから」

「ふーん、仲いいんだね」

「そりやな、俺はなんだってあいつらのプロデューサーだからな」

「なにがプロデューサーだか、このダメダメな兄に何を求めているのやら」

「失礼なことを言う妹の口はこれか」

「いつー、ほへんなさい！」

まったく誰がこんなことを吹き込んだか……一人思い浮かぶ人物が身近にいたな。

「それで明日香は元気にしているのか？」

「元気も元気！」

顔を見ればわかる。だけど晴れて暮らす妹に聞く言葉は決まっている。

「それで前電話したことだけ覚えてる？」

「電話？」

妹と電話はしよつちゆうしているから内容なんて覚えてない。

「やっぱり忘れてるー」

頬を膨らませて怒る。

「今度東京に来たらのつぽパン買ってきてって言ったのに」

「あーそう言えば言っていたな」

すっかり忘れていた。

「のつぽパン沼津でしか売っていないんだから」

あーわかる。なんでのつぽパンは沼津でしか売っていないんだろう。あんなに美味しく種類豊富なのに日本の首都東京に売ってないとか本当になんだか。パンなんだから日本どこでも売っていればいいのに。

「今度来るときは買ってきてよねのつぽパン」

「クリーム味」

「そうクリーム味、あと期間限定味」

さすが俺の妹、わかっている。のつぱパンはクリーム味が一番美味しい、だけど忘れてはならない期間限定ののつぱパン。期間限定味も美味しいのにまた食べたいと思ったときにはもう売り切れ、期間が過ぎてもう売っていないことがある。できれば期間限定味をまた復活してほしい。

「あとみかん！やっぱり生のしぼりたてみかんジュースは美味しい！」

「お前そんなにみかん好きだっけ？」

「最近好きになったの」

「また変な影響を受けたな」

「うぐっ……」

「今度は何を見て影響受けたんだ」

「影響とかじゃないもん。この前見た動画が良かっただけ」

「ほーう、どんなの」

少し気になる。

「えーと、これ」

明日香はスマホ出し動画サイトの動画を見せてきた。

『どうも！今からマルのおすすめ沼津の一品を紹介するね』

クレヨンで書いたような背景に人形が出てきて人形劇のように動いている。

人形がの足元からみかんが出てくる。

『このみかんは沼津が誇る寿太郎みかん』

背景がみかん畑に変わる。

『このみかんは甘くいろんなスイーツに使われているんだ』

上手からみかんのスイーツが沢山でてくる。

『このいろんなスイーツの中からマルの好きなスイーツはこれ！』

ばばんっ！と効果音と共にでてきたものは俺もものすごく知っているスイーツだった。

『みかんどら焼きー』

そう、みかんどら焼きである。

『このみかんどら焼きと一緒に寿太郎ジュースを飲むのがマルのおす

すめずら』

ずら？

『え、えーと、沼津にお越しのさいには是非！以上マルのおすすめでした』

人形が手を振って動画が終わる。

『どおーこの動画この一本しかないんだけどすごく人気なんだよ』

確かに動画はすごい視聴数であり、評価もすごかった。

「コメント欄も反響がすごくて」

コメント欄には『他の沼津品は！』『可愛い声で紹介ありがとう』『次はこれを紹介して』などコメント欄を見るだけでもすごい人気がある。

「ねえ？これみたらみかん食べたくなるよね」

「う、うん」

知っている。この動画を上げている人物を。

「次はどんな動画をあげるんだろう」

知っている。次の動画が上がらない理由を。

「この人形も可愛いんだよね」

知っている。この人形を製作したのが誰か。

「お兄ちゃんがいる沼津で人気じゃないの？」

沼津で人気か？そんなの人気だよ。

だってそれうちのスクールアイドルが作成した動画だから。

俺が知らない間になに作っているんだ！声マルさんでしょ！背景はたぶん千歌！人形は曜とルビィさん！音楽は梨子！動画編集は善子！たぶん三年生もなんだかねで関わっているな。

この動画が想いのほか人気が出てしまいマルさんが緊張してしまいい。善子が自分のサイトより人気が良いのが気に食わないとかなんとかでやらなくなったんだらうな。

「沼津に帰ったら見るよ……」

確認のために。

「さて、なんだここまで来たら」



「歌いますか！」

なので兄弟そろって秋葉まで来てカラオケに行く。  
入ってすぐ歌う。それもアニソンを。

「~~~~♪」

「~~~~♪」

熱唱！

その結果履歴画面四面もアニソンで埋めてしまった。

二時間歌って喉が少し痛い。

「喉痛い……」

「頑張りすぎたね」

二人そろって疲れて外に出る。

「お腹空いたしランチと行きますか」

「それなら秋葉と行ったら」

明日香に連れられて行った場所は……。

「いらしゃいませ、なんで来たのですか」

「ここは……」

「一度は行きたかったけど勇気なく来れなかったんだよね」

勇気があっても俺はこれないな。

「さてお兄ちゃんの財布だから沢山食べよう」

「俺の財布なのかよ」

明日香は人の財布だからって沢山頼んで、「美味しくなーれ」ってケ  
チャップで何とも言えない絵を描かれて「はーあなんでこんなことし  
ないといけないのですか」なんて言われるんだ。

「おい、なんでここに来たんだ」

「なんかこのお店最近人気なんだよね」

こんなDSの店員にツンデレ属性、妹属性、お姉さん属性、アイド  
ル属性など多くの個性豊かな店員がいるんだな。まあ俺のまわりのさ  
らに個性が豊かすぎる人物がいるからな。

確かに面白いお店ではあるな。

~~~~♪

「おっと、悪い電話がかかってきた」

「え、ちよつと」

「戻ってくるから」

「えー」

電話に出るために外に出る。

「どうした？」

『ごめんね、突然……』

「いや、大丈夫」

『うんあのね——』

千歌からの電話の内容はこれまでの千歌から聞いたことが無いほど弱い声だった。

「うーん、これも美味しい！あ、お兄ちゃん」

「悪い俺沼津に少し行くことになった」

「え、ちよつと」

「ここで別れるけど「私も行く！」お前はって来るのか！」

「うん、だってやつと一緒に会えたのに」

「わかった。このお店の料金は割り勘だからな」

「うん！」

会計を済ませてお店を後にする。最後の最後まで「もう二度と来ないでください。塩をまかないと」なんて言い本当に塩を撒きやがって。

駅に行きタクシーを拾う。

「タクシーで行くの」

「電車を待つてられない！」

急いでくれ！

タクシーで沼津まではかなり時間かかった。

曜の家に着くとなんか千歌と曜二人が抱き付いていた。

「なんだ解決したのか？」

「あれまー君」

「これはどう言う状態だ？」

「いいの！」

「なにが！」

「さつきから曜ちゃんこれしか言わないの」

「おい、曜。風邪引くぞ」

「バカ曜だから風邪ひかないもん！」

「すごい解釈だな！バカ千歌どうにかできないわけ」

「うーん、こんな曜ちゃん珍しいからな、わからない」

「そっか。やっと、自分の思いに素直になれたのか」

「うん。そうみたい」

「なんか、さつきから二人だけの空間つくってる」

「そんなことないよ曜ちゃん！」

「やっといつもの調子に戻ったか」

「うん。千歌ちゃん少し恥ずかしいところ見せてごめんね」

「ううん、少しじゃないよ。いっぱい見させてもらった」

「うう、そんなに」

「けど、それで曜ちゃんの新しいことが知れて嬉しい！」

「千歌ちゃん……！」

「そうだぞ、これからは周りに辛くなる前に打ち明ける」

「誠君……はなんでここに？」

「千歌から電話受けて急いで東京から来たんだよタクシー使って」

「そか、ありがとうね誠君」

「おう」

　　なんか解決したみたいだし帰るか。

「あれ、解決したの？」

「なんかな」

「さて東京に帰るか」

「うん帰ろう」

「おのーお客様言いくいのですがお金のほうはあるのですか？」

「お金？ちなみにいくら？」

「68・410円です」

「あの一もう一軒寄ってほしい場所があるのです」

「で、私にお金の工面してほしいと」

「はい……」

「わかったわ。はい」

「ありがとうございます」

「帰るタクシーも無くなったし、時間も時間だから今日は泊まっていきなさい」

「しかたない。また明日東京に戻ろう」

「……しかたない」

「さあさあ、今日は家族三人で楽しく過ごしましょう。誠ちゃん、明日香ちゃん」

今日は沼津で聖来姉と明日香三人の久々に家族で過ごす夜になった。

第27話 姉です、妹です

東京での梨子のピアノコンクールをなんとか見届けることができた。

一事はどうなるかと思った。聖来姉に感謝しなければ。

「おめでとう梨子」

「ありがとう、見ていてくれたんだ」

「梨子の優勝姿を見なくちゃ」

「そ、そうなんだ」

「千歌たちにその姿を見せてあげよう」

「うん」

「ほら、トロフィーを持って写真撮るよ」

「うん」

「はい、りーこ！」

照れながらも笑う梨子。

「ほら、いい写真が撮れた」

「うん。ありがとう、だけど掛け声はなんなの？」

「良かったら」

「うん！」

「あら、お邪魔だったかな？」

「お母さん！変な事言わないでよ！」

「ふふっ、そうだ二人の写真撮ってあげようか？」

「そんな「撮ろう」って梨子！」

「ほら誠さん」

「はーい、撮るよりーこ」

今度照れているのは俺かもしれない。

「そうだ千歌ちゃんたちのほうも上手くいったみたいだよ」

「そっか良かった」

安心して喜んでいる梨子。

ピアノより緊張していたようだ。

「その今日はありがとうございました」
「そんな、俺も梨子のピアノを弾いている姿が見れて嬉しいよ」
「これも千歌ちゃんと皆のおかげ、それに誠さんのおかげ」
「俺はたいしたこととはしてないよ」
「……そんなことないよ」
「梨子はいつ帰る？」
「私はまだ帰らないかな、支度がいろいろあるから」
「そっか、俺も帰るのはいつになるんだろう」
明日香でいろいろあるからな。
「それじゃ帰るときは一緒かもね」
「そうだな、また新幹線で帰ろうか」
「うん！」

梨子と別れて東京の実家に帰る。

「ただいまー」
「おかえりーお兄ちゃん！」
「あれー、この靴はもしかして」
「うん、今こつちに帰って来ているよ」
「マジかー俺もう少し帰るの遅くなるので」
「いやいや、なんでそうなるの」
「だって」

続きを言う前に顔が出てきた。

「帰ってきた誠ちゃん」
「聖来姉！それじゃこの靴は聖来姉のか」
「そうだよ誰だと思っただの？」
「それは……」
「まだ苦手なの」
「苦手って言うより、怖い」
「まったく誠ちゃんは子どもだよね」
「そんなこと言ったら私は一緒に暮らしているのに」

二人の姉妹に言われ放題だが気にしない。

「ほら、ご飯作ったから食べましょう」

「はい」

聖来姉のご飯を食べるために靴を脱ぎ、我が家へ。

今日は沢田家自宅でごはんを食べる。

こんな生活も悪くないだろう。

それで次の日はなんでこうなった。

「おつもい……」

起きたら隣に聖来姉と明日香が寝ていた。

「おーい、狭い」

まったくこの一人用のベットに三人で寝るのは狭いだろ。

「うーん、なーに」

「寝ぼけてないで今の状況を説明しなさい」

「えーと、おはよう」

「うん、おはよう。挨拶できたのはえらいけど説明をください」

「えーと確か昨日途中起きて寒いと思ってお兄ちゃんの部屋に来た」

「なるほど、お姉ちゃんとは違うのね」

「ほーう、聖来姉の理由は」

「そんなの当たり前、誠ちゃんと寝たいから」

「なにが当たり前だよ！その親指立てるな！」

この困った姉をどうするか。

「……ツチ、その手があった」

えー舌打ちしたよこの妹。姉に似て何言っているの。

「そっか、今日か」

「そっか、今日か」

「どうする？」

「そっか、少し出かけてくる」

「えー、お兄ちゃん出かけるの？」

「出かけると言うか、ああ噂をすればだな」

「それじゃ明日香ちゃん、誠ちゃんは電話するから静かにしようね」

「うー、うんー」

明日香は聖来姉に口に手を当てられ部屋から連れられて行った。

「ああ、俺だけど千歌どうした？予選の結果だろ？」

『そうー！それなんだけど明日東京に行くんだけど誠ちゃんはまだ東京？』

「ああ、梨子に合わせて帰るつもりだったから」

『そっか、それじゃ明日東京駅で』

「わかった、それじゃまた明日」

千歌との電話を終え部屋に出るとすごい顔をした明日香を取り押される聖来姉がいた。

「なにをやっているんだ」

「なんか明日香ちゃんが物凄い力で暴れるから」

「だっってお兄ちゃんがまたいなくなってしまうなんてそれはいやだ！」

「つとまあ、大暴れする明日香ちゃんを抑えていたわけ」

「そ、そうなの。お疲れさま聖来姉」

「お兄ちゃん明日出かけるの付き合うからね！」

「まあ、俺はいいけど」

「それじゃ明日は私も付き合おうかな？」

明日は沢田姉弟がいろいろ迷惑かける気がする。

何だかんだで明日が今日になった。

「えー今日は俺の姉妹が着いて来ましたのでお世話になります」

東京駅で待ち合わせになってる千歌たち皆と合流して説明をする。

「誠ちゃんと明日香ちゃんの姉の聖来だよ、皆の顧問ってなってるから」

「聖来姉ちゃんとお兄ちゃんの妹の明日香です。高校1年生です」

「つとまあ、こう言うことなので」

「お世話になります」

「「「「「はあー」」」」」」

なんか凄い困惑しているけど当たり前前だよね！

だっていきなり姉ですとか妹ですとか言われても困るよね！姉に
いたってはA q o u r sの顧問だもん！

けど何か足りない。俺が東京に来た理由になった人が。

「そう言えば梨子は？」

28話 姉です、妹です（鹿角姉妹）

「うっー、閉まれ！」

最後の一人を見つげるために広い東京駅を探すこと数分。

「まだまだー！」

大勢の目線をもものともせず一人ロッカーと死闘を繰り広げていた。

「なにやってるの？」

「え、えーとお土産とかお土産とか、お土産とか」

「お土産！」

「うわー！」

ロッカーからこぼれる大量のおお!?

「おおっ！目の前が真っ暗になった!!」

「お兄ちゃんは見ちゃだめ！」

「なにが！なにが起きたんだよ！」

「誠ちゃん……」

聖来姉から哀れみにみちた名前を呼ばれる。

なんで！なにが起きたんだ！誰か答えてくれ！

「ふー、よし。さあ行こうか」

無事にロッカーに荷物をしまうことができた梨子は何故か満足な顔をしていた。

それに変わり俺と千歌の顔に手の跡がついていた、すごく痛い。

「さて、行こうか」

「行くってどこに？」

「タワー？ツリー？ヒルズ？」

「遊びにきたわけではありませんわよ鞠莉さん」

「そっだよまずは神社」

「また神社？」

「うん、ある人に話しを聞きたくつてすごく調べたんだ」

「ある人？」

「それより千歌が調べものをするとは、そこが驚きだ」

「うんうん」

「酷いなーまー君も曜ちゃんも果南ちゃんも。けど東京で凄い人」

「東京？」

「神社？」

なぜか黒澤姉妹が顔を合わせて興奮する。

「まさか！まさか！！まさか！！！！」

神社に着くと2人の後姿が。

「お久しぶりです」

千歌が挨拶して振り向く2人、Saint Snowだった。

「なーんだー」

何かがつかしたのかその場にへたり込む黒澤姉妹。

「……また、新しい女」

俺の腕にしがつみ付きなにか呟く明日香。

そんな明日香っは何かに気がつきじーっと聖良のことを見る。

「場所を変えましょう」

聖良に連れられて来たのは秋葉駅の目の前UTX高校内の一室。

「はあーなんか凄いとこですな」

千歌が驚くのもうなずける。

外装が綺麗で出された紅茶は美味しい。何より部屋が高い場所にある。

「さて、本題ですが私たちもA—RISEを見てスクールアイドルを始めました」

聖良の口調は冷たいがなにかワクワクしているようだった。

「だから考えたことはあります。あの人たちと何が違くてどうしたらあの人たちのようになれるのか」

「答えはでましたか」

千歌の質問に首を振り答える。

「いいえ、ただ勝つしかない。勝って同じ景色を見るしかない」と

「勝ちたい、ですか……」

「えっ」

「ライブライブ勝ちたいですか」

「姉さまこの子バカ」

「勝ちたくなかったなぜライブライブにでるのですか。なぜあの人たちはライブライブに出場するのですか」

「それは……」

「観に行きませんか？ここで発表されるのが恒例になっているの」

「そう言い千歌たちは外に出っけていた。」

鹿角姉妹も出ようとするのを呼び止める。

「あ、あのあの時はお世話になりました」

明日香が聖良に頭を下げていた。

「あの時？」

理亜は首を傾げていたが姉のほうは何の事かわかっていたようだ。

「やはりあの時の子でしたか」

「はい、覚えていてくれたのですね」

「覚えていすとも、かなり印象深いできごとだったから」

「姉さま何の事」

「理亜が小さい頃札幌で迷子になったこと覚えている」

「ええ、あの時姉さまと同じ名前の人に助けてもらったから」

「ちなみにその時助けたお姉さんはあたしだよ」

「うっわ！あ、あの時の人」

「いやー懐かしいなー、あの時のことは」

「ううっ、私には嫌な思いだよ」

「姉さま、姉さまって迷子になっている時を」

「やめてー！思い出させないでー！」

「わたしの事を呼んでいるって思ったらまさか違う『聖良』だったとは」

「私も迷子になっているこの子から名前を聞いたときは同じ名前の『聖来』って」

なにやら俺の知らないところで沢田姉妹と鹿角姉妹が知りあつて

いたとは驚きだ。

さて俺も千歌たちのところに行くか。

「ねえ、今から音ノ木坂に行かない？」

第29話 思いは風に舞う羽根のように

「ねえ、今から音ノ木坂に行かない？」

外に出て千歌たちと合流しようとする梨子の発言に驚いた。

驚いたのは俺だけじゃなく千歌も曜も、皆驚いていた。

「ここから近いし、前私に我がまま言ったせいで行けなかったから」

「いいの」

「うん。ピアノちゃんとできたからかな」

その言葉に俺は安心した。

千歌たちと出会い、一人で大会に向かい、今ここにいる。

「今はちよつと行ってみよう。自分がどんな気持ちになるか確かめてみたいの」

その頑張りがすごくわかる。すごく成長している。

「皆はどう？」

「賛成！」

梨子の質問にすぐに返したのは曜だった。

前までのわだかまりも消えているみたい。曜も成長しているんだ。

「いいじゃない。見れば何か思うこともあるかもしれないし」

「音ノ木坂」

「あの人たちの」

果南姉、ルビイさん、ダイヤさんと続く。

「母校！」

黒澤姉妹は何か別の事で騒いでいるけど。

「行くか音ノ木坂に」

「おかえり誠」

「だいたい、鞠莉さん」

「誠は知っているの音ノ木坂の場所」

「ああ、微かに覚えているよ、微かに……」

「ふーん、それじゃエスコートしてもらおうかな」

「エスコートですか、鞠莉お嬢様」

「ええ、それが紳士の宿命よ」

「ははは、わかりました」

こうして俺たち一行は目指すは伝説のスクールアイドルの母校、音ノ木坂に。

「ここの上にあるの」

「そうみたいだね」

「つて、誠君の後を追ってきたのに迷子になるとは」

「面目ない」

結局梨子に案内してもらって無事音ノ木坂の長い階段の下まで来ることができた。

俺はまだ成長してないようだ。

「うい、なんか緊張する。どうしようあの人たちがいたりしたら!」

「別に平気ですわ!そのときはサインと写真と握手を」

「落ち着きなさいよ、その黒澤姉妹は」

「善子ちゃん無駄ずら、たんなるファンずら」

騒いでいる人たちがいる中、一番のファンの千歌は階段の上を見続
けていた。

「千歌?」

声をかけようとしたとたん、階段を上りだした。

「あ、千歌ちゃん!」

「ちよつと待って!」

「抜け駆けはするくない」

「ピギィー」

「ずらー」

皆で急いで千歌の後を追う。

階段を上る。

走って。

そしてだんだん見えてくる景色。

階段を上り終えて千歌に追いつく。

顔を上げると、そこに建っているのは大きく、この場所からこの町を見守ってきた高校があった。

「ここが、あのμ□sがいた」

千歌の言葉に皆、感動していた。

「この学校を守った」

ダイヤさんが話す。

「ラブライブに出て」

鞠莉さんが話す。

「奇跡を成し遂げた」

果南姉が話す。

「あの、何か？」

声が出た方に全員で顔を向けると音ノ木坂の制服を着た女子生徒が。

「なんだかゆるふわガールっていつのか。」

「私の存在を検知している」

「やめるすら」

「検知？」

「このバカ墮天使は気にしないでください」

「バカ善子のおかげで恥ずかしは！」

「すみません、見学に」

「さすが曜！ナイスフォロー。」

「もしかして、スクールアイドルのかたですか」

「あ、はい。あの人たちのことを知りたくて来たのです」

「そう言う人多いですよ」

「……良かった、千歌だけじゃないんだ」

「なに小さな声で安堵しているんだ。」

「でも残念ですけどここには何もな残ってなくって」

「え、何も」

「はい。あの人たちは何も残していかなかったらしいです。自分たちの物も優勝の記念品も記録も。物が無くっても心が繋がっているか

らって」

心が繋がっている。

「それでいいんだよって」

なんかそれが聞けて安心した自分が心の中どこかにいた。

「行くよー！」

大きな声とともに走ってくる女の子。

「それっ！」

女の子は器用に階段の手すりを滑り下りていった。

なんか危険な行為だけど子どもは元気が一番だもんな。

滑り降りるところっちを向いて笑顔でVサインをおくってきた。

俺もVサインを送り返す。もちろん笑顔で。

「……このロリコン」

「誰だ俺をロリコン呼ばわりした奴は！今いい場面だろ！」

俺の叫びを無視するメンバー。

「どーお、何かヒントあった」

おっと、流しますか梨子さん。いいですよ、このまま流してくれた

ほうが俺もいいので。

「うん、ほんのちよつとだけど。梨子ちゃんは」

「うん。私は良かったここに来てはつきりわかった、私この学校好き

だったんだなって」

梨子は満足した顔をして音ノ木坂を見る。

千歌も音ノ木坂を向く。

そして頭を下げた。

一瞬皆、顔を合わせたか笑い、一緒に頭を下げる。

「」「」「「ありがとうございました」「」「」「」

誰も不思議に思わない。

それは心がきつと繋がっているからだと思った。

頭を上げ、いろいろ説明をしてくれた音ノ木坂の女子生徒にも礼を

言おうと思ったがいつの間にか消えていた。

その後俺たちは帰りの電車の中にいた。
聖来姉はなんか数日明日香の方に残るらしいから俺は先に帰ることにした。

『お兄ちゃんも残って』

明日香がしがみついてきたが、俺は帰ることにした。

「けつきよく東京に行った意味はあったのです」

隣で寝るルビイさんを起こさないように言うダイヤさん。

「そうだね、あの人たちの何がすごいのか、あたし達とどこが違うのかはつきりとはわからなかつたかな」

「果南はどうしたらいいと思うの」

「私、うーん私は学校は救いたいけどSaint Snowみたいになれない。あの二人なんだか一年の時の私みたで」

「ビツクになってね果南も」

「訴えるよ」

「ビツク……」。

「誠は殴る」

「えっ！なんで理不尽な！」

「静かにしなさい、ルビイが起きてしまうでしょ」

駅に停まり扉が開く。

「ねえ、海見ていかない。皆で！」

何を思ったのか電車を降りる千歌。

「海……」

先まで寝ていた梨子と曜、一年ズが起きる。

ダイヤさん怒っているだろうな。

「うわーきれーい」

「ずらー」

ルビイさんとマルさんが夕焼けの海を見て感動する。

「私ねわかつた気がする」

海に乱反射する夕日を見る千歌の背中が語る。

「あの人たちのなにか凄かつたのか」

「本当？」

「たぶん、比べたらダメなんだよ、追いかけてやダメなんだよ」
海を見て話す。

「あの人たちも、ラブライブも、輝きも」

「どう言うこと」

「さっぱりわかりませんわ」

善子、ダイヤさんの疑問に俺も最初は戸惑った。

「そお、私はなんとなくわかる」

果南姉の言う通り何となく。

「一番になりたいとか誰かに勝ちたいとかあの人ってそうじゃなかったんじゃないかな」

梨子が千歌の背中を見て言う。

「うん。あの人たちの凄いとこってきつと何もないモノを何もない場所を走り切ったことだと思う」

顔を上げ言う。

「皆の夢を叶えるために」

夢を叶えるため、か。

「自由に真つすぐにだから飛べたんだ、あの人みたいに輝きたいとつてことはあの人の中を追いかけることじゃない。自由に走ってことじゃないかな！混信全霊、何にもとらわれずに、自分たちの気持ちにしたがつて」

「自由に」

「ランエンドラン」

「自分たちで決めて自分たちの足で」

果南姉、鞠莉さん、ダイヤさん。

「なんかわくわくするずら」

「ルビィも」

「全速前進、だね」

マルさん、ルビィさん、曜。

「自由にバラバラにならない」

「どこに向かって走るの」

善子、梨子。

「私は0を1にしたい。あの時のままで終わりたくない」

「千歌ちゃん」

「それが今向かいたいところ」

「うん、皆もきつと」

「ふふふ、これでやつと一つにまとまるね」

「遅すぎますわ」

「皆シャイですから」

皆千歌と一緒に向かう。

「じゃあ、円陣やろ」

「ちよつと待って、指こうしない」

曜が提案する。

「これを皆で繋いで、0から1へ」

「それいい！」

「でしょ」

「0から1へ、全力で輝こう！」

俺は見守る。

「A q o u r s」

「」「」「」「サンシャイン！」「」「」「」

彼女たちの笑顔を。

「千歌」

「まー君、これ」

「羽根か、飛べるな」

「飛べる」

「大丈夫、その思いは輝ける。お前たちは輝ける」

「うん！」

思いは風に舞う羽根のように飛んでいき、誰れかの目の前に舞い降り受け継がれるもの。

そうすれば輝ける。

第30話 輝け！

「ルビイちゃんはもう少し早く」

「はい」

「善子ちゃんは——」「ヨハネ！」、さらに気持ち急いで」

「招致。空間移動使います」

暑い太陽が照らす屋上で果南姉の指導のもと、練習をするメンバーたち。

俺はそんな姿を頭からタオルを被り応援していた。

「あつーい……」

クソツ、なんだ暑さは。俺を丸焼けにする気が太陽！

「よし、休憩しよう」

パンツと手を叩き果南姉から休憩の合図をもらうとその場に倒れ込むメンバー。

倒れ込むが地面は太陽の熱で暑いが今の彼女たちはそんなの気にしない。

「暑いじゅらー」

「今日も真夏日だって」

「はい、水分補給を取る約束」

「それは曜にもだよ」

「うん、ありありだとう」

ルビイさんとマルさんにペットボトルを渡す曜に俺がペットボトルを渡す。

「今日もあついねー」

「休まなくっていいのですの」

「果南はシャイニーな子ですから」

「いやいや、休みましようよ三年生方」

果南姉、ダイヤさん、鞠莉さんにもペットボトルを渡す。

「うー」

「だから黒いのはやめときなさいっと言ったでしょ」

ダイヤさんに怒られながらも、

「黒は墮天使のアイデインテイ」

わけのわからない事を言う善子。

「はいはい、水飲みましようね」

「ありがとう」

善子にもペットボトルを渡す。

「それにしても夏だな」

「そうだね、夏って感じ」

「梨子ちゃん。今夏だよ」

「わかっているわよ！それより千歌ちゃんも水分取って」

「うん。私夏好きだな」

ペットボトルぐしに空を見る千歌は目を細め楽しそうな顔をした。

「よし、練習再開しようか」

「ぶつぶー！」

ダイヤさんが顔の前でバツテンを作ってみせる。

「オーバーワークは禁物ですわ」

「b y 果南」

「そっか、これから暑くなる時間帯か」

「頑張っても休む時間も必要ですわ」

「さすがお姉ちゃん」

さすがダイヤさん。

「その前に皆百円だして」

「クククツ、本日のアルティメット・ナグナロク」

善子がとうとう暑さで頭が……。

「はい、じゃーけん！」

果南姉の号令とともに右手を上げる9人。

「なんで、いつも負けるのかしら」

コンビニへ皆のぶんのアイスを買いに来た善子はレジの前で自分のチョコキで首を傾げていた。

「それは、お前が墮天使だから」

「って、なんであなたまで来ているの！そして誰よ高いアイス買ったのはー！」

「それ俺のだ」

「あんたかいー！」

俺は善子の買い出しついでに飲み物を買いに来たんだ。

別に善子の心配で来たんじゃないからね！

「ずらー」

「ぴぎー」

「よはー」

一年は扇風機の前で陣取り、後ろで梨子さんが凄い顔をしている。

「冷房欲しいよねー」

「そうだよねー」

「統合の話しが出ている学校にそんな予算でこからでるの」

「二ですよねー」

ようちかがアイスを吸いながら言う。

「そう言えば学校説明会の参加者はどうなっているの？」

「それはよつと」

鞠莉さんが華麗に台を乗り越える。

まあ、ダイヤさんには怒られるけど。

図書室のパソコンを動かし確認する。今更だが、この人達図書室で

飲食しているんだが。

「今のところ……ゼーロー」

「そんなに魅力ないのなかな」

一瞬暗くなる空気。

ガラガラとドアが開く。

「あれ千歌たち」

「むっちゃんたちこそ」

「私たちは本を返しに。千歌たちは今まで練習？」

「うん。もうそろそろだから」

「この暑さの中で」

「毎日だから慣れちゃった」

「千歌ー、練習始めるよ」

「わかった果南ちゃん。それじゃ」

「う、うん。頑張つて」

むつちちゃんたちに見送られ屋上へ行く千歌。

俺もまた炎天下の場所へ。

「ねえ、誠君」

「うん？」

「毎日練習しているの、千歌たち」

「ああ、この夏休み」

「夏休み毎日」

「まあ、時々休むけど」

「けど毎日でしょ」

「そうだね、毎日」

三人からの質問に答え、なぜか唸る三人。

「そつかすごく輝いているね」

そう言われて俺は笑みを浮かべて答える。

「ああ、一番輝ている」

練習が終わり空は夕焼けに。

「お疲れ」

俺は皆にタオルと水分を渡す。

「果南姉と鞠莉さんと善子はこれ」

「なんで私たちだけ」

「ジャンボタオル」

「なのよ、そしてヨハネ」

「だってこの後プールに飛び込むでしょ？」

「二はい……」

毎回練習終わりにプールに飛び込み濡れて帰る三人。今日は大き

なタオルを持って来たからこれで拭いて帰ってもらおう。

「いたいた、千歌ー！」

遠くで千歌を呼ぶむっちゃんたち。

「あのね、千歌たちの姿をみてね」

「スクールアイドルって楽しいのかなって」

「私たちもスクールアイドルになれるのかな？一緒に学校を救えないのかな」

むっちゃんたちの話しを聞くと他の生徒たちも何かしら思うことはあったようだ。統廃合に仕方なさを思う中、千歌たちの頑張りを自分で自分たちに何かできることができないかと思ふのではないかと思ふことがあったようだ。

「だから学校を救ったり、キラキラ輝くことが私たちにも何かできんじやないかって」

「やろう！皆一緒に！」

千歌の声とともに盛り上がる皆。

舞台は名古屋。駅近くの噴水前で集合。

そこに現れたのは学校の全生徒。

しかし、

「ごめんなさい！」

梨子の声。

「ステージに出れるのは事前にはエントリーしたチームだけ。それにステージに近づくことも禁止されているの。ごめんなさい。はやく言えばよかったのに」

頭を下げる梨子。

「頭を上げて。俺もステージの近くで応援したかったけど客席で皆と応援するから頑張ってきてくれ、なあ」

俺は全生徒に言う。

「うん。観客で応援する」

「宇宙一の応援をするよ」

「ありがとう、優勝してくるから」

「ああ、優勝してこい！」

千歌に拳を向ける。

千歌たちはステージに向かう。

俺たちは観客席で彼女たちの輝きを応援しに別れる。

Aqoursの番になりステージの上では学校のこと、町のこと、これまでの道のりを語る。

歩み、悩み、もがき、楽しみ、泣き、止まっては歩き。立ち止まる。

何度も訪れる『0』の数字。

それでもあきらめない彼女たち。

憧れに向かつて。次へ。

自分たちだけの物語しんせかいへと船を漕ぎだす。

青い空の下で、輝くために。

新しい景色掴むために。

「皆、一緒に輝こう！」

千歌が手を伸ばす。

俺も手を伸ばす。

背中を押され振り返ると、千歌のお母さんがいた。

俺は領きステージ近くに走る。

それに続くように全校生徒、客席にいた皆もステージ近くへ。もちろんしいたけも。

これまで以上に綺麗に輝く彼女たち。

俺は感動した、この場所に來れたことに。

彼女たちを応援してきたことに。

そして、この瞬間に。

すべてはゼロから始まり、1つまた1つと歩んできた。
それはやがて9になり、彼女たちの物語ができた。
そして1に0を付け、10になる。
俺と彼女たちによる新しい物語が始まる。